

埋文 13

守山区中志段味

天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書

1985

名古屋市教育委員会

守山区中志段味

# 天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書

1985

名古屋市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和59年10月15日から翌年2月15日にかけて実施した、天白・元屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに、国庫補助金の交付を受けて名古屋市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、同市教育委員会見晴台考古資料館学芸員平出紀男・水野裕之・伊藤正人、文化課学芸員小島一夫が担当した。本書作成もこの4人による。
4. 発掘調査の排土工事部分については、造園工事業者であるコジマガーデンが工事請負によって実施した。
5. 出土遺物は、現場仮設事務所において水洗・整理作業を行った。調査終了後は、資料館において整理作業を行った。
6. 写真のうち、現場写真は平出・水野・伊藤が、遺物写真は水野・伊藤が撮影した。
7. 実測図は、平出・水野・伊藤が作成した。
8. トレース及び図版作成にあたっては、青木修・郷由佳君らの協力を得た。
9. 本書の執筆分担は、各項の末尾に記した。
10. 本書で用いた方位Nは真北である。海拔高は、本文及び図版3・4では東京湾の平均海面（T.P.）、図版5～10及び一部本文中に示したものについては名古屋港工事用基本水面（N.P.）を用いた。N.P.=T.P.+1.4119m。
11. 発掘調査に対して快諾をいただいた地主の方々の名を記して謝意を表する。  
荒川和久・安藤義孝・安藤友子・安藤孝子・印牧富郎・下里和子・田中須磨子・谷口一夫・野田一由・野田鏡一・野田鎮夫・野田強・日比野恵一・深田速雄・八神八太郎・有限会社名古屋ベンド製作所。(敬称略)
12. 発掘調査の実施に際しては次の方々に御協力いただいた。記して謝意を表する。  
安藤雪枝・川本重信・川本昇・知野見勝・野田勝秋・野田常一・野田輝巳・野田直己・野田ヨシ子・野田貢・深田春義・堀江一三・県立守山高等学校。(敬称略)
13. 報告書の作成に際しては次の方々に御教示をいただいた。記して謝意を表する。  
犬塚康博・仲野泰裕・七原恵史。(敬称略)
14. 図版1・2の村絵図は、徳川黎明会の御好意により徳川林政史研究所所蔵品を複写して使用した。

# 目 次

## 本 文

第 1 章	調査の経過	
第 1 節	調査に至る経過	1 ~ 3
第 2 節	調査の経過	4
	(1) A 区	5 ~ 6
	(2) B 区	7
	(3) C 区	7 ~ 8
	(4) D 区	9 ~ 12
	(5) E 区	13 ~ 14
	(6) F 区	15
第 2 章	遺跡と遺物	
第 1 節	遺跡をとりまく環境	16 ~ 17
第 2 節	調査した遺構と遺物	
	(1) A 区	18 ~ 21
	(2) B 区	22 ~ 23
	(3) C 区	23 ~ 24
	(4) D 区	25 ~ 28
	(5) E 区	29
	(6) F 区	30 ~ 31
	遺物観察表	32 ~ 43
第 3 章	結びにかえて	44 ~ 46
付	発掘調査日誌抄	47 ~ 48
註		48

## 本文挿図

第 1 図	C 区 Gr. 配置図	8
第 2 図	2 C Gr. 土師器出土状況平面図 (A 区)	19
第 3 図	B 区 II 層中遺物出土状況	22
第 4 図	石鎚実測図 (F 区)	30
第 5 図	各発掘区の基本層序対比模式図	46

## 図 版

- 図版 1 中志段味村絵図（寛政 8 年）  
〃 2 中志段味村絵図（幕末）  
〃 3 遺跡位置及び周辺遺跡分布図  
〃 4 遺跡周辺地形及び発掘区配置図  
〃 5 A 区全体図・セクション図  
〃 6 A 区セクション図、B 区セクション図  
〃 7 B 区遺構平面図、C 区セクション図  
〃 8 D 区遺構平面図・セクション図  
〃 9 D 区セクション図、E 区遺構平面図・セクション図  
〃 10 F 区集石分布図・セクション図  
〃 11 A 区出土遺物  
〃 12 A 区出土遺物  
〃 13 B 区出土遺物  
〃 14 C 区出土遺物  
〃 15 D 区出土遺物  
〃 16 D 区出土遺物  
〃 17 E ・ F 区出土遺物

## 写真図版

- 写真図版 1 全景・A 区  
〃 2 A ・ B ・ C 区  
〃 3 D ・ E ・ F 区  
〃 4 A ・ B 区遺構・遺物出土状況  
〃 5 D 区遺構・遺物出土状況  
〃 6 C ・ E ・ F 区遺構・遺物出土状況  
〃 7 A 区出土遺物  
〃 8 B ・ C 区出土遺物  
〃 9 D 区出土遺物  
〃 10 D ・ E ・ F 区出土遺物

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

名古屋市の東北部に位置する守山区は、市内でもっとも文化財の豊富なところである。その種類は有形・無形の民俗文化財から木造・石造の建造物、植物の稀種や信仰を集める大木など、多様な方面にわたる。埋蔵文化財もまた同様で、ことに大小の古墳の多さ、多様さは市内随一である。

この守山区のうち、いわゆる瀬戸街道に沿う旧守山、小幡などの地は、交通の便にめぐまれたこと也有って、はやくから名古屋のベッドタウンとして住宅地化が進行しており、このため昭和38年には当時の守山市が名古屋市と合併することになった。

これに対して、竜泉寺の丘陵を北に越えた志段味地区は、地区内を貫く交通路が狭い田代・多治見線1本ということもあり、都市化・住宅地化の波から取り残され、最近まで豊かな田園風景をとどめることになったのである。

ただし、この志段味地区のいわば現代都市化への努力が払われなかったわけでは決してなく、合併後の昭和40年には旧守山市時代の検討を受けて、域内の主要道路網が都市計画決定されているし、東北端の東谷山一帯を除いて市街化区域に指定されていて、いわば都市化、住宅地化は目前といった状況である。そしてまた、合併後ただちに地元から、名古屋方式の開発手段である土地区画整理の実施の意思表示があり、検討が行なわれた。この時の検討は、字上志段味から字吉根までの4地区を全部まとめて1つの整理組合によって施行するというものであり、結局地元の全体の意思をまとめきることができないまま、立ち消えになったと聞いている。

名古屋市としても、この地区の都市化を放置し、民間サイドによる無秩序な乱開発に委ねることはできないという判断をし、従来の開発手法を継承しながらより広い視野からこの広大な地域の都市化をはかるべく、昭和54年、「志段味地区のまちづくり基本構想」を作成する目的で、各局の担当者を集めてまちづくり研究班を設置した。

一方、教育委員会のこの地区に対する行政は、他と同様に開発の後手にまわった。まず問題を生じたのは、上志段味にある全長100m余の古式の前方後円墳、白鳥塚古墳で、昭和40年代に入り、まず前方部左側の周濠の一部が埋められ、R C造社宅が建てられた。次いで昭和45年頃、くびれ部から前方部にかけての部分が売却され、宅地

化される危機に直面した。これに対しては、直ちに同古墳を国史跡に仮指定し、所有者に買収を持ちかけるなどの努力が、主に愛知県教育委員会によってはらわれ、昭和47年8月、国指定史跡となった。

この白鳥塚古墳と、周濠を含めて極めて良好な状態にある勝手塚古墳の2基については、昭和40年に計画決定された都市計画街路によって前者は後円部端が、後者は前方部の約半分までが削除されることになるという事実も、都市計画決定後に判明したように、全体にまったく開発側のペースで事態が進行した。この時点で、教育委員会側としては、昭和38年に愛知県が全県下一勢に実施した遺跡分布調査の成果以外には資料をもたないようなありさまであったのである。

そこで、昭和53、54年に志段味地区を中心とした守山区の分布調査を実施し、その結果をまちづくり計画に反映することを考えた。今回、確認調査を実施することにな



分布踏査時全景(東から)

った天白・元屋敷遺跡は、地元に詳しい一部の研究者の中にそれとなく遺物の出土情報は伝えられていたようであるが、正式に遺跡と認定されたのは、この時の分布踏査の結果で

ある。これにより昭和55年3月、守山区遺跡分布図を刊行した。

これを受けた、まちづくり研究班による開発計画の検討では、その冒頭に志段味地区開発の主要なテーマの1つとして、「自然環境（農地を含む）及び文化遺産の保全」をあげて、問題が詰められることになった。しかしながら、具体的な方策となると、現時点での日本全体の環境行政がそうであるように、「緑地保全地区」指定という具体性を伴う自然環境保全に比べて、「原則として保存する」という抽象論にとどまり、且またその関心は専ら地上構築物を有する古墳・古窯に傾いている。

昭和56年、名古屋市文化財調査委員会は教育委員会に対して、「志段味地区文化財のとりあつかいについて」という提言を成した。この提言の骨子は、志段味地区がいか

に優れた文化財にめぐまれているかを明らかにしたうえで、「志段味まちづくり基本構想」にもとづいた開発計画のなかで、極力文化財保全に意を用いるよう訴え、その具体策のいくつかを示したものである。

この中で、文化財調査委員会は志段味地区の埋蔵文化財以外の文化財が、内容豊かであり、まとまった優れたものであることに注意を喚起する一方、従来さして注目されてこなかった集落遺跡、ことに今回調査した天白元屋敷遺跡について、強い調子でその重要性を説いたのである。それによると、本遺跡は現状地表面から大破片良好な状態の遺物が多量採集されることから、集落遺構の存する可能性とともに、地勢的に庄内川舟運の川湊であった可能性を指摘、また文献上に記載がありながら、現状で所在不明の志段味城についても考慮するよう求めている。

「志段味まちづくり基本構想」が発表されて以後、志段味地区では主として行政指導により、開発の方向へと踏み出し始めた。かつて検討された区画整理方式に関する反省を生かし、大幅に公費負担を可能にする特定区画整理方式により、かつ字4区を別々の組合により施行するということで動き出したのである。

これとは別に、志段味4地区の中では最も広い洪積平面を持つ中志段味地区では、民間資本によるミニ開発が進行し、無秩序な乱開発・都市化が憂慮の事態となって来て、これを一つの材料に地元住民の間で開発是否を含む論議がたかまりつつあった。天白元屋敷遺跡のある地帯も、進入道路が全くないにもかかわらず地区外の人にも売却されはじめている。

このような状況の中で教育委員会としては、文化財調査委員会の提言中にも多様な可能性を指摘された天白元屋敷遺跡が、表面採集の状況などから60,000m<sup>2</sup>にも達すると想定されながら、正確な範囲も定かでないままに開発行為に直面する事態を避け、むしろ積極的な保護施策を展開するために、国・県の指導により長期的展望にたって本遺跡の範囲、性格を確認する調査を実施することにした。本年度の調査はその初年度であり、ひきつづいて数年、本遺跡での確認調査を計画するとともに、その成果をもって直ちに開発担当部局や地元との間に充分な調整をはかりつつ、本遺跡の可能な限りの保護・保存を行なってゆく所存である。この遺跡を中心とした史跡（遺跡）公園等の構想についても、近いうちに明らかにしてゆきたい。

（小島）

## 第2節 調査の経過

調査区は、推定遺跡範囲周辺にそれぞれ6箇所設定した。昭和53年に当市が実施した分布調査の結果で推定された遺跡範囲は、南北約375m・東西約175mのほぼ南北に延びる楕円形を呈し、約60,000m<sup>2</sup>の広大な面積を占めている。現在、この地区は、畠・水田に利用されて人家は全く皆無で、遺跡西隣に昭和49年に設立された県立守山高校がある。遺跡範囲立地以南の地形は、標高約43mの中位河岸段丘面を基盤とする丘陵が庄内川に沿って東西に延び、遺跡が立地する標高約26~30mの旧河床面と崖状の段差を形成している。また、遺跡が立地する低位面でも、標高約28mの等高線が示すように南北約300m、東西約100mの微高地が舌状に南へ張り出しており、最南端の丘陵と連なる最低位面と約0.8mの段を形成している。この微高地で最も高い箇所は、庄内川堤防近くで標高30.7mを計測する。この微高地は東側では現在水田に利用されている面と約0.6mの段を成すが、西側は守山高校構内まで縁辺部が続くようであり、西限は不明である。遺跡推定範囲は、この微高地に対応して南北に延びている。

西北限位置は、標高約28mで微高地より約2m低くなっている。この地形及び遺跡範囲を勘案して、西・西北・南の周辺にそれぞれ調査区を設け、遺跡範囲を確認するため5箇所、また遺跡内で、遺跡がどの様な状況であるかを確認するため1箇所と、調査を行なった。今回がこの遺跡に対して、最初の本格的な調査であるため、厳密に掘削及び遺構検出を試みたが、後述するように遺構検出に手間取ったことから、調査面積は、期間の都合とあわせて約1,000m<sup>2</sup>であった。各調査区は表1に記す。（平出）

区	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	多角点値 (m)			
			X		Y	
A	245	10/16~11/21	1 A	1 G'	1 A	1 G'
			-83,242.494	-83,231.895	-12,544.695	-12,522.053
B	60	1/10~ 1/24	1 A	1 C	1 A	1 C
			-83,333.259	-83,332.173	-12,629.397	-12,619.456
C	250	11/16~12/10	E	W	E	W
			-83,157.725	-83,147.189	-12,639.753	-12,662.425
D	200	11/26~ 1/24	1 A	1 E	1 A	1 E
			-83,237.666	-83,241.665	-12,653.119	-12,633.529
E	106	12/25~ 2/ 4	1 A	4'A	1 A	4'A
			-83,305.696	-83,319.681	-12,554.065	-12,554.718
F	140	1/18~ 2/ 6	4'C	4'A	4'C	4'A
			-83,358.876	-83,360.579	-12,646.872	-12,656.726
計	1,001					

表1 各調査区データー

### (1) A区

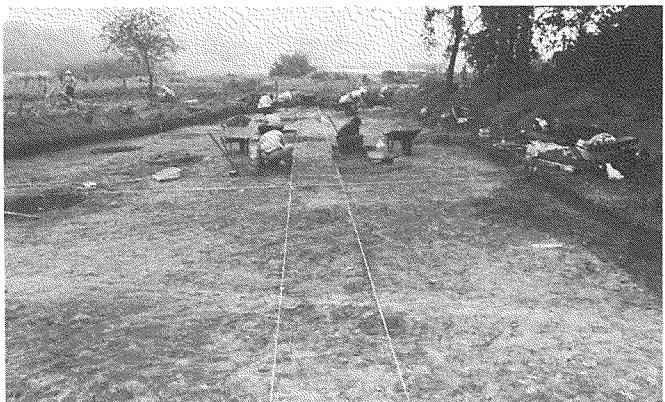
最初の調査地点となった当区は、今回の6地点の調査区のうちでは最も高位にあり、地表面の標高は31m前後（名古屋港海水面標高）である。北方の庄内川寄りにはさらに1mあまり高位の地形があり、微高地の一部にあたる。10月16日から雑木などの伐採にはいった。地表は腐植土が被っているが、隣接する畠地の地表には山茶碗などの細片が散布している状況である。伐採終了後、排土置場を除いて約250m<sup>2</sup>の範囲を発掘調査の対象としたが、土地に合わせた調査区のため不整形な形状となった。そこで、調査区の北側を任意の基準ラインとした4×4m単位のグリッドを設定した。腐植土の直下は、耕作土が薄く堆積しているが、これらを除去する段階で10~20cm径の雑木の切り株が各グリッドに残り、これが障害となって根を取り除くのに手間取った。一部で試掘坑をあけ、土層の状況を観察しながら掘削を進めた。耕作土を第Ⅰ層とし、以下遺物包含層の第Ⅱ層となるが、第Ⅱ層上部では山茶碗、古瀬戸の細片が多く須恵器、土師器の細片、近世陶器片も少量含んでいる。土質は、灰褐色を呈する砂質のシルト中に0.5~3cm大の礫を含むもので、場所によって礫の大きさ、粘性など変化がみられる。また、上部の層では乾燥が激しく色調などの変化を確認するのが困難な状況であった。中世の遺物を多く混入する第Ⅱ層上部以下は、幾分黒ずんだ褐色のシルト質が続くが、ここにも小石を多く含む部分や、そうでない部分がみられる。おおよそ調査区の北東部に礫の混入が多く、西半部分は少ないようである。このことは、堆積状況の違いを表わしていることは言うまでもないが、時間的な差を示し傾斜した堆積層の平面的な掘削による状況であるかもしれないが、調査時の観察では断定できるほど明瞭ではなく、範囲も複雑であったためこれらを脳裏におき、遺物採取袋のラベルにもグリッド間の土の違いをメモするように心がけて掘削を進めた。第Ⅱ層上部を除去した段階で遺構等は検



発掘調査開始風景

出されず、第Ⅱ層上部で取りあげた中世陶器などの遺物は5cm以下の細片が多かった。第Ⅱ層上部以下からは須恵器片、土師器片の出土量が多くなってくるが、山茶碗片、古瀬戸片も少量混入している。須恵器では高台付の杯と頂部に鉢を付けた蓋が比較的原形をとどめて出土する例が多いが、1点に集中するなどの出土状況はあまりみられない。また、数点がほぼ同レベルで1m以内の距離をもって検出された例がある。このような場合、面的な精査を繰り返しても遺構等を明確に捉えることができなかった。第Ⅱ層下半部では、1BGr.と2CGr.で土師器の甕の破片が径10cmほど長さ20~25cmの角柱状を呈する礫の周囲や、これに密着して出土し、付近には1~2cm大の橙色焼土ブロックや炭化物粒子が散在している状況が検出された。第Ⅱ層の下は白っぽい砂層が堆積し、砂層上部から60~80cm下で径10~25cm大の礫層にあたる。この礫層の石の種類は、当遺跡北の庄内川河原礫と同種のものが多い。この礫層を第Ⅳ層とし、この上の砂層を第Ⅲ層と呼称した。数箇所の試掘坑から、第Ⅲ層、第Ⅳ層上部は無遺物層と考えられる。第Ⅲ層の上面が露出してきた段階で、発掘区の西端部グリッドでは、まだ第Ⅱ層が残存する状況であり、西側に下がる傾斜と考えられるが場所によっては、人為的に下げられたかのように見える。調査区内だけの状況では不明確であるが、堆積土層、出土遺物などから判断して自然地形の可能性がある。第Ⅲ層上面での遺構検出作業では、上面にわずかな起伏がみられ、凹みに溜った部分を遺構として記録することのないよう慎重になった。その結果、径20~40cm大のピットが10基と幅40cmほどの浅い溝が2条検出されたのみであった。11月12日からは土層セクションの実測にはいり、11月22日までに遺構平面図、写真撮影などの発掘調査作業を終えた。11月28日から12月3日までの5日間をかけ、A区の埋め戻しを行った。また、グリッドの国家座標位置は、後日測量を行った。

(水野)



発掘調査状況

## (2) B区

B区については、10月下旬に試掘及び発掘区設定を行った。しかし、実際発掘を開始したのは、A・C区が終了、D区がほぼ終了した翌年1月上旬、E区と平行してであった。B区は微高地の南端に近く、標高はA区より20~30cmほど低くなる。現状は荒地で、草刈り・根の除去にやや時間を要した。発掘区は、排土置き場との関係から、東西10m、南北6mの長方形とし、南北に長い5m×6mのGr.2つに分け、西側を1AGr.東側を1BGr.とした。(第3図参照)

かつて畠地として利用されていた時の耕作土をI層とした。II層は、かなり均質な砂がちの土層となる。II層上面において遺構検出を行ったが、攪乱も含めて掘り込みは認められなかった。そこでII層上部(深約20cm)の掘削を進めたところ、その深い部分、つまりII層中位より、かなり原形を留めた須恵器等が出土した。これらは、発掘区北壁寄りの中央付近にかなり集中した状況を呈した。そこで、これらの遺物出土レベルで再び遺構検出を行ったが、やはり掘り込み等は見つかなかった。ただ1BGr.南壁際で須恵器片がまとまり、その下部に凹みが見られたのでこれをK-1とした。セクションについても、北壁及び一輪車道を兼ねて残した1A・1BGr.間の南北ベルトを観察したが、遺構等は認められなかった。南北ベルトはこの時点で取りはずし、II層下部を掘削した。遺物はまばらとなり、掘削は順調に進んだ。III層上面での遺構検出でも、やはり遺構はほとんど見られず、1AGr.南壁際でK-2が確認されたのみであった。試掘とE区での土層観察から、III層を地山とし、土層観察のため発掘区北及び東壁際にトレーニングを入れ、一部をV層まで掘り下げた。トレーニング内のIV層上面でも遺構は見られず、遺物も出土しなかったため、掘削はこれをもって終了とした。発掘区北・東壁セクション図、K-1・K-2及び全体実測図の作成、写真撮影等の記録作業を1月下旬に完了し、2月上旬埋め戻しを行った。

(伊藤)

## (3) C区

C区は、庄内川堤防に近い低地に設けたものである。現在水田として利用されており、地表面は標高約28.1m(N.P.)でほぼ水平である。発掘区の設定に際しては、水田のアゼを極力避けつつ広い範囲をカバーするべく、東側の微高地に平行(南北)及

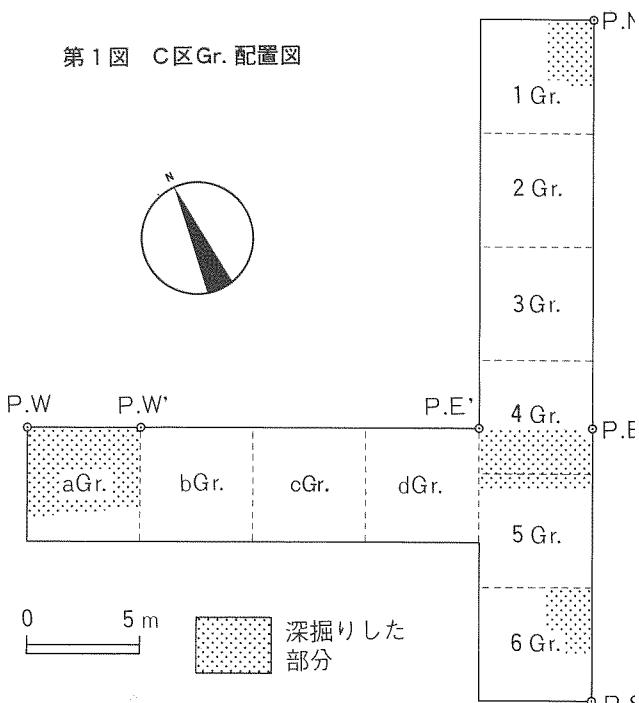
び直交（東西）方向のトレンチ状とした。南北ラインは、長30m東西ラインは、長25mでそれぞれ西と南へ幅5mをとり、5m×5mのGr. 計10に区切って、北から1～6Gr. 西からa～dGr.とした。

調査は、11月中旬に着手した。排土は、層位毎にビニールシートを敷いて積み分けし、混乱のないように心掛けた。表土（水田耕作土）及びⅡ層の掘削を11月末で終え、発掘区全体でⅢ層

（砂礫層）上面を露呈させた。この時点までの遺物の出土状況から、この砂礫層は、明治以降の洪水により堆積したものである可能性があった。このため、下部の状況確認のため、1・4・6・aの各Gr.に試掘坑を設定した。いずれのGr.でも砂礫層は厚く、地表下1mほどで地下水位に達した。これは、この付近の庄内川水位にほぼ対応する。砂礫層中からは、陶器片を主体とする遺物がまばらに出土したが、aGr.に於ては、砂シルトの大ブロック中から陶器片がかなりまとまって出土した。各試掘坑共、ポンプによる排水を行いつつ地表下約2mまで掘り下げたが砂礫層はなお厚く、また壁の崩落の危険があったため掘削を終了した。セクション図は、N～S間、W～E間について作成し、また全体平面図を作成し、記録写真撮影を行った。埋め戻しは、原状が回復されるよう、掘り上げた土を層位毎に戻し、機械による填圧をかけながら行った。埋め戻しを終え、C区の調査が完了したのは、12月半ばであった。

（伊藤）

第1図 C区Gr.配置図



a Gr. 深掘り状況

#### (4) D区

D区は、遺跡推定範囲の西端に位置し、守山高校構内のテニスコートに隣接している。標高約27mのレベルで、中央の微高地より約1.4m低いが、北限のC区よりも約1.1m高い。従って中位のレベルで微高地縁辺部にあたる。この微高地縁の小崖は、堤防より南へ延び、D区に至る。調査範囲は南北15m・東西20mの矩形で面積は200m<sup>2</sup>である。現況はつい最近まで水田に利用されていたが、何も作られておらず葦等が繁茂し、平坦な地形を呈している。グリッド設定は、発掘区北西の杭を原点とし、以東へ5m毎にA・B・Cと、南へ5m毎に1・2・3と名づけ、5m単位のグリッドで北西の杭を基準とした。このD区の1A・1Eについては多角点値を引照し、その計測値は表1に記している。

発掘に先立って発掘区北側の東、西隅に試掘坑を入れ、層序の確認を試みた。両坑とも地山の砂層まで大きく5層に分かれ、第Ⅰ層は耕作土で灰色シルト質土、第Ⅱ層は灰褐色シルト質土で中世陶片を含んでいる。第Ⅲ層は暗灰褐色シルト質土で、美濃山茶碗片を含む。第Ⅳ層はⅢ層と同じ色を呈するが、粘性の強い土質である。第Ⅴ層は灰青色の粘質土で植物遺体（木葉・ドングリ等）を含んだ湿地化した土層で、美濃山茶碗片を出土している。以下は灰青白色の砂質土で地山と思われるが、これを掘り下げたところ約40cm下で径10~20cm大の河原礫石が散在し、旧河道の川底と推定した。この砂層は上部がキメが細かく柔らかくなっているが、下部につれて粒子が粗大になり、締まって堅くなっていくことから、水の作用によって形成された層と考えられる。両坑とも砂層まで地表下約1.3mで、他の発掘区に比して深いことが認められ、この点について調査の課題の一つになった。

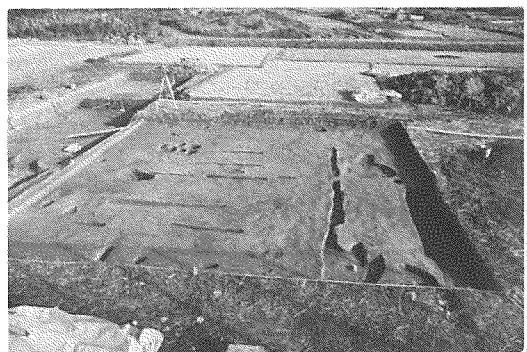
発掘区全体に第Ⅰ層（耕作土）を除去し、第Ⅱ層上端のレベルでそろえて遺構の存否を確かめようとした。1AGr.ではⅡ層の上面で北に落ち込む溝状の遺構を検出したが、この掘り込み面はⅡ層の上端ではなくやや下位の面で検出されている。この溝の南側肩部は東へと拡がっており、この肩部を追求することにした。またほぼ1・2ラインに沿って東西方向に、約20cm程高い幅約30cmの畦状のような隆まりが検出され、発掘区を貫いている。3AGr.でも同方向に4条の細い溝状が検出されていること、2BGr.の畦状遺構のすぐ南に幅約40cmのわだち状の痕跡が存在することからも、Ⅱ

層で検出された遺構は、近・現代の耕作によるものと考えられる。1 A Gr. で検出した溝状遺構の肩部は、1 D Gr. 南端まで続いており、II層はこの遺構埋土と考えられるが、2・3 Gr. でも僅かながら厚さ5cm程堆積している。このII層下では、鉄分の沈降がみられる層があり、両試掘坑では未検出の土である。これをVI層と命名し、この層の上面で遺構の有無を確認することにした。その結果3 A Gr. では、概ね灰色味を帯びたシルト質土を埋土とする溝状遺構・ピット等が検出され、そのうち中央の溝状遺構から東濃産灰釉段皿、土塙状遺構から灰釉小碗底部片等が出土する。その他のグリッドも同様に遺構検出を行い、掘削した後に測量して図化した。3 A・B Gr. の南端で東西に流れる溝状遺構が2条検出され、その中央に土塙状の遺構も検出され複雑な様相を呈している。埋土はいずれも灰青褐色シルト質土で鉄分の沈降が良くみられる。数回剥ぐ度に形状が変化するので、耕作及び水位による流状堆積と判断し、5cm程剥ぐと青味を帯びた灰色シルト質土を埋土とする溝が検出され、A溝と命名した。

A溝の検出を務めようとするが、既述の如く複雑な状況であり、形状は把握し難い。そのためにミニトレーナーを設定した。その結果、溝の北側肩部から約20cm程低く、ややテラス状の平坦面が約60cm続き、そこから急激に落ち込んだ地形が認められた。また東側の3 B Gr. 部分で二叉状に溝が分岐するのが見られた。従って今まで1つの溝と考えていたが、別な溝が重複したものと想定された。ミニトレーナーで検出された浅い平坦面を有する溝と、急激に落ち込んだ溝に分かれるのであって、分岐した北側の溝は浅くて、深い平坦底面を有する溝に対応する。この溝をB溝とした。ただしB溝はVI層下位ではっきりと区分し得るが、実際はもっと高い位置から掘り込まれていたのではないかと考えられる。VI層上部で検出された3 B Gr. K-1からは、山茶碗・



作業風景



VI層上部検出遺構

常滑窯甕胴部片等が出土している。B溝内を掘削し、溝中から出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・猿投窯山茶碗・美濃窯山茶碗片等で、中世末期の遺構と考えられる。従って上部の遺構の出土遺物とほぼ同時期であり、B溝の上部はやはり後世の耕作により攪拌されていると考えられる。またA溝については、上部でほぼ完形の江戸時代瀬戸窯灰釉茶碗が出土していることから、A溝はかなり新しい時期に形成されたと考えられる。また、3AGr.の溝の重複部分では、A溝がB溝の南側肩部を切っているのがみられ、この推測を傍証した。B溝の底部のレベルを基準にし、A溝まで掘り広げ、溝内で出土した遺物をほぼ残して、それぞれ掘削して清掃を行なった。B溝は、北側肩部位に沿って径20~30cmの河原礫石がまばらながらも散在しているが、土留め用としては考えられず、性格は不明である。B溝内の出土遺物は既述した。A溝の中・上部の出土遺物には、殆ど山茶碗が占めるが、上部に既述した江戸期頃と考えられる碗等がある。A溝内中・上部面でも径10~20cm大の河原礫石がやや多く散在する。大体、北肩部に集中する傾向が見られるが、検出レベルはまばらでB溝と同様に性格は不明である。さらにA溝の下部を掘削する。地山面は急激に落ち込み、僅か発掘区南端まで約1.2mの間に60cm程下がり、V字状の溝と考えられた。ただし、反対側の南側肩部は発掘区内では抑えきれず、全形は知り得ない。東西方向に流れるが、やや南に偏し、3BGr.中位ぐらいで北側肩部も発掘区外に消えていく。やはり、径20~30cm大の河原礫石が集中する。須恵器杯・山茶碗片と破片が多い遺物を出土する。

2A・BGr.で第VI層を掘削するが、一部分試掘で確認したところ厚さ約50cm程である。一応、VI層を二分しそれぞれ上部・下部と掘削する。それぞれ小破片ながら、大量に出土している。上部から陶錘・灰釉獸足で壺または香炉と思われるもの・砥石



A溝内出土遺物検出状況



A・B溝内出土遺物検出状況

等特殊な遺物を出土する。上部は、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗片・美濃山茶碗片等で中世末を下限とし時期幅がある遺物を含む。下部も土師器から山茶碗片を出土するが、比率として上部に較べて土師器・須恵器が多くなっている。VI層上部で検出された遺構は図化した後掘り下げた。VI層下部でも遺構が検出されている。2AGr. 北西隅では土師器甕が2個体分割れて集中し、径20~30cm大の河原石が散在している。この部分で径1~2cm大の炭化物片と焼土ブロックがまばらに分布するが、範囲を摑むことはできなかった。恐らくA区と同様な火の使用痕跡であったかもしれない。しかしながら土師器出土範囲とはかなり位置が離れており、明確に関連ある遺構と断定はできなかった。またその他の部位でも小範囲ながら焼土ブロックの混じった箇所があり、この面が一時期生活面であったと考えられる。またVI層を約30cm程下げたレベルでもピット等の遺構が検出された。従ってVI層で遺構検出面を3枚確認したことになる。VI層下のVII層は、砂質土で地山と推定している層で、この層にも遺構が検出されている。2AGr. でVI層下部で検出した土師器群を取り外すと、焼土・炭化物ブロック及び土師・須恵片を含んだ埋土が検出されたが、明確な範囲を把握できなかった。西壁際にミニトレーナーを設定し範囲を概ね検出し掘削を行なった。浅い土壟状の遺構でほぼ南北に延びる楕円形を呈し、長軸4m・幅現存1.5mを計測する。中央の底部に古墳時代土師器鉢がほぼ一個体出土し、底部が穿孔されている。(K-301)

1ラインで検出された溝状遺構は東へ1DGr.まで続く。北側肩部は発掘区内では検出されず、僅かに1DGr.で底部の北側隆起が見られる。全形は知り得ないが、底部幅が約2m位の大溝である。東西に流れやや南に偏し、B溝とほぼ同方向である。肩部上端レベルもA・B溝と同じである。南側肩部は緩やかな傾斜を有し、底面とのレベル差は約1.1mである。底面は平坦面でU字状に近い。肩部に散在して河原石があり、その検出レベルも一定しない。この溝をC溝とした。埋土は試掘坑で既述した様に4層に分かれる。出土遺物は土師器から近世の陶磁器まである。下部から鉄釉鉢・壺片が出土し、江戸期後半頃の遺物であることから、この溝も江戸期に使用されていたと考えられる。また、底面近くから漆器椀片・加工された木材等の木製品をも若干出土している。出土遺物のうち、多くは中世期の山茶碗(猿投・美濃窯製品)である。特殊なものとして緑釉陶器(猿投)・土師質土鍋片等がある。

(平出)

### (5) E 区

E区は遺跡推定範囲内の東南限近くで微高地南端部に立地する。B・F区とほぼ同レベルで微高地末端を形成している。現状は最近まで畠地に利用されていたが耕作されずに葦等が生い茂っている。発掘区は北側東西幅9.5m、南側幅6m、南北14mの不整形な四辺形で面積は106m<sup>2</sup>である。北西隅のポイントを基準点にし、それぞれ東・南へ5m毎にA・B、1・2として5mグリッドを設定した。グリッド名は、北西のポイントを基準にしている。掘削する前に試掘坑を発掘区北端に入れ層序を観察した。地山と思われる砂層までは深さ1.2mで3層に区分し得る。上層からⅠ～Ⅲ層と名づける。Ⅰ層は地表から深さ20cmまで、畠地の耕作土である。Ⅰ層からは、土師器片から昭和初期の陶磁器片を出土している。Ⅱ層は厚さ約30cmでやや黄色味を帯びた淡茶褐色砂質土である。遺物は須恵器杯身・山茶碗片等を含んでいた。Ⅲ層は厚さ60cmで暗茶褐色シルトを縞状にはさむ淡茶褐色砂質土で上端部に遺物を含んでいるが基本的には無遺物層であって、A・B区のⅢ層に類似する。下層は均質な砂層で深さ地表から約1.5mのところで河原礫層に至る。B区と共に地表面から灰釉陶器等多く採集し、良好な平安期の包含層を検出し得ると期待されたが、A区と同様に多岐に亘る遺物が出土した。表採であるが、平安時代の宝珠硯破片がある。Ⅰ層は耕作土で、明治から昭和にかけての磁器片を含んでいるが、須恵器から山茶碗まで混在していた。Ⅱ層上端の面で遺構を確認し得るか否かを探索したが検出したのは細長く幅の狭い小溝等に止まった。これらは耕作に因るものと判断し、Ⅱ層を掘削することに着手した。Ⅱ層は概ね上・下部と掘削した。上部は、僅かに近世遺物を含んでいるが、主に猿投・美濃窯山茶碗片・古瀬戸製品が主体である。また土師器・須恵器片を含んでいる。



発掘調査作業風景



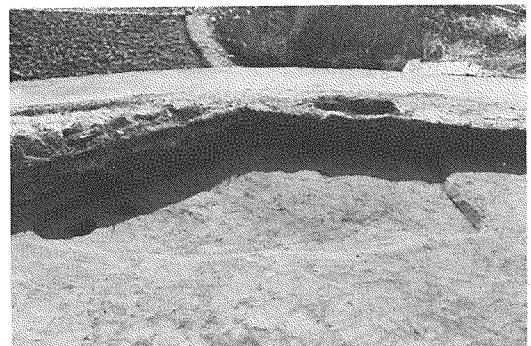
第Ⅱ層中須恵器杯身出土状況

1 BGr. で II 層中位から須恵器高杯・土師器小壺・高杯脚部の比較的大形の破片が出土している。II 層下部からも土師器・須恵器片を主体に出土するが、猿投山茶碗片が混在している。1 AGr. でも中位で土師器甕台脚片・高杯片・須恵器甕片がやや集中して出土している。A・B 区と共に同様な出土状況でもあった。そのうち土師器甕片の直下に焼土及び同一個体の破片が検出された。焼土は A 区に比して、かなり残存して明確に範囲を把握し得、撮影後実測した。その他のグリッドでは III 層上面まで掘削し遺構検出を行なった。1 BGr. は径 20cm 大のピット等、3 A・3 BGr. は III 層に小礫石（径 5mm 大）を多く含む埋土とする土塙状遺構等が検出された。1 BGr. のピットは山茶碗片を概ね出土している。1 AGr. 北西隅（焼土面の北西）で II 層を埋土とする落ち込みが検出され、遺構中軸に沿って深さを確認したところ、深さ約 30cm 程であった。B ライン南北アゼを実測し除去したところ、3 BGr. 付近で土師器甕片が土塙上面に 5・6 片集中し、焼土ブロックと共に検出された。果たしてこの土塙に伴うか否かは判断できないが、検出肩面レベルより高くなっていた。3 BGr. で検出された土塙（K-1）は 3 AGr. まで存続し、大型の遺構と考えられる。形状は東西幅約 4.5m・南北約 2.5m の現存で方形を呈し、深さは約 10cm で底面は平坦状である。この遺構が何のものか手掛けりになる出土遺物は得られなかった。また壁面に沿って周溝及びそれらしい痕跡もなく、北東隅に 2 箇所ピットが有るのみであった。従ってこの遺構に対して調査時では性格づけることができなかつた。さらに 1 箇所で深掘り部分を設定し、河原礫石層まで掘り下げ III 層中にも遺物が出土するか否かを確認した。III 層中から遺物は出土せずに、河原礫層中からかなり磨滅した弥生土器壺胴部片が 1 点出土している。

（平出）



1 AGr. 検出 K-1 状況



3 AGr. K-1 堀削後状況

## (6) F区

今回の調査で最後の調査区となった当区は、遺跡中心部を占める微高地の南端部に位置する。昭和60年1月18日から約140m<sup>2</sup>を対象とし、表土である耕作土層の掘削およびグリッドの設定にあたった。発掘区は、南壁のラインを基準に5×5m単位とした。表土層中には須恵器片・山茶碗片・灰釉陶器片を比較的多く混入している。表土層掘削中・発掘区西部では10~20cm大の礫が集中している状態が検出されたが、この段階ではこれらの集石が、掘り方を有するか否かを確認できなかった。一方では、数箇所の土層観察のための試掘坑をあけた。その結果、表土層（厚さ20~25cm）の下は、黄灰色の砂質シルト層と、さらに砂質の強い灰褐色砂質シルトが続き、砂礫層に達した。黄灰色の砂質シルト層を第Ⅱ層と呼称したが、均質で礫を含まないもので他の調査区で最終遺構検出面とした砂層および砂質シルト層とは色調などの違いがあるが、当区全域に安定した広がりをもつものである。この第Ⅱ層は、上部がやや粘性があり、下位ほど砂質がつよく色調も白くなる。本層以下は無遺物であった。集石部分を残し、第Ⅱ層上面まで掘り下げたが、集石は長方形、橢円形を呈するものがあり、何らかの目的をもった行為の痕跡である。集石の石の間からは、近世以降と思われる陶器片、中世陶器片、須恵器片などが検出されている。集石は、不整形、不明瞭なものを含めて17箇所検出されたが、これを範囲の平面図と写真撮影によって記録した。そして、集石のうち掘り方を有するものの断面を観察したが、明らかに掘り込んで石を埋積している例が多かった。第Ⅱ層上面では、他に小規模な円形の浅い穴などが検出されたが、遺物は少なく埋土も第Ⅰ層と同様のものがほとんどであり、性格が明確にできなかつた。

当区は、プライマリーな遺物包含層が残存していなかったが、第Ⅰ層中には古墳時代から中世の遺物を多く含み、過去に該期の包含層が存在したと思われる。

2月13日までに土層断面図、遺構平面図などや人力による埋め戻し作業を終了した。

（水野）



調査風景

## 第2章 遺跡と遺物

### 第1節 遺跡をとりまく環境

庄内川に沿って東西に細長く拡がる守山区は、南部は現在市街地化して遺跡はほとんど残存していないが、庄内川上流に沿った上志段味から吉根地区までの地域は多時期にわたる多種な遺跡群が良好に残存している。同地域の東端に位置する標高 198.3m の東谷山は市内最高峰であり、対岸の高座山と共に尾張山地の西麓部を形成している。南半部は所謂尾張丘陵と呼ばれる定�性の丘陵で、標高60～100m 程度である。東谷山地域は中・古生代に形成され、尾張丘陵は鮮新世の瀬戸層群矢田川累層を基盤としている。丘陵地北側に庄内川によって開析された高位河岸段丘から低位河岸段丘が発達し、更新世代に形成されている。

この地域に最初に居住したのは後期旧石器時代と思われるポイントを出土する樹木<sup>注1)</sup>遺跡が挙げられるが、唯一の遺跡であってこの時期は未だ判然としない。縄文時代になると、やや遺跡が多くなり上・中志段味地区内の4箇所及び南部の2箇所であるが、各時期にわたっているのではなく、晚期の遺跡が多い。弥生時代は縄文期に比して希薄になり、遺跡も数少ない。細形銅剣を出土した上志段味上島、中期の細頸壺を出土する中志段味宮前だけである。<sup>注2)</sup>古墳時代になると各地で古墳を造営して隆盛を極めるに比して、それ以前の時代と繋がる様相がまだ把握できていない。

古墳時代の前期では、上志段味地区の国指定史跡である白鳥塚古墳が最古で突如として出現する。この出現を契機として、上志段味では南社古墳・志段味大塚古墳、中志段味では下寺林1号墳と各地域で造営され始める。下寺林古墳は直径20m、墳丘3m の小型の円墳で上志段味の古墳群とは規模が大いに異なっている。東へ70m のところに2号墳が現存し、径5m、墳丘0.5m の円墳である。いずれもこの小地域集団の首長墓であろうと思われる。この地域はそれ以降古墳が造営されていない。後期になると、上志段味地区では、東谷山古墳群・大久手古墳群に代表されるように、見事な古墳文化の展開ぶりがみられる。下志段味地区でも東禅寺古墳群が、庄内川河畔にすぐ迫る丘陵地に造営され、6世紀から7世紀にかけての副葬品を出土している。また、吉根地区でも昭和58年に名古屋市教委が調査した笛ヶ根古墳群、やはり庄内川河畔近くに立地する上島古墳群など各地域で小規模ながら古墳が造営されるのに比し、中志

段味地区は古墳は現状では皆無で空白地域である。上志段味及び下志段味の首長勢力の均衡と関り合いながら、中志段味地域の集団はどこに居住していたのかは、不明である。

歴史時代になると志段味地区内では多時期にわたる遺物を散布する当遺跡と同様な上志段味地区の海東遺跡、中志段味の中位段丘面に立地する湿ヶ遺跡がある。いずれも古墳時代から中世にかけての遺物を包蔵している。湿ヶ遺跡を除いた2遺跡とも現在の庄内川畔で、旧河道との位置についても、交通・運搬に至便な地であることから、流通及び交易上に重要な手掛かりを有する可能性もある遺跡である。その他に集落遺跡と推測される遺跡は上述以外は無い。

集落遺跡を除いては、吉根地区では平安時代末期の灰釉陶器を焼成する松ヶ洞古窯、山茶碗を焼造する太鼓ヶ根古窯、同じく山茶碗を焼造する下志段味生下り窯・長廻間古窯群、中志段味では南の丘陵に位置する南原古窯が存在する。小規模ながら細々と日常雑器を生産しているのが窺える。当遺跡東へ約400mに南北朝頃築造された志段味城推定地がある。また、昭和10年に発見された東谷山の尾張戸神社裏で人骨片を内蔵した常滑窯甕を1個出土する中世墓がある。甕は室町時代中期頃のものである。中世の墓葬例としてこの地域では唯一のものである。上志段味上島では宝篋印塔・五輪塔の石塔群があり、中世期の痕跡が各地に見られる。江戸時代になると、地方文書・絵図からこの地域の状況はかなり詳しく判明するが、具体的に絵図中の寺社などの位置は未だ不明であり、今後の課題である。

庄内川を挟んでカウンターパートである春日井市でも相当な広範囲の氾濫原を有し、最低位面（春日井面）が幾度も洪水に見舞われ、近世の文書・村絵図に洪水の記録が見られる。この面に弥生時代から中世の陶器まで包蔵する大留遺跡・神領遺跡が当遺跡付近にある。古墳時代でも志段味地区と同じように古墳が營造されている。歴史時代になると、中世陶器を大量に出土する白山中世遺跡、瀬戸窯灰釉四耳壺を藏骨器とする白山古墓址等がある。室町時代の永亨年間（1429～1440）頃に隆盛期を誇っていた医王山薬師寺密蔵院と共に注目される遺跡である。最近瀬戸窯製品を藏骨器とする中世墓が区画整理工事中に発見され、志段味地区と比して中世期はやや良好に残存している。

(平出)

## 第2節 調査した遺構と遺物

### (1) A区 (図版5・6・11・12、写真図版1・2・4・7)

当区は、旧庄内川形成の砂堆上に堆積した0.5～1mの厚さを有する遺物包含層が存在し、現在周辺の地形は東西約100m、南北約300mの微高地となっており、畠が広がっている。その周辺の低地は水田となっている。今回の各調査区のうちでは最も高位にあたり、微高地の中央付近にあたる。付近の畠には、美濃産の山茶碗などの細片が多く散布していた。調査の結果、地表下20cmほどは耕作土であり淡灰褐色砂質シルトである。この層と下の第Ⅱ層との間には、10cm前後の厚さで黄灰色シルトが確認される部分があり、第Ⅱ層上部とした。この層からは、古瀬戸の破片や美濃産の山茶碗片が比較的多く検出され、他に常滑窯甕片、近世瀬戸・美濃窯の陶器片が少量出土した。古瀬戸の破片は発掘区東部に多く、灰釉四耳壺口部片、灰釉瓶子片、灰釉香炉片、灰釉平碗片などがあるが、ほとんどが細片であった。第Ⅱ層上部の掘削が終了した段階で遺構として捉えられるもののがなく、発掘区北壁東部で16C代に属すると思われる擂鉢片が出土した浅い掘り込みが検出されたのみである。これも平面プラン、埋土の状況が不明確であった。さらに掘削を進め、第Ⅱ層を試掘坑の状況から二分することができると判断した。しかし、面的に安定したものではなく、区分が困難になつたため上部と下部には分けたものの厳密な層位の差はない。掘削は15～20cmずつ下がっていくが、その都度遺構等の検出を図ったものの明確な遺構は検出されなかつた。第Ⅱ層下部では、1BGr.と2CGr.の第Ⅱ層下部では橙色焼土ブロックと炭化物粒子が一定の範囲内で散在する状況がみられ、慎重に周囲を下げるとき片と共に礫が露出したため、何らかの遺構があるのではないかと予想し平面プランの確認を期待したが、最終的には第Ⅲ層上面においても掘り込んだ遺構の状況を確認できなかつた。1BGr.の焼土ブロックは、約50cm径の不整円形を呈し焼土、炭化物粒子は土層中に上下の分布が認められ、上下幅は20cmほどであった。面的な広がりのほぼ中央部には、角柱状の礫が立位で存在し、1BGr.の礫は上部が加熱によって剝がれたようになっているが、特に色調

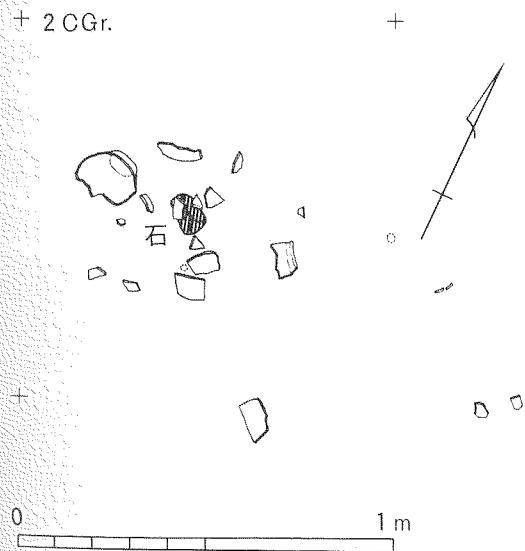


古瀬戸片

などは変化がない。2 CGr. の例は、表面が赤褐色を呈し加熱を受けているようであった。角柱状の礫は、2例とも直立している。下端は第Ⅲ層に接し、わずかに埋まつた状態であった。第Ⅲ層の砂層上面は、焼けた様子はなく焼土ブロックなどもほとんど認められなかった。焼土ブロック、炭化物粒子は第Ⅱ層下部中で、面的に貧弱ではあるが、土師器甕片は同一個体片が多く礫を中心とした分布を示すもので、火を使用した施設の痕跡が検出されたものと考えている。これらの土師器甕片は、2地点とも粗い刷け目が器表面に施されるもので、奈良・平安時代に属するものと思われるが、共伴する資料が不明確である。このように焼土ブロックが集中する例は、今回の各調査区のうちB区、D区、E区で検出されたが、加熱された石を中心とする例はE区の1 AGr. にみられた。

A区の第Ⅱ層中には、上部、下部で分層したものの遺物の内容は、古墳時代から奈良・平安時代の須恵器、土師器を主体とし、中世陶器が少量含まれるという状況が共通し、時間的な差が明確でない。そのため、現在では第Ⅱ層をひとつの層位として捉えている。各調査区のうち、A区と調査区の位置が近く、微高地上において同様な土層の堆積を示す調査区にはE区とB区がある。E区は、最終遺構検出面とした第Ⅲ層

以下の砂層と礫層のレベルがほぼ一致しており、上部層の形成する条件が同様であったと思われる。E区の遺物包含層は約30cmの厚みであり、A区の半



第2図 2 CGr. 土師器出土状況平面図

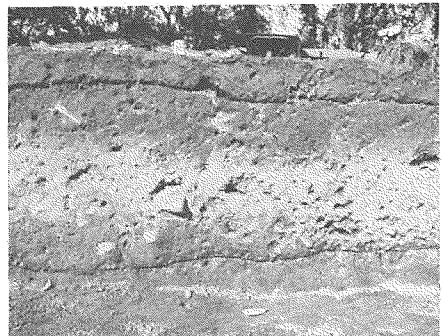


2 CGr. 土師器甕片と石

分ほどである。古墳時代から奈良・平安時代の土師器、須恵器を主体とし、中世陶器の出土はほとんどなく、かつて存在したと思われる中世遺物包含層は後世に攪乱を受けたり、流失したものと考えられる。地表面のレベルは、A区より40cmほど低位であり、畠地面上には山茶碗片、灰釉陶器片が多く散布しているが、ほとんどが5cm以下の細片である。B区においても同様な状況であったが、A・E区ほど層中に砂礫の混入が少なかった。B区周辺の畠地表には、灰釉碗片の散布が今回の各調査地点の中では最も多かったのであるが、調査の結果は、表土層からわずかに出土するのみであった。

A区の第Ⅲ層以下は無遺物の砂層であり、この上面では径20~40cmのピットが10基と幅40cmほどの浅い溝状遺構の一部が2条検出された。埋土は各遺構とも灰褐色のシルトで、遺物はP-3・4・7・8で須恵器、土師器の細片がわずかに出土し、P-9では山茶碗の細片が出土しているが、時期等、良好な資料が得られなかった。溝状遺構は2条が並行するが、ともに一端の部分のみが検出され、発掘区南側へ続くものと思われる。溝の端部近くにピットが一基ずつあるが、関係は不明である。ピットは約2m離れて2基が位置する状況であるが、これらの意味するところは現在のところ不明である。

包含層中から出土した遺物には、弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、古瀬戸などの破片がある。弥生式土器は、甕形土器の口縁部片が2点と壺形土器、鉢形土器かと思われる胴部破片が数点出土している。すべて小さな破片であるが、甕形土器は口唇部に刻み目を施し、「く」の字に外反した頸部外面は、なで調整のものである。鉢形土器破片は、櫛描きの列点文などがみられる。これらは、弥生後期のものである。土師器には、発掘区西端近くの第Ⅱ層下部で比較的集中して出土したものがある。これらの遺物は、高



A区土層断面



銅製鉦具出土状況

器受あ入でつ基シ一状のはろ碗、鉢形あで

杯形土器、壺形土器、台付甕の台脚片などであった。高杯形土器は、杯部片1、脚部片数点があるが、杯部は深く内側に屈曲して立ち上る。脚部片は、柱状部がふくらみ、裾部は欠損する。ほかに、脚部の破片で円形透し孔の穿たれたものがある。壺形土器は、口縁部が「く」の字状に外反する。全体になで調整されている。これらの土師器片は、古墳時代前期に属するものである。奈良・平安時代に属すると思われる土師器片が多く出土しており、甕形土器、小形壺形土器、甑形土器などがある。甕形土器の表面は粗い櫛状工具により調整されている。須恵器は、6～7C代に位置付けられる杯蓋と高杯片がみられるが量は少ない。杯身には径の小さい8C代に属する破片も検出されている。最も出土量が多かったのは、高台付の杯と頂部に鉢を有する蓋であった。8～9C代の製品である。杯には、底部に高台を有せず腰部に回転ヘラ削りによって稜をつくり出したものも多く含まれ、これに高台を付着させる過程の痕跡を示す例が1点あるが、その部分は磨滅している。碗には高台のない回転糸切り痕をそのまま残すものがある。他に少量ずつではあるが、長頸瓶、短頸壺、盤、高盤、鉢、甑片が出土している。高盤には、線刻のある脚部上部破片がある。また、これらの時期に属すると思われるものに、土錘と砥石がある。土錘は最大径1.5cmほどの管状で、両端を欠損した2例がある。砥石は5点出土しているが、1点の大型品を除いてすべて小型であると思われる。大型のものは硬砂岩製で、小型のものは泥岩または頁岩製と思われ、表面は風化が進んでいる。他に、銅製鉸具片と鉄製品の破片が検出された。灰釉陶器は、微細な破片が少量出土したのみであった。主に第Ⅱ層上部で検出された中世陶器類では、山茶碗片があるが、美濃産と猿投産と思われるものがあり、瀬戸産の製品はほとんど検出されなかった。時期は、14～15C代が中心である。また、陶丸が1点出土している。古瀬戸といわれるものには、灰釉製品がほとんどであった。すべて小さな破片であるが、種類をあげると、四耳壺口部片、瓶子片、手付水注片、折縁鉢片、香炉片、小型壺片、平碗片、皿片があり14～16C前半頃の製品が含まれる。また、16C中頃の瀬戸・美濃製の擂鉢片も出土した。近世陶器片では、緑釉鎧茶碗片、鉄釉天目茶碗片が少量検出された。ほかに、寛永通宝が一枚検出されている。（水野）

括

頭

た

考

周

北

西

た

9

2

集

須

が

も、

が

く

)

遺

あ

以

I

的

の

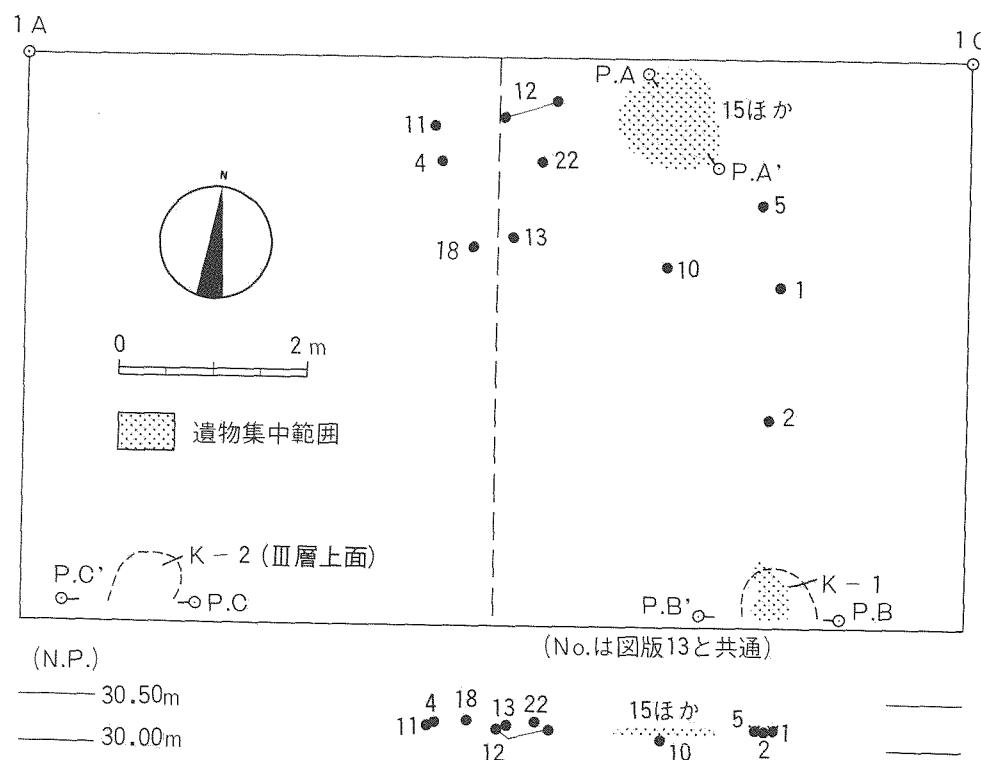
厚

## (2) B区 (図版6・7・13、写真図版2・4・8)

発掘に先立って行った表面採集によれば、B区周辺に於ては灰釉陶器が比較的多かった。これにより、灰釉陶器が密に分布する地点のあることが想定され、その意義付けが課題となる反面、A区における中世陶器のあり方と同様に、この地点においては灰釉陶器以降の包含層は、攪乱されているのではないかと予測された。

I層は、旧耕作土で、また雑草の根による攪乱も著しいが、本来II層と同一の黄灰砂シルトであったと考えられる。この層からは、灰釉陶器・山茶碗を主体に、古墳時代～現代の遺物が出土した。

II層からは、須恵器を主体とする遺物が発見され、とくに中位からは、かなり原形を留めた須恵器が、平面的な広がりをもって検出された。第3図にそれらの出土位置及びレベルを示したが、1BGr.北西部を中心とする半径2mほどの範囲に集中している。半完形品や大破片の出土が相次いだので、II層の掘削には慎重を期したが、この範囲外からの出土遺物は小片がほとんどであり、半完形や大破片の遺物が何らかの一



第3図 B区 II層中遺物出土状況

括性を有する可能性はかなり高いものと考えられる。1BGr. 北壁際の中央部では、人頭大の石4個が並び、土師器甕片・須恵器大甕片等が周辺に散っている状況が見られた。II層中にはもともと石は少なく、とくにこうした大きな石が自然に混入するとは考えられない。また、石そのものは火熱を受けたとは見られないが、焼土ブロックが周囲に散在しており、これらの石がその焼土の形成と関連した可能性が考えられる。

北壁セクション図（図版6）のIIa層が、これに続く焼土ブロック混りの土であり、西向きの落ち込み状を呈するが、平面的な遺構の確認はできず、セクションに現われたこの段差が即遺構の形を示すとは言えない。しかし、遺物の時期は、いずれも8～9世紀と幅広いながら時期的なまとまりを見せており、また南東部にはずれた位置の2点（図版13—1・2）が7世紀後半と時期を異にする事も傍証として、前述の遺物集中範囲は、一体として何らかの生活の痕跡を示すものと考え得る。

この他遺構として土塙2を捉えた。K-1は、II層中からややまとまって出土した須恵器甕胴部片（数個体の一部）の周囲で検出したものである。いくぶん黒ずんだ土が認められたが、形状が人為的なものかどうかははっきりしなかった。また遺物からも、時期を明確にすることはできない。K-2はIII層上面で検出したもので、中央部がシルト質の強い暗茶褐色砂シルトという顕著な土の違いが認められたが、遺物はなく、やはり人為的なものかどうかは不明確である。

灰釉陶器については、結局I層中及びII層のごく上部でしか出土せず、この時期の遺構も検出し得なかった。器種は、耳皿片1片を含むもののほとんどが碗・皿の類であり、ごく普通の構成である。

また、B区周辺は、近世集落が営まれていたと伝えられるが、前述の如く灰釉陶器以後の時期の包含層は耕作による攪乱を受けており、江戸時代のものも例外ではない。I層中からは図版に示したひょうそく等が出土しているが、そのほとんどは小片で量的にもごくわずかである。  
(伊藤)

### (3) C区（図版7・14、写真図版2・6・8）

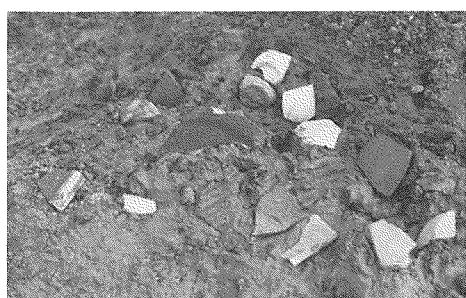
前章で述べたように、250m<sup>2</sup>に及ぶC区の全域は洪水の氾濫による砂礫層の堆積が厚く、遺構は全く検出されなかった。ここでは、層位毎に概況をまとめてみる。

I層は、現在の水田耕作土である。粘性の強い暗茶褐色砂シルトで、客土と考えられる。須恵器・土師器から現代に至る陶磁器の小片をまばらに含んでいる。

II層は、かなり砂質の強い灰褐色砂シルトで、小石やI層と同様な遺物をごくまばらに含んでいる。厚さは、1～6 Gr. 及び c・d Gr. では5 cm前後だが、b Gr. から西へ向かって厚みを増し、a Gr. では約20 cmある。ゆるやかな西向きの傾斜を持つが、この層については、河川による自然堆積であるのか、あるいはこれを整えて水田床としたものか判然としなかった。

III層は、この地が庄内川の流路となった折の堆積層である。粗砂や小石を主体とする砂礫層であるが、場所や深さによって組成は異なっている。しかし、1・4・6・a Gr. の試掘坑の状況から、概ね次の様な区分ができる。上面から約50～70 cmでは砂と小石を主体とし、大型の石は少ない。この下に厚さ30 cm前後の砂シルト（一部グライ化）ブロックを密に含む部分があり、以下は大型の石が目立つようになる。遺物は中位以上にまばらに含まれているが、ほとんど磨滅しておらず、流水により長距離を運ばれたものとは考えられない。a Gr. においては、シルト質を含むIII層中位層が厚く、遺物もかなり多かった。中には径1 m 大の砂シルト（グライ状）ブロックもあり、その中及び周囲から中・近世の陶器片数十片が出土した。こうした状況からも、III層中の遺物がかなり近くの包含層に由来すると考えられる。a Gr. で集中的に出土した遺物にはかなりの時期幅がある。須恵器・灰釉陶器・古瀬戸等の他、美濃産の山茶碗・常滑産の甕が特に目立ち、また近世の灰釉茶碗・擂鉢等もあり、時期的には18～19世紀前半を下限とする。こうした遺物のあり方は、III層中位以上に共通している。III層下部からの遺物の出土は明確ではないが、土師器や山茶碗片を含む可能性はある。

C区は、全体が近世末以降の洪水による堆積層と考えられる。但し、その範囲は今回の調査では明確にし得なかった。また、a Gr. に見られたような遺物の出自も今後の課題といえる。遺物組成・土質などは、D区の中～近世溝に近似するが、堆積時の流路が確認できなかったため、その関係は不明である。（伊藤）



aGr. III層中位遺物出土状況

う  
ば  
西  
ト  
す  
・  
少  
ラ  
ま  
を  
厚  
雪  
こ  
宛  
9  
II

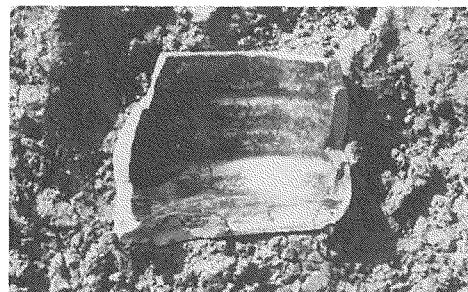
(4) D区 (図版8・9・15・16、写真図版3・5・9・10)

D区は比較的多くのまた各期の遺構群が検出されている。耕作土直下から地山まで遺構検出面が5面有り、掘削に際しては、包含層が砂堆で砂質土であり部分的に流状堆積箇所があるので、形状は明確に把握できず、一部は果たして遺構であったか否か判断に苦しむところもあった。今回は、当遺跡の最初の本格的な発掘調査であることからも厳密に検出を試みたのである。以下、検出面ごとに遺物を出土した遺構を説明する。

C溝

1AGr.のⅡ層下部から検出された大きな溝である。発掘区北端近くで発見されたため、南北幅は不明であるが、1DGr.付近では底面の北側隆起部が検出された。この底面から底部幅1.6mを計測する。この大溝は発掘区北部を東西方向に貫いている。北側肩部は発掘区外に相当するため状況は判明しないが、発掘区西側のセクションから観察すると、南側肩部検出レベルは標高約28.9m (N.P.) で、Ⅱ層で切られているため、本来ならばかなり上部で検出されたものと思われる。南側肩部はダラダラと下がり、検出面レベルから深さ1.2mの底面まで続いている。肩部は一部狭い平坦面が所々に見受けられるが、溝と平行して続いている訳でもない。この肩部に径20~30cmの大河原礫石がやや集中して検出され、石をそのままにして出土状況を見るが、肩に沿って敷いていなく、位置およびレベルもバラバラであり、乱雑な様相を呈する。この石群はこの溝に元々あったものではないと考えられる。また溝底部でもこの石群に対応するような礫石は殆ど皆無で、礫石自体も数少ない。発掘区東側壁でもこの溝の断面が見られる。両側肩部は発掘区外で状況は知り得ないが、底面は良く観察できた。やはり南側肩部は緩やかな斜面を有し、平坦な底面へと続いている。底面幅1.5mで北側底部は南に対応して僅かに20cm程隆起して同様な緩やかな斜面を形成するようである。

溝埋土は既述したように4層に区分けされ上層のI・II層は比較的新しい時期の遺物を含んで、II層上端部までは明治・昭和頃の陶



C溝 江戸時代鉄釉製品出土状況

磁片を出土している。遺物は奈良時代の須恵器片から江戸時代中期の鉄釉製品まで多時期にわたり、大体室町時代の古瀬戸製品・美濃製品が多い。また平安時代の灰釉陶器片・平安末期から鎌倉時代にかけての猿投山茶碗等が次ぐ。特殊なものとして平安期の緑釉陶片・長頸瓶口頸部片・中世期の土師土鍋片・砥石等がある。江戸期のは、鉄釉製品だけであるが壺底部・細長い筒状の鉢片が最下層から出土し、漆器椀片も一点採集されている。他に加工された木片が2・3点あるが墨書は見られなかった。

#### B溝

V層上部で検出され、東西方向に流れる浅い溝である。掘り込みレベルも既述したように本来はかなり上部であったと思われる。従ってⅡ層上端で検出されたD-1等はこの溝に含まれる可能性がある。幅1.3mの深さ20cm位の浅い溝で底部はやや平坦面で幅約70cmを計測する。3BGr.以西はA溝によって切られ南側肩部はなくなっている。殆どA・C溝と同方向である。

出土遺物は10cm大の河原石と混在して出土するが、礫石配置はC溝と同じく一定しない。奈良時代の須恵器から室町末期の美濃山茶碗・小皿まで含み、この溝が中世末期まで使用されていたと思われる。おもに平安末期から鎌倉期にかけての猿投山茶碗・小皿が占め、その他灰釉陶器・美濃山茶碗片がこれに次いでいる。特殊なものとして、中国白磁碗高台片（玉縁手）・土錘・陶錘等がある。

#### A溝

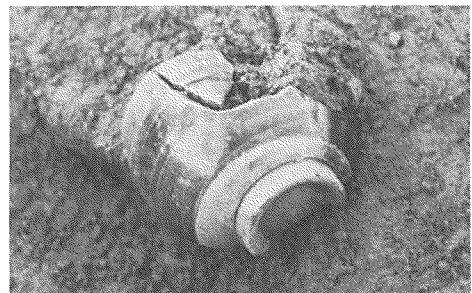
V層上部でB溝と共に検出され、やはり東西方向に流れる溝である。発掘区南端であつたため溝全景は検出されなかつた。3AGr.では北側肩部はB溝と重なり合つていたため、掘削時には判明せずミニトレーナーを設定して初めて判明したのである。埋土は、暗灰褐色砂シルト質で底部まで約70cmの深さである。肩部はC溝と比べて急傾斜で落ち込む。3BGr.付近でやや南に曲がり、B溝とそれぞれ独立した溝になる。底面には壁際で更に20~30cm程やや細長い落ち込みがある。

出土遺物は奈良時代須恵器から江戸時代末の陶器まで含む。江戸時代のは溝中位から上部にかけて出土し、ほぼ完形に近いものである。油壺は鉄釉がかかり火熱を受けたせいか、釉は失透状態である。そのうち、碗が2点いずれも溝中・上部から出土し、灰釉・褐釉の製品である。褐釉のは瀬戸窯のいわゆる尾呂茶碗であり、17世紀末頃の

ものである。主体は平安時代の灰釉陶器・末期の猿投山茶碗・小皿である。須恵器は高台付杯身・甕口頸部片で古墳時代まで遡るものは無いようである。灰釉陶器は東濃産のが多く一部猿投・篠岡窯のものも含まれる。1点水注か唾壺と思われる底部片が出土している。猿投山茶碗のうち、2点口唇部を外側に肥厚させて、玉縁状に仕上げているものもある。陶錘も2点出土する。江戸時代の遺物を除いての他は、殆ど破片ばかりである。このことからこの溝が江戸期に使用されていたと考えられる。

### K-301

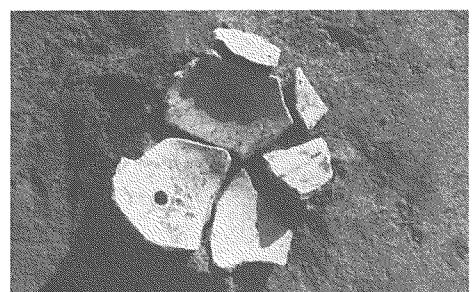
2 A Gr. 南西隅でⅦ層上面で検出された土塙状の遺構である。形状を確認するのは極めて困難でミニトレンチを設定して、ようやく範囲を把握し得た。上部のⅥ層中・下位で土師器甕片が2個体分群を成して検出されている。この土器は古墳時代のものであり、焼土ブロック等と混在していた。この部分を掘り



A溝 褐釉茶碗出土状況

下げてⅨ層上面でK-301を検出した。従って上部の遺物群はこの遺構とは別なものであると思われる。埋土は、焼土・炭化物ブロックを混在する灰褐色砂シルト質で底部近くでも遺構埋土と地山面と区分するのも困難であった。形状は発掘区際であるため全体は判明しないが、浅い深さ約20cmの土塙状である。この底部から古墳時代土師器鉢が1個体割れた状態で出土している。この鉢の底部中央に焼成前に径1.3cmの円形孔が穿たれている。類例として関東地方の遺跡等に見られ、甌である。<sup>注4)</sup>

いずれにせよ、D区で古墳期の明確な遺構を検出し得たのは、最大の成果であった。Ⅵ層下端部は、古墳時代の須恵器・土師器を若干多く出土していることから、古墳期の包含層が僅かながら残存していたとおもわれる。



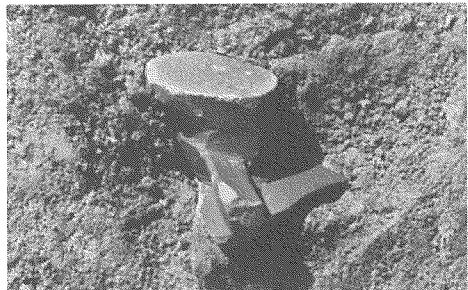
K-301内 土師器鉢出土状況

## 包含層

包含層はA・B・C溝との間に残存し、II層とVI層に分かれる。掘削時はII層を包含層として扱ったが、色調が橙色で厚さ約5cmの薄さまた上部から明治・昭和期の陶磁器片が出土することから、田床部分であったと思われる。従って包含層はVI層のみである。VI層は厚さ約50cm程で上・下部と分けて掘削した。以下、その区分毎に出土した特殊な遺物を述べる。

### 1. VI層上部

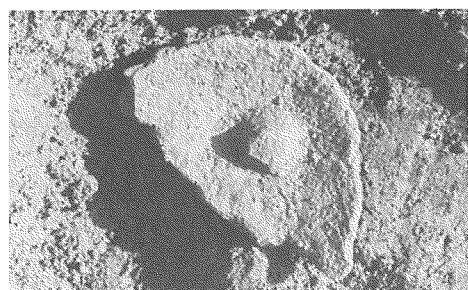
VI層上部は厚さ約30cm程である。出土遺物は土師器から室町期の美濃窯山茶碗片まで多時期にわたる。B溝とほぼ同じ内容であり、多いのは猿投窯山茶碗・小皿である。灰釉陶・須恵器片がこれに次ぐ。特殊なものとして、平安期の火舎香炉のものと思われる獸脚片・土錘・砥石が挙げられる。また何の器形になるのか判明しないが、土製の支脚状(?)片が出土する。尚、II層中からも白磁玉縁碗口部片が採集されている。



VI層上部 獣脚片出土状況

### 2. VI層下部

下部は厚さ20cm程である。出土遺物は上部に比して内容が異なり、土師器・須恵器片が主体となり、猿投山茶碗類は見られるが、美濃系のものは無くなっている。土師器は古墳時代のが多いが小破片であるため、明確な時期限定は困難である。そのうち、注5)特殊な土製品が出土し、類例として愛知県豊田市伊保遺跡に2点認められる。報告書では王江式土器に伴うものであり、祭祀用具ではないかと推定されるが、出土状況からは、この推測について何も言えない。須恵器も古墳後期の破片が多く、下端部に古墳期の包含層が残存していたのは、間違いない。図化し得なかったが、聾が2・3個体出土している。その他、陶錘・特殊な土製品の支脚状破片2点、断面が8mm大方形を呈する鉄製品が出土している。



(平出)

VI層下部 特殊土製品出土状況

包  
陶  
み  
土  
?) 器  
師  
ち、  
書  
か

### (5) E区 (図版9・17、写真図版3・6・10)

E区は包含層についてはA・B区と共に通るのでA区の項で詳述する。検出された遺構は土塙状遺構・ピット等である。調査時に特に注意を払った遺構を述べる。

#### K-1 (3 AGr.)

3 A・B Gr.でⅢ層上端のレベルで検出される。埋土は小礫石を密に含む茶褐色砂シルトでこの範囲を探索したところ3 AGr.まで拡がり、方形状の遺構である。発掘区南端部で全形は把握できなかつたが、一辺4.6mを計測する。深さは肩部から約10cm位で平坦な底面を有している。底面北東部にピットが2箇所検出されるが、ピットからの出土遺物はなかった。遺構全体からは土師器の微細破片ばかりで時期は限定できない。しかしながら、南北アゼの本遺構埋土上に土師器甕口部・胴部片が6点程集中して検出され、この遺物が古墳・奈良時代のと推測されることから、この遺構はそれ以前に形成されたと考えられる。この遺構の性格は、不明である。

#### K-1 (1 AGr.)

1 AGr.北西隅でⅡ層中から上部が検出され、焼土ブロック及び炭化物片が散在する埋土と共に土師器甕片が10点程集中して出土している。土師器は奈良・平安時代に属するものである。この遺物群を除去すると、焼土ブロック・炭化種子を含む土塙状遺構が検出され、甕群と離れて北西に拡がっている。遺構中軸に沿ってミニトレンチを設定し、拡がり及び深さを確認すると共に、土塙内を掘削した。下部は焼土面が明確に補足し得、良好な残存状況であった。すぐ南東に花崗岩系の三角柱状に15cm程直立している石が見られた。この直立石と焼土はA区にも見られ、火の使用痕跡と考えられる。下部の埋土から平安期の須恵器盤高台片が出土することから、上部の遺物群とほぼ同時期であり、本来ならば上部と共に同じ遺構であった可能性もあるが、現況では判断できない。

その他、包含層を三分して掘削するが、上位では明治・昭和の陶磁器片まで含む。中位は古墳時代土師器から美濃山茶碗まで多岐にわたるもので、中世陶器片が主体となる。特殊なものとして古墳時代前半の土師器高杯・小型壺、平安時代の高台付杯身などである。下位は土師器から猿投山茶碗まで含み、かなり攪拌された包含層でA区と同様である。鉄製品として1点刀子片が採集されている。 (平出)

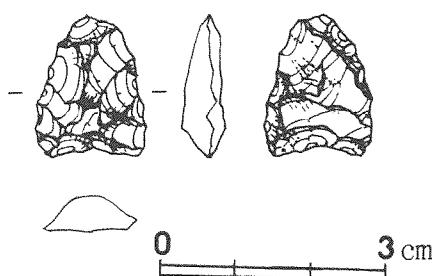
#### (6) F区 (図版10・17、写真図版3・6・10)

当区は、現在の微高地南西端に位置している。各調査区のうち微高地に位置する地点は、A・B・E区であり、このうちB区が最も近い位置にあるが、地表面レベルはB区より40cmほど低位である。A区は、中世以降の遺物を含む包含層が残存していたが、B・E区では、ほとんど検出されず、地表に散布する状況であった。当区では、近い位置にあるB区にみられた奈良・平安時代の遺物を主体とした包含層も残存せず、耕作土中に古墳時代から近世・近代の遺物を含む状態であり、以下は無遺物の砂質シルト層と砂礫層となっている。このような各期の遺物が混入した土層の存在は、当遺跡の立地する位置が、庄内川により形成された砂堆上にあるため、過去において川の氾濫などが土層上部に何らかの影響を与えてきたことを想像させる。

当区の発掘調査によって、耕作土中で5~25cmほどの礫が集中して検出された。これらは、17箇所で記録されたが、その状態を大きく3つに分類することができる。第1類：掘り方を有し、掘り込んで埋積された状態のもの。(3・4・6・7・9・11・13・16・17号集石) 第2類：掘り込みがなく、第Ⅱ層直上で埋積が終わるもの。(5・10・12・14号集石) 第3類：集石の密度が小さく、その範囲を限定しにくいもので掘り込みのないもの。(1・2・8・15号集石) これらのうち、石の間などから遺物の出土があったのは、第1類の3・6・7・9・11・16・17号集石、第2類の5・12号集石である。3号集石から、須恵器大甕口部片が検出されているが、この須恵器片に接合する破片が当集石の位置する2BGr.第Ⅱ層直上部と1BGr.第Ⅱ層直上で出土している。6号集石からは、江戸時代に属すると思われる擂鉢の底部・胴部片、近世



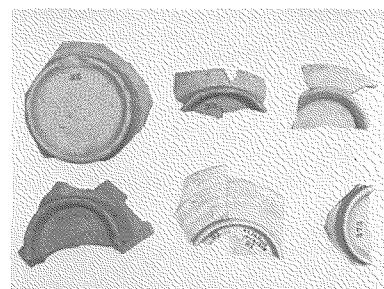
土層断面



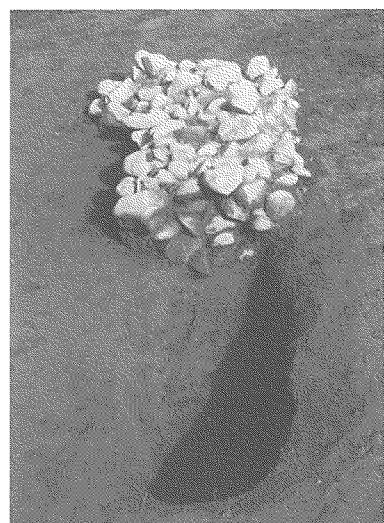
第4図 石鎚実測図

以降の製品かと思われる透明釉のかかった灰色胎土の陶器片、その他、美濃産山茶碗、須恵器の細片が少量検出された。7号集石は、比較的多くの資料が検出された。近世の擂鉢口部片、褐釉陶器碗片、透明釉陶器皿片や15C代と思われる瀬戸灰釉香炉片、美濃産山茶碗片には14~15C代の製品が存在し、猿投産山茶碗片には時期的に古くなると思われるものがあり、胎土は守山区内の窯出土製品に類似するものがある。灰釉陶器碗片は、東濃産のものが多くO-53号窯式に近いと思われる。その他、須恵器、土師器の細片が検出された。9号集石もほぼ同様の内容である。11・17号集石は須恵器、土師器の細片が少量出土したのみであった。12号集石では、近世常滑窯製品の底部片が検出された。また、集石の遺物と第I層中の遺物が接合する例がいくつか存在した。3AGr.の第I層下部では、5cm以下の小破片となった灰釉陶器碗片が多く出土したが、同一個体片も多い。碗には輪花のものも存在する。ほとんどがO-53号窯式の特徴を有し、東濃産の製品が多い。輪花皿が1点あり、K-90号窯式並行の東濃製品である。その他の出土遺物に平安時代に属すると思われる瓦片が2点ある。また、近世常滑窯製品で、いわゆる「赤物」と呼ばれているものにあたると思われる浅い鉢状の器形に短い脚を3箇所(推定)付けた製品の破片が出土している。この類例が、市内中区の堅三藏通遺跡出土品にあるが、焼成の程度に違いがある。他に、ハリ質安山岩製の打製石鏃が1点地表採集されたが、当調査区南側の中位段丘上の宮前では、弥生時代の壺形土器が採集されている。

F区付近で近世に存在したと伝えられる神社については、明確な証拠が得られなかったが、集石との関係も合わせて今後の調査の課題としたい。  
(水野)



灰釉陶器碗片



3号集石断面

# 遺物観察表

## A区(図版11・12)

図版No.	器種 写真図版No.	法量(cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
		口径 底径	胴径 高			
11-1	土師器・高杯杯部 7-4	15.8 —	— —	1~5mm大の砂粒を多く含む。基調は微粒の土。焼成良好。	内外表面共に回転ナデによる整形である。外表面の磨滅がはげしい。色調は黄灰色。	1 AGr. II層最下部
11-2	土師器・高杯脚部 7-5	— —	4.5 —	2~4mm大の小石を少し含む。砂粒の少ない良質な土。焼成良好。	脚部器面内外共に横位のハケナデ痕あり、杯部底部にヘラ磨き痕あり。色調は黄灰色。	1 AGr. II層最下部
11-3	土師器・高杯脚部	— —	4.2 —	1~4mm大の砂粒を含む。緻密土。焼成良好。	外表面はヘラ削りによる整形、内面は横位のヘラ削り整形痕あり。色調は黄橙色。	2 BGr. II層下部
11-4	土師器・小型壺 7-2	8.8 4.5	8.1 6.8	1~2mm大の砂粒を多く含む。土はきめ細かい。焼成はやや不良。	外表面は横、斜め方向のハケによる整形痕が一部に見られる。内面頸部に横位のハケによる整形痕が見られるがやや不明瞭である。内面は縦位のヘラ整形痕が見られる。底部に木葉痕あり。色調は黄灰褐色。	1 AGr. II層上部
11-5	土師器・甕台脚部	— 9.1	— —	石英、長石を主体に金雲母などの微砂~粗砂(1~1.5mm大のもの)をかなり密に含む。焼成良好。	外表面は本体との接合部分にナデが顕著に見られる。他は指圧成形の後、横位方向のナデ整形痕が見られる。内面上部は上から下、左から右への順序で指頭による押圧が見られる。下部は指圧成形の後、横位方向のナデ整形痕が見られる。底部は平面上に押しつけた様な仕上げで、内端部は内側へ被ったまま整形していない。色調はくすんだ明橙褐色。	2 AGr. II層最下部
11-6	土師器・壺	17.5 —	— —	石英を主体に長石、金雲母等の微砂~粗砂(1mm程度のもの)を含む。焼成はやや不良。	外表面口縁~頸部にかけて指圧成形後回転ナデによる整形が見られる。頸部以下は指圧成形後横位方向の粗いナデによる整形痕が見られる。口縁内面は指圧成形後、刷毛(?)による回転ナデ、頸部にはヘラ状器具(刷毛?)による軽い削り痕あり。頸部以下は指圧痕が顕著に見られる。色調は暗橙褐色であるが、外表面は茶色である。	2 AGr. II層下部
11-7	土師器・壺	— 4.2	— —	石英・金雲母などの微砂~粗砂をかなり密に含む。1~5mm大のかなり大きい石も目立つ。焼成良好。	外表面は指圧成形後ナデか粗い削り痕あり。不規則な繊維状の整形痕が見られるが、表面の仕上げは非常に雑である。内面は指圧成形の後、左から右方向へのヘラ状器具(?)による不規則で雑な削り痕が見られる。底部には指圧痕が顕著に見られる。色調は茶色かかった暗灰褐色。	2 AGr. II層下部
11-8	土師器・甕口部	14.2 —	— —	0.5~1mm大の砂をこくわずかに含む。非常にきめ細かい土。焼成良好。	外表面口縁から頸部は横ナデ、頸部以下は荒れがひどく不明瞭であるが、斜位のハケ目痕あり。内面は口縁から頸部にかけて横位・斜位のハケ目痕あり。頸部のハケ整形は、指圧により消える。色調は外表面が赤橙色、内側は灰褐色。	2 EGr. II層
11-9	土師器・壺(?) 口部	15.0 —	— —	1~2mm大の砂粒をわずかに含むきめ細かい良好な土。焼成良好。	内面頸部に指ナデ押さえ痕あり。他は器面が荒れていて整形痕不明瞭である。色調は外表面が淡い黄灰色、内面は肌色。	1 AGr. II層最下部
11-10	土師器・甕口部 7-6上	19.5 —	— —	0.5~1mm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。	外表面は斜位のハケ整形痕あり。口縁部内面は横位・斜位のハケ目痕、頸部に指圧整形痕あり。色調は外表面と口唇部付近の内側では、肌色ないし黄橙色、内側下位は黄褐色。	1 EGr. II層

	11-11	土師器・甕 (?) 台脚部	— 8.0	— —	1mm 大の砂粒をごくわずかに含む。極微粒子の土。焼成良好。	全表面風化、磨耗激しく整形痕不明瞭。色調は黄橙色。	1 AGr. II 層最下部
位置 r. 下部	11-12	土師器・甕台脚部	— 5.9	— —	長石等の微砂・細砂をまばらに含む。焼成はやや不良。	外表面は荒れていて整形痕不明瞭、内面は指圧痕顕著である。底部に3mm程の不整形の貫通孔があるが、斜位である点など（接合部にもある）から石の痕跡、繊維痕とも考えられる。色調は淡い黄灰色（白っぽい）。	3 CGr. II 層
r. 下部	11-13	土師器・壺 7-3	15.4 4.7	20.5 22.3	3mm 前後の小石を少量含む。焼成良好。	口縁部は回転ナデによる整形、頸部より以下は指圧痕が顕著に見られる（指圧後、横方向の指ナデ整形）。色調は内面がクリーム色、内面底部はやや灰色がかったり。外表面は暗褐色。	2 AGr. II 層下部
r. 部	11-14	土師器・甕口部 7-6 下	19.8 —	— —	0.5mm 大の砂粒を多量に含む。焼成はやや不良。	口縁外表面はナデ整形、頸部以下は斜位ハケ整形である。内面は口縁が横位のハケ整形。頸部以下はナデ整形である。色調は外表面、内面共に黄灰褐色で非常にもりい。	1 BGr. II 層下部
r. 部	11-15	土師器・甕底部 7-7	— 6.0	— —	0.5 ~ 1mm 大の砂を多く含む。焼成はやや不良。	内面は輪積み痕がよく残る。外表面は斜位のハケによる整形痕がある。なお底部付近は、目が荒く傾斜が急な整形痕が見られる。色調は外表面、内面共に黄灰褐色で非常にもりい。	2 CGr. II 層下部
r. 下部	11-16	土師器・甕上部	13.0 —	— —	0.5 ~ 1mm 大の砂粒を多量に含む。微細な粘土。焼成良好。	二次的な火熱の為表面はもろく剥落が激しい。整形痕不明瞭。色調は黄灰色、肌色。	2 CGr. II 層下部
r. 部	11-17	須恵器・高杯杯部	14.7 —	— —	長石、石英等の微砂～粗砂をまばらに含む。焼成良好。	内外面共にかなり丁寧な回転ナデによる整形がなされている。胴部中央にヘラ状器具による刻み目列あり。色調は外表面が灰緑色、自然釉が薄くかかる。	3 EGr. II 層
r. 部	11-18	須恵器・杯蓋 7-8	12.7 —	— 4.5	0.5 ~ 2mm 大の白色粒子を多量に含む。あまり緻密でない。焼成良。	内面より外表面中央部まで回転ナデによる整形。上部は回転ヘラ削りによる整形。色調は灰色。	1 BGr. II 層下部 (III 層直上)
r. 部	11-19	須恵器・高杯杯部	13.4 —	— —	長石等の微砂・細砂をかなりまばらに含む。焼成良好。	内面中央部より外表面中央部にかけ回転ナデ。内面中央部より下は雑な回転ナデ。外表面中央部より下は回転ヘラ削り。口縁内側が浅い凹線状となる。色調は灰色（内外面共に部分的に斑点状に自然釉がかかる）。	1 CGr. II 層下部
r. 部	11-20	須恵器・杯蓋	11.1 —	— 4.2	長石等の砂粒をまばらに含む。1 ~ 2mm 程度のものもあり、やや粗い。焼成良好。	内面より外表面肩部まで指頭による回転ナデ。上部は回転ヘラ削り、外表面は凹線状の段が出来ている。色調は明灰色。	1 CGr. II 層最下部
r. 部	11-21	須恵器・杯	10.6 5.8	— 2.7	小砂礫を多く含む。焼成良好。	内面はロクロナデ。外表面は荒いナデ、底部にはヘラ削り痕が残る。色調は灰青褐色。	1 FGr. II 層
r. 部	11-22	須恵器・高杯 7-16	— 9.0	— —	長石・雲母等の微砂・細砂をまばらに含む。焼成良好。	脚部内外面共に指頭による回転ナデ（仕上がりはなめらかである）。杯部底部は粗いナデで指圧痕が目立つ。色調は明灰色。	1 FGr. II 層
r. 下部	11-23	須恵器・杯	8.7 —	— 5.2	雲母・小砂礫をや多く含む。焼成良好。	内外面共にロクロナデによる整形。色調は灰白色でやや青味がかる。	1 CGr. II 層
r. 部	11-24	須恵器・杯	10.0 —	— 4.4	長石、石英を主体に雲母等の微砂・細砂をまばらに含む。焼成良好。	内面より外表面腰部は指頭による回転ナデ。底部付近はやや粗い回転ナデ、底部はヘラ削り後ナデ整形。口縁部に濃緑色自然釉付着。色調は灰色。	1 DGr. II 層

11-25	須恵器・高杯脚部	—	11.5	—	0.2~0.5mm大の微細な白子粒子を含む。きめ細かい。焼成良好。	内外面共に回転ナデによる整形。中央部に透し穴あり、色調は灰色。	1 CGr. II層	12-13
11-26	須恵器・高盤脚部 7-18	—	—	—	砂粒を含まない極めて緻密な土を使用している。焼成良好。	胸部は細かく丁寧な継位のヘラ削り痕。線刻は非常に鋭利なもの（おそらく刃物）で断面は鋭角的なV字となる。現存部では全周囲に巡らされている。外面の一部には自然釉がかかる。色調は灰白色。	2 EGr. II層	12-14
11-27	銅製鉗具	—	—	—	—	一端を欠損する。色調はサビのない部分で橙褐色。	1 AGr. II層中位	12-15
11-28	土錘	—	—	—	長石・石英・クサリ礫などの微砂・細砂をやや密に含む。焼成良好。	表面は磨耗が著しい為、整形痕が不明瞭である。色調は明るい肌色。	1 AGr. II層下部	12-16
11-29	土錘	—	—	—	長石・石英等の微砂・細砂まばら。焼成良好。	器面はかなり荒れている。	2 BGr. II層下部	12-17
11-30	砥石	—	—	—	石質は凝灰岩。	色調は淡黄灰白色。	2 EGr. II層上部	12-18
12-1	須恵器・蓋 7-12	18.3 —	— 4.1	—	小砂レキ粒が散在。	内表面はやや雑なナデ調整で重ね焼き。完形。焼成はやや良好。	1 FGr. II層下部	12-19
12-2	須恵器・蓋	14.7 —	— 3.8	—	小砂レキ粒を含む。焼成良好。	内・外表面はロクロナデ。2分の1欠。	1 AGr. II層中位	12-20
12-3	須恵器・蓋	14.0 —	— 3.6	—	小砂レキを含む。焼成はやや良好。	外表面は粗雑な回転痕。内表面はロクロナデ明瞭、ほぼ完形。	1 BGr. II層下部	12-21
12-4	須恵器・蓋 7-15	11.6 —	— 3.0	—	小砂粒を含む。雲母片多く混入。焼成良好。	内中央に2本の平行線(4~4.7cm)の細い沈線がある。いずれも残存長。外表面はロクロナデ。3分の1欠。	2 CGr. II層下部	12-22
12-5	須恵器・蓋	16.3 —	— 1.6	—	灰黄褐色で小砂レキ粒子多く含む。生焼け状。	裏側に細い沈線。(残存長8cm)2分の1欠。	3 DGr. II層	12-23
12-6	須恵器・杯	10.0 4.5	—	— 3.8	灰青白色でやや緻密な胎。雲母片混入。石英系も含む。焼成不良。	外表面はロクロナデ。底部はヘラ切痕で、粗雑な調整。3分の2欠。	1 AGr. II層下部	12-24
12-7	須恵器・杯	12.0 5.1	—	— 3.4	灰青褐色のやや緻密な胎。小砂礫散在。焼成良好。	3分の2欠。底部に糸切痕。ロクロ回転ナデ。	1 BGr. II層下部	12-25
12-8	須恵器・杯	11.8 6.2	—	— 4.6	赤橙色でやや小砂礫粒を含む。雲母片多く混入。焼成良好。	ロクロ回転ナデ。底部糸切痕。	4 EGr. II層下部	12-26
12-9	須恵器・杯 7-11	13.8 8.1	—	— 4.8	小砂礫多く散在。灰青褐色。焼成はやや甘い。	外表面はロクロ目が顯著。2分の1欠。底部糸切痕。	2 BGr. II層下部	12-27
12-10	須恵器・杯	10.9 7.8	—	— 4.0	灰白色で砂粒を含む。焼成良好。	表面は回転ナデ。貼り付け高台内は、回転ヘラ削り痕を残す。	2 AGr. II層下部	12-28
12-11	須恵器・杯	12.2 6.7	—	— 3.7	長石を主体に石英・雲母等の微砂・細砂をかなり密に含む。やや粗い土。焼成やや良好。	口縁部は回転ナデ。底部は回転ヘラ削りで、かなり粗い仕上り。残存は3分の2周片。	4 FGr. II層	12-29
12-12	須恵器・杯	12.3 6.6	—	— 4.0	長石・石英等の微砂・径2mm大の粒子を含む。わりとキメ細かい土。焼成良好。	残存部に一ヶ所、横2.5cm、縦1.5cmの範囲にゴマシオ状に自然釉かかる。底部はヘラ削り。残存は2分の1弱のほぼ半欠片。	1 AGr. III層直上	12-30

12-13	須恵器・杯 7-10	11.5 6.5	— 4.0	小砂粒及び雲母片を含む。焼成良好。	内外面共口クロ回転調整。外表面は灰黄褐色で光沢がある。底部はロクロ回転の糸切痕残存。	2 BGr. Ⅲ層直上
12-14	須恵器・杯	14.6 10.3	— 3.8	長石、石英等の微砂、細砂をかなりまばらに含む。ただし径1.5~4mm大のものが数個みえる。焼成良好。	外表面は指頭による回転ナデ仕上。杯部と高台の接合痕顯著。身の立ち上がり部~底部は8分の1周程度のみ残る。底部は一部欠。	3 DGr. Ⅱ層
12-15	須恵器・杯	14.1 9.5	— 4.2	灰黄褐色でやや小砂粒を含む。焼成やや良好。	内表面はロクロ回転ナデ。外表面は灰青褐色を呈する。	1 EGr. Ⅲ層直上
12-16	須恵器・盤 7-13	17.5 10.4	— 3.2	灰青褐色で小砂礫粒を多く含む。焼成良好。	外表面はロクロ回転ヘラナデ。	3 DGr. Ⅱ層下部
12-17	須恵器・盤	21.3 12.4	— 3.4	長石、石英、雲母等の微砂、細砂をまばらに含む。焼成不良。	底部は回転ヘラナデで、かなり丁寧な仕上げ。	1 BGr. Ⅱ層下部
12-18	須恵器・杯 7-9	15.0 11.8	— 4.7	赤燈色の色調で小砂礫を含む。焼成良好。	外表面はゴマ塩状の降灰釉。内外面共に回転整形痕。口部は一部欠損。	4 EGr. Ⅱ層
12-19	須恵器・小型壺 7-14	8.4 6.2	10.6 9.8	灰黃白色で小砂礫粒は殆んど含まない。焼成良好。	胴部はゴマ塩状の降灰釉。外表面はマダラ状の降灰釉。糸切り底。口部から底部まで2分の1欠。	1 AGr. Ⅱ層下部
12-20	長頸瓶・口頸部 7-17	8.0	—	やや小さい砂粒子を若干含む。焼成良好。	外表は暗茶褐色の色調で光沢。3段作りの肩部まで残存。口部すべて残存。	2 CGr. Ⅱ層下部
12-21	須恵器・鉢	16.7	—	0.5~2mm大の白色砂粒をわずかに含む。緻密で堅い。焼成良好。	外表面は全面回転ナデによる平行線が明瞭である。残存6分の1。	1 AGr. Ⅱ層下部
12-22	古瀬戸・灰釉四耳壺口部	9.0	—	淡黄灰色、あまり緻密でない。焼成良好。	口縁部はやや厚い灰釉。黄緑色透明釉。残存6分の1弱。	3 EGr. Ⅱ層上部
12-23	古瀬戸・灰釉四耳壺口部	8.6	—	明灰白色、均質、緻密である。焼成良好。	口縁部の表面にはすべて淡黄緑色の灰釉が、比較的均一にかかる。残存口部8分の1。	2 EGr. Ⅱ層上部
12-24	古瀬戸・灰釉梅瓶 (?)胴部	—	—	黄灰白色で緻密。焼成良好。	外側は全体に黄緑色釉がかかるが、ほとんど剥落している。外表面は唐草文線刻。内表面は無釉。	1 EGr. Ⅱ層上部
12-25	古瀬戸・灰釉瓶子 (?)口部	—	—	淡灰白色で均質。焼成良好。	外表面は透明黄緑色釉。	2 EGr. Ⅱ層上部
12-26	古瀬戸・灰釉香炉片	— 9.3	— —	淡灰白色で均質。焼成良好。	底部は回転糸切り。外表面は淡黄緑色釉が多めにかかる。残存10分の1。	2 EGr. Ⅱ層上部
12-27	山茶碗(小皿) 7-20	7.9 4.5	— 2.1	灰茶褐色で小砂礫を散在する。焼成良好。	釉は全くかからず、灰褐色を呈する。	1 AGr. Ⅱ層中位
12-28	鉄釉・擂鉢 7-19	27.5	—	長石、雲母をまばらに含む。焼成良好。	内、外表面の口縁には紫がかった鉄釉。内表面には8単位の擂目があり、のち施釉。	1 EGr. K-1
12-29	古瀬戸・灰釉鉢	31.9	—	赤灰色で小砂礫は含まないが粗雑。焼成良好。	外表はザラザラで灰黄白色で釉の痕はあるが、発色はしていない。3分の2欠。	1 EGr. Ⅱ層
12-30	砥石片	—	—	—	3面の使用面がみられる。黄灰白色を呈する微粒質の石で変成作用を受けた砂岩と思われる。	2 BGr. Ⅱ層下部
12-31	陶丸	—	—	砂礫をやや含む。焼成良好。	全面はきれいにヘラ磨きされており、かなり平滑。	2 ABGr. Ⅱ層上面
12-32	銅錢	—	—	—	寛永通宝。	1 EGr. Ⅱ層上部

B区 (図版13)

図版 No.	器種 写真図版 No.	法量 (cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
		口径 底径	胴径 高			
13-1	須恵器・杯	9.8 4.0	— 4.0	小砂礫粒をやや含む。 内外に雲母の吹き出し。 焼成良好。	内面はロクロナデ、ヘラ削りあり。外表面は丁寧なロクロナデ。色調は灰橙色を呈する。	I BGr. II層下部
13-2	須恵器・高杯杯部	14.4 —	— —	石英等の砂粒 (微砂～ 2 mm大) をまばらに含む。 焼成不良。	内外面共に回転ナデによる整形である。器表面の磨滅は著しく整形痕は不明瞭。色調は灰白色。	I BGr. II層下部
13-3	須恵器・高杯杯部	15.3 —	— —	小砂礫粒多く含む。焼成良好。	内外面共にロクロナデが顕著である。色調は灰橙色。	I BGr. II層上部
13-4	須恵器・蓋 8-8	14.0 —	— 3.0	小砂礫粒をやや含む。焼成良好。	内側に沈線あり、内外面共にロクロナデが顕著。色調は灰青褐色。	I AGr. II層上部
13-5	須恵器・蓋	14.3 —	— 3.1	小砂礫粒を多く含む。 焼成はやや良好。	上部にヘラ削り痕。外表面はヘラナデによる整形。内面はロクロナデによる整形。色調は灰橙色。	I BGr. II層下部
13-6	須恵器・蓋	13.5 —	— —	小砂礫粒をやや含む。 焼成良好。	外表面のヘラ削りは雑である。内面はロクロナデによる整形。色調は灰青橙色。	3AGr. A溝埋土
13-7	須恵器・蓋	14.3 —	— —	小砂礫、雲母片散在。 焼成良好。	外表面のヘラ削りは雑である。下端部分はヘラ、ロクロナデによる整形である。内面はロクロナデによる。色調は灰青褐色。	I BGr. II層
13-8	須恵器・杯	14.0 9.5	— 4.2	小砂礫粒はあまり含まない。 焼成不良。	内外面共にロクロナデによる整形。色調は灰橙白色。	表採
13-9	須恵器・杯	11.6 4.0	— 4.7	小砂礫粒を含む。焼成良好。	内外面共にロクロナデが顕著に見られる。器外底部にヘラ削り痕あり。色調は灰青褐色。	I BGr. II層上部
13-10	須恵器・杯底部	— 11.0	— —	小砂礫粒を含む。焼成良好。	ロクロナデによる高台付、外底にヘラ削り痕あり。内側はロクロ目が顕著で白色を呈している。色調は灰橙色。	I BGr. II層下部
13-11	須恵器・盤 8-9	18.0 8.9	— 3.3	小砂礫粒を含む。焼成良好。	外表面はロクロ目が顕著に見られる。内底に沈線あり。ロクロナデによる貼付高台。色調は灰青褐色。内外表面は灰橙色。	I AGr. II層上部
13-12	須恵器・甕上胴部 8-4	28.5 —	— —	小砂礫粒を多く含む。 雲母片混在。焼成良好。	内側はロクロナデによる整形である。頸部のみ雑である。外表面は肩部に叩き目、口縁部にも浅い叩き目あり。外表面には黄緑色の降灰釉がかかる。色調は灰黃白色。	I BGr. II層上部
13-13	須恵器・甕下胴部 8-10	— 9.3	— —	小砂礫粒は殆ど含まない。焼成良好。	外表面は降灰の緑色点が散布。灰茶褐色で外表面はやや光沢がある。内面は荒いロクロ、ヘラ削り痕あり、灰茶褐色で全面に点状に降灰 (緑色) する。	I BGr. II層上部
13-14	土師器・甕口縁部 8-1	21.3 —	— —	長石、石英、金雲母などの砂粒をやや密に含む。焼成良好。	外表面口端部は軽い横位のナデ。頸部以下は指圧成形後横位 (左から右) の刷毛ナデ。頸部以下指圧成形後雑な横ナデ。口縁部は、胴部より厚めだが器厚はやはり均一。端部も細く尖り気味の部分や厚い作りの部分などあり、傾きもバラつきがある。色調は口縁部が黄灰色、胴部が灰茶褐色。	II層上部
13-15	土師器・甕口縁部 8-2	20.5 —	— —	長石、石英、金雲母等の細砂、粗砂粒をかなり密に含む。焼成はやや良好。	外表面は指圧成形後かなり粗い刷毛による斜位のナデ。内側口縁も外面と同様の刷毛による横位のナデ。頸部以下は指圧成形後横位の削り? 色調は橙褐色。	I BGr. II層下部

位置 r. 下部	13-16	土師器・甕上胴部	13.0	14.2	長石、石英等の微砂～粗砂(1～4mm大)をかなり密に含む粗い土。焼成はやや良好。	口縁部は指圧によるツマミ成形の後回転ナデ。内面は指圧成形。外表面は縦位の刷毛目。かなり粗い胎土だが外面ではそれほど砂粒は目立たない。色調は外面が灰褐色、内面が暗灰～茶褐色。	1 BGr. K-1 埋土 2 上部	
	13-17	須恵器・高盤 8-5	25.6	—	小砂礫を多く含む。焼成良好。	全面にロクロ目、かなりシャープ。灰青白色で釉はかからず。胎土・焼成・調整痕などから、13-18がこの脚である可能性もある。	1 A・BGr. II層下部	
	13-18	須恵器・高盤脚 (広口瓶?) 8-6	—	16.0	—	やや小砂礫を多く含む。焼成良好。	外表面はロクロ目が顕著に見られる。内面はロクロナデ整形。色調は灰黄白色。	1 AGr. II層上部
	13-19	灰釉皿(猿投)	11.3 6.3	— 2.3	小砂礫はあまり含まない。焼成は甘く、生焼けに近い。	全体にロクロナデ整形で釉は発光していない。外底に糸切り痕あり。色調は灰黄白色。	1 BGr. II層上部	
	13-20	灰釉皿(蓋?) (猿投)	11.4 5.6	— 2.7	小砂礫粒を多く含む。焼成良好。	全体にロクロナデ整形で、釉の痕はないようである。外底部には糸切り痕あり。色調は灰黄白色。	I層	
	13-21	土鍤 8-7	—	—	0.5～2mm大の砂粒を多量に含む。焼成はやや不良。	色調は灰色。器面状態はあまりよくなく、調整は不明確。	1 AGr. II層上部	
	13-22	砥石 8-11	—	—	石質不明。黄白色を呈し、表面風化し軟化。	断面台形で、表・裏面が使用面となる。側面も使用した可能性があるが、剥落して不明。	1 BGr. II層上部	
	13-23	ひょうそく (瀬戸・美濃)	—	6.9 5.0	砂粒をまばらに含む。焼成良好。	内外面共にやや厚い紫褐色の鉄釉施釉。外底部は糸切り痕が残り、中央に孔がある。色調は灰白色。	I層	

### C区 (図版14)

Gr. 上部	Gr. 下部	図版 No.	器種 写真図版 No.	法量(cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
				口径 底径	胴径 器高			
Gr. 上部	Gr. 下部	14-1	須恵器・瓶底部 (猿投)	— 8.0	—	灰青色で小砂礫をやや含む。焼成良好。	回転ナデ仕上げ。3分の1片。	a Gr. III層中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-2	美濃・山茶碗	13.8 4.4	— 5.8	灰青色で緻密。焼成良好。	ロクロ回転ナデ。6分の1片。	a Gr. III層上～中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-3	美濃・鉢	22.3	—	長石、石英等の微砂～粗砂まばら。焼成良好。	口縁部の上部は灰緑色乳白色のいくぶん厚い釉。回転ナデ仕上げ。	a Gr. III層中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-4	美濃・山茶碗	14.5	—	長石等の微砂、細砂をまばらに含む緻密な土。	回転ナデ。底内面に指圧(強いナデ)痕。	a Gr. III層中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-5	美濃・山茶碗	13.0 4.1	— 3.4	灰青色で緻密な胎。小砂礫含まず。焼成良好。	回転ナデ、糸切底。3分の2欠。	a Gr. III層中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-6	美濃・山茶碗	11.8 3.0	— 3.2	灰白色で小砂礫は含まない。焼成良好。	内外面共にロクロナデ。底部はヘラ削り雑。6分の5欠。	a Gr. III層上部
Gr. 上部	Gr. 下部	14-7	猿投・山茶碗	— 8.0	—	灰白色で小砂礫粒を多く含む。焼成良好。	外表面はザラザラ。底部に粗穀痕あり。糸切り痕あり。	a Gr. III層上部
Gr. 上部	Gr. 下部	14-8	瀬戸・山茶碗	— 6.5	—	長石粒目立つ。黒雲母粒の吹き出しが見られる。焼成やや不良。	内外面共に回転ナデ。残存2分の1。表面、断面には気孔が多く見られる。	a Gr. III層中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-9	猿投・山茶碗(小皿)	8.2 4.0	— 2.2	灰黃白色で小砂礫は含んでいない。焼成良好。	外表面にロクロナデ。底部に糸切り痕。口部4分の3欠。	a Gr. III層上～中位
Gr. 上部	Gr. 下部	14-10	猿投・山茶碗(小皿)	8.1 4.9	— 1.7	灰白色で小砂礫はあまり含まない。焼成良好。	底部に糸切り痕。整形は雑でところどころ指ナデ痕あり。3分の2欠。	a Gr. III層中位

14-11	美濃・山茶碗（小皿）	8.0 4.5	— 1.6	淡灰色で均質であるが粗い長石粒をわずかに含む。焼成良好。	ロクロ回転ナデ。4分の1残存。	a Gr. III層中位	15-3
14-12	美濃・山茶碗（小皿）	8.0 4.3	— 1.5	長石、粗砂粒をまばらに含むが非常に緻密。	外面から内面にかけて回転ナデ。底部は回転糸切り痕が残る。4分の1残存。	a Gr. III層上面	15-4
14-13	おろし皿（美濃？） 8-12	14.2 8.2	— 3.4	灰黃白色の緻密な土。焼成良好。	底部整形は雑。外表面はロクロ削り雑で凹凸あり。6分の5欠。	a Gr. III層上面	15-5
14-14	古瀬戸・皿底部 8-13右	— 4.8	— —	灰黃白色を呈する。焼成良好。	内面はハケ塗り。底部は不整形なロクロ回転痕。	a Gr. III層上～中位	15-6
14-15	古瀬戸・折り縁盤 8-13左上	29.5 —	— —	黄灰色、緻密。焼成良好。	外面から内面にかけての口縁は回転ナデ。内面に灰釉の痕跡があるが、発色せず黄白色のこびりつきがある。	a Gr. III層	15-7
14-16	古瀬戸・仏花器台脚	— 3.9	— —	灰白色で小砂礫粒は含んでいない。焼成良好。	外表面は灰黄緑色釉。底部の糸切り痕は雑。	a Gr. III層上～中位	15-8
14-17	常滑・壺 8-16上	18.8 —	— —	0.5mm以下の白色微粒を少し含む。0.5mm大の気孔がところどころに見られる。焼成良好。	内面横位のナデ。口縁部に自然釉。8分の1残存。	a Gr. III層中位	15-9
14-18	常滑・甕	39.7 —	— —	長石を主体とする粗砂粒を密に含む。焼成良好。	外表面口縁部は回転ナデ。内面の口縁部は茶褐色、灰緑色釉を斑点状に被る。灰緑色釉がかかる。残存20分の1。	a Gr. III層中位	15-10
14-19	常滑・甕	41.1 —	— —	1~3mm大の白色砂粒を含む。焼成良好。	内外面共に回転ナデ。8分の1残存。	a Gr. II層中位	15-11
14-20	常滑・甕 8-16中	45.0 —	— —	極微粒の長石、石英粒を多く含む。堅緻で灰色を呈す。焼成良好。	内外面共に回転ナデ。口縁部の内面は灰がかぶりゴマ塩状。10分の1残存。	a Gr. III層上～中位	15-12
14-21	瀬戸・鉄釉擂鉢 8-14	32.0 8.9	— 12.6	灰黃白色で胎土中に雲母片散在。焼成良好。	外表面の上部から下部はうすい茶褐色釉。所々に白色が散在。口部3分の2欠。底部3分の2欠。	a Gr. III層中位	15-13
14-22	擂鉢（鉄釉）	35.5 —	— —	長石、石英等の微砂～粗砂をやや密に含む。ややガサついた感じの土。焼成良好。	全面回転ナデで、鉄釉がかかっている。9本以上の櫛齒状器具によるスリ目。6分の1残存。	a Gr. III層中位	15-14
14-23	鉄釉鉢	21.4 —	— —	青灰色を呈するやや粗い土でガサガサする。1~4mm大の石英粒を多量に含む。焼成良好。	内外面共に上部は回転ナデで、内外面全体に鉄釉がごくうすくかかっている。外面下部は回転ヘラ削り。外面にはうすい鉄釉もれがある。	a Gr. III層上部	15-15
14-24	灰釉茶碗 8-15	10.4 4.9	— 7.7	灰白色で緻密な胎で小石は含まず。焼成良好。	内面全体に釉がかかる。内面底部は窯クソ付着。底部ヘラ削り出し。3分の2欠。	a Gr. III層中位	15-16

## D区（図版15・16）

図版No.	器種 写真図版No.	法量(cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
		口径 底径	胴径 器高			
15-1	土師器・鉢 9-1	18.9 5.8	— 12.3	黄灰白色土で0.5~2mm大の砂粒を多量に含む。焼成は良好。	底部が穿孔され、口縁部～胴部は3分の2欠。内面は平滑に仕上げられるが、脆く剥落箇所が多く見られる。	2 AGr. K-301
15-2	土師器・甕	25.4 —	— —	外表は灰白色で内側は暗灰褐色、石英、長石、雲母等をやや密に含む。	約4分の1周片。胴部片多数あるが接合できない。表面はかなり荒れる。15-3と共に。焼成は普通。	2 AGr. VI層下部

位 面	15-3	土師器・甕	—	—	橙褐色で石英等をかなり密に含む。焼成は普通。	10分の1周片。胴部片多数あるが接合できない。やや長胴気味で縦位の刷毛調整がなされる。15-2と共に。	2 AGr. VII層下部
	15-4	土師器・甕	18.5 —	—	淡橙褐色で石英等をやや密に含む。焼成良好。	約6分の1周片。外表は良好。内外とも刷毛調整がなされる。	3 AGr. P-301
面 面	15-5	須恵器・杯	9.2 5.5	— 3.2	灰青褐色で小砂礫を多く含む。焼成良好。	底3分の2欠。底部に回転窓削り痕がみられる。内外ともロクロなで。	3 BGr. B溝
	15-6	須恵器・杯	17.8 15.5	— 4.4	灰青白色で小砂礫。雲母片多く散在。焼成良。	全体の約3分の1が残存する。丁寧なロクロなでが内外なされる。	3 AGr. A溝
～中位 位	15-7	須恵器・高杯	8.6 —	—	灰青褐色で小砂礫をやや含む。内側に茶褐色のバフ。焼成良好。	脚部片で、外表は雑で窓削り痕がみられる。	2 BGr. VII層上部
	15-8	須恵器・長頸瓶	7.9 —	—	灰青白色で小砂礫粒若干含む。焼成良好。	口頸部片で2分の1欠。外表に縞状の自然釉がかかる。	1 AGr. C溝
～中位 位	15-9	須恵器・甕	24.5 —	—	灰青褐色でやや緻密。小砂礫をやや多く含む。焼成良好。	口頸部片で9分の8欠。薄い器壁で内外とも丁寧なロクロなでがなされる。叩き目残存。	3 AGr. B溝
	15-10	須恵器・杯	12.0 —	—	暗灰褐色で内面は灰白色を呈する。焼成良好。	3分の2欠。底部中央に火ぶくれ痕がみられる。ヘラ削り痕残存。	1 DGr. VII層上部
位 位	15-11	須恵器・長頸瓶 9-4	7.3 —	—	灰青白色で小砂礫やや含む。焼成良好。	2分の1欠。灰緑色の自然釉がかかる。ロクロ顯著。外表は光沢がある。	1 AGr. C溝
	15-12	須恵器・横瓶	12.1 —	—	灰青褐色で紫色に近い。小砂礫含む。焼成良好。	口頸部片で4分の3欠。内側にやや厚い自然釉が降着。	1 AGr. C溝
～中位 位	15-13	須恵器・甕	17.0 —	—	赤灰白色で小砂礫をやや含む。焼成不良。	内外表は灰青色を呈し、口頸部片である。外表には叩き目が残存する。	3 AGr. VII層上部
	15-14	灰釉・瓶	— 13.0	—	灰白色で緻密。雲母、長石粒含む。焼成良好。	東濃系産で灰緑色の縞状の灰釉が降着。底部に同心円状の沈線？あり。	3 AGr. A溝上部
位 位	15-15	須恵器・甕	28.7 —	—	明灰色で白色粒子をやや密に含む。焼成良好。	口頸部片で10分の1周片。外表に調整痕と接合時の叩き痕が施される。	3 AGr. A溝
	15-16	灰釉・短頸壺	11.0 —	—	灰白色で小砂礫粒を多く含む。焼成良好。	口部から肩部までの破片で、内側にゴマ塗状の釉が降着。猿投産。	3 AGr. A溝上部
部 位	15-17	灰釉・火舍香炉 9-3	— 24.5	—	灰白色で長石、細砂をまばらに含む。焼成は良好で堅敏。	歯脚片の1足部分の破片。脚はヘラでよく面取りされている。内側に灰褐色釉が降着する。普通の付高台の上から接合（ヘラ調整）。単位？	3 AGr. VII層上部
	15-18	灰釉・皿 9-6	13.0 6.5	— 2.7	灰黄白色で粗雑。雲母片少し含む。焼成良好。	灰緑色釉で潰け掛けで施されている。東濃産。底部に糸切痕は残存していない。	3 AGr. VI層上端
位置 1 部	15-19	灰釉・段皿 9-5	14.1 5.9	— 3.2	灰褐色で粗雑。焼成良好。	灰緑色釉で潰け掛け技法で施されている。東濃産。底部に回転ヘラ削り痕が残存する。やや狭縁の段を有する。	3 BGr. A溝
	15-20	灰釉・碗	16.2 7.5	— 5.5	灰青白色で小砂礫はあまり含まない。焼成良好。	灰緑色釉で刷毛塗りで施される。付高台で東濃産で内側に三叉トチンの痕跡が見られる。	3 BGr. A溝
部	15-21	鉄製品	—	—		4片が接合でき、表面のサビを取り除いた後でも瘤状のサビで覆われる。断面が方形の棒状でこれで完形であるか否かは判明しない。	2 BGr. VI層下部
	15-22	土鍤 9-9右端	—	—	均質の黄白色を呈する。	両端が僅かに欠損する。須恵質の生焼けかもしれない。焼成は不良で外表は磨滅している。	3 BGr. VI層下部
部	15-23	土鍤 9-9 右から2番目	—	—	明黄灰色で均質な微粒である。焼成良好。	両端が欠けている。	3 AGr. A溝

15—24	陶錘 9—9 上段左から 2番目	—	—	極微粒の白色粒を含む均質土あまり緻密でない。焼成良好。	一端を欠損する。外表は粗雑な整形がなされる。	2 A Gr. VI層上部
15—25	陶錘 9—9 左上	—	—	暗灰色で微粒。焼成は非常に良好。	完形で堅緻。両側から穿孔されている。	2 A Gr. VI層上部
15—26	陶錘 9—9 下段左から 2番目	—	—	灰白色を呈し、微粒子で雲母の吹き出しが黒色となる。焼成良好。	一端を欠損し、堅緻。	2 A Gr. VI層上部
15—27	陶錘 9—9 下段左から 3番目	—	—	微粒で均質。焼成良好。	一端を欠損している。	3 B Gr. A溝
15—28	陶錘 9—9 左下	—	—	灰白色で微粒子で均質。焼成良好。	半欠。	3 B Gr. B溝
15—29	支脚状土製品	—	—	黄橙白色で0.5~3mm大の砂粒を多く含む。比較的緻密。焼成良好。	支脚状の破片で、両端部を欠損する。二次火熱を受けている様である。ヘラ面取りがなされる。	2 B Gr. VI層下部
15—30	特殊土製品 9—2	—	—	赤橙色を呈し、0.5~4mm大の砂粒を多量に含む。焼成は普通。	2分の1欠。底部にわずかな木葉痕が残存する。底部内面に突起状の凸部(欠損)あり。現存部分はフタ状の器形を呈する。	2 A Gr. VI層下部
16—1	灰釉碗	15.2 7.4	—	灰白色で長石、雲母などを含む。焼成良好。	灰白色釉で一部釉ダレは灰緑色を呈する。猿投。	3 B Gr. B溝
16—2	猿投・山茶碗	15.4 6.4	— 5.6	1~3mm大の長石粒を含む。灰白色で緻密でない。焼成良好。	回転ナデ仕上げ。底面は非常に器壁が薄い。	3 A Gr. B溝
16—3	猿投・山茶碗	14.6 7.0	— 5.0	灰白色、小砂レキ(雲母片)を多く混入。焼成良好。	指ナデ痕。粗い調整。	3 B Gr. K—3
16—4	猿投・山茶碗	16.6 10.1	— 5.7	灰青色で小砂レキ粒をやや含む。(長石系)	灰緑色の自然釉かかる。ロクロ整形による凹凸が激しい。焼成良好。	3 A Gr. B溝
16—5	猿投・山茶碗 9—7 左	15.3 7.4	— 5.6	灰青白色、緻密な胎で雲母片等の小砂礫を含む。焼成良好。	一部降灰釉。やや丁寧なロクロナデ。	3 A·B Gr. B溝
16—6	猿投・山茶碗	15.4 6.4	— 5.6	0.5~1mm大の長石微粒子を多く含む。灰白色で緻密でない。	回転ナデ痕残存。焼成はやや不良。	3 A Gr. A溝埋土
16—7	美濃・山茶碗 9—8	9.9 3.7	— 4.4	灰黃白色で小砂レキをよく含む。焼成良好。	指及びロクロナデ。やや雑なナデ。	3 A Gr. A溝埋土
16—8	美濃・小皿	9.9 3.7	— 2.1	色調は不明であるが、灰青褐色であろう中に小砂礫粒を混在する。	ロクロ回転ナデ。指ナデ痕あり。焼成良好。	3 A Gr. A溝埋土
16—9	美濃・小皿	9.8 4.2	— 2.3	灰青褐色に近い。小砂レキは含まない。	ロクロ回転ナデ。糸切り痕。横シマ状に白色の化粧掛け。焼成良好。	3 A Gr. A溝埋土
16—10	猿投・山茶碗	15.3 —	—	灰青白色で小砂レキをやや含む雲母片混入。	ロクロ回転ナデ整形。降灰による黄緑釉。口縁部は玉縁状。焼成良好。	3 A Gr. A溝埋土
16—11	猿投・山茶碗	16.5 —	—	灰白色で小砂レキやや含む雲母片混入。	ヘラ削り。口縁部を肥厚させて玉縁状に仕上げている。焼成良好。	3 A Gr. A溝上部
16—12	猿投・山茶碗	18.0 —	—	灰白色で小砂レキ粒をやや含む。焼成良好。	やや粗雑、ロクロナデ。	3 A Gr. B溝下部
16—13	猿投・小皿	7.5 3.6	— 2.3	灰白色で粗雑な雲母片。小砂レキ、長石粒多し。	ロクロ調整、指ナデ、糸切痕、焼成良好。	3 A Gr. B溝
16—14	猿投・小皿	7.8 3.8	— 2.3	灰白色で小砂レキ含む。焼成良好。	口部に一部降灰釉。ロクロナデ、糸切痕。	3 A Gr. B溝

16—15

16—16

16—17

16—18

16—19

16—20

16—21

16—22

16—23

16—24

16—25

16—26

16—27

16—28

16—29

16—30

E

版  
No

17—1

16-15	美濃・小皿	7.4 5.3	— 1.1	灰白色で緻密。小砂礫粒を含む。焼成良好。	ロクロナデ、雑な調整。灰白色で降灰が付着。	3 A Gr. B溝
16-16	美濃・小皿	7.3 4.1	— 1.4	灰黄褐色で小砂レキは含まない。	ヘラ削り痕雜。糸切り底。焼成はやや不良。	3 A Gr. A溝
16-17	土師質・内耳土鍋	19.5	—	長石を主体に石英、金雲母などの微~粗砂をやや密に含む。焼成良好。	耳部は内面の整形が一走終了したのち、指頭ナデにて接合。耳部は向かって、左側の口(穴)が広く、右側が狭くなっている。横方向(不整)のナデ調整。	1 D Gr. C溝埋土Ⅲ層
16-18	瀬戸・播鉢	24.0	—	灰白色で小砂レキ粒を多く含む。焼成良好。	紫褐色の鉄釉。外表に小砂レキ粒が散在。ヘラ削り痕雜。	1 B Gr. C溝埋土V層
16-19	土師質・土鍋	22.6	—	0.5~2mm大の砂を多く含む均質な土で肌色を呈す。焼成やや不良。	外面全体にススがこびりつき、黒褐色を呈する。	1 B Gr. C溝埋土V層上部
16-20	美濃・天目茶碗	10.7	—	灰黄褐色でやや粗雑、小砂レキは含まない。	鉄釉に長石をかけたような釉。焼成良好。	1 C Gr. C溝埋土V層
16-21	白磁碗 9-10左下	— 6.6	— —	灰白色的磁土。粗雑。焼成良好。	乳白色でやや青味がある。ヘラ削り痕。気泡痕散在でやや青味がある。中国製。	3 B Gr. B溝
16-22	瀬戸・褐釉茶碗 10-2	11.1 5.0	— 7.4	灰白色でやや小砂レキを含む。焼成良好。	灰及び鉄の混合釉、暗灰緑色釉、ヘラ削り出し高台。釉ダレは黒色化している。	3 B Gr. A溝上部
16-23	灰釉・茶碗 10-1	11.2 3.8	— 7.6	灰白色で小砂レキ粒は含まない。焼成良好。	内面全施釉灰緑色で荒い貫入。浅い段(器表面)をなす。瀬戸か美濃かは判明しない。	3 A Gr. A溝下部
16-24	瀬戸・油壺 10-3	2.8 5.8	8.8 8.7	灰黄白色で小砂レキ粒は含まない。焼成良好。	釉の焼成はやや悪くボツボツ状である。糸切痕アリ。	3 A Gr. A溝上部
16-25	白磁碗 9-10左上	15.7	—	灰白色的磁土で緻密な胎。焼成良好。	乳灰白色釉、荒い貫入釉は薄い。中国製。玉縁手。	2 A Gr. I層下部
16-26	瀬戸・壺	13.8	—	灰青褐色で小砂レキ粒(雲母片)を混入。	薄い茶褐色の鉄釉。雲母片散在。ヘラ削り痕。焼成良好。	1 D Gr. C溝埋土IV層
16-27	鉄釉・鉢 9-12左	17.5	—	淡黃白色。緻密で均質。焼成良好。	外表面は暗褐色(一部茶白色に発色)でロクロ痕がめだつが内表面は、茶褐色鉄釉でわずかにロクロ痕がみられる。	1 B Gr. C溝埋土V層中位
16-28	鉄釉・壺 9-12右	— 10.5	— —	キメ細かく砂粒はほとんど含まない。焼成良好。	外表面は黒褐色鉄釉が厚くかかり、内表面はロクロ整形の後、黒褐色の鉄釉、二次焼成を受け表面が銀化している。	1 C Gr. C溝埋土V層最下部
16-29	砥石	—	—	石質は砂岩(微粒子)。	現存する使用面は三面ある。全体に火熱を受け、黄紅色を呈している部分がある。火熱によりもろくなっている。	3 A Gr. VI層上部
16-30	平瓦	—	—	細・粗砂粒をかなり密に含む。	色調は暗灰色、胎土が粗いため器表面はかなり荒れる。	1 B Gr. C溝埋土V層

### E区 (図版17)

図版No.	器種 写真図版No.	法量(cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
		口径 底径	胴径 器高			
17-1	土師器・高杯杯部	16.0	—	細・粗砂粒(0.5~3mm)をまばらに、ほぼ同大の白色粒子をやや密に含む。焼成良好。	杯底部と立ち上がり部分の接合部が段をなす。外面は指圧成形後、ゆるい回転ナデ。	1 B Gr. II d層

17-2	土師器・高杯	16.9	—	0.1~3mm大の黄白色粒子を非常に密に含む。5mm以下の粗砂粒はまばらである。焼成やや良好。	杯部は小片である為、径や傾きはやや不明確。いくぶん立ち上がりが急になる可能性あり。脚上部は強い押圧、中央部は細かい押圧痕の後縦位方向の整形があるが不明瞭。下部はやや強い押圧列。	1 BGr. II b層
17-3	土師器・甕台脚	— 10.0	—	長石・石英等の1~3mm大の粗砂粒をかなり含む。焼成良好。	胴上部は横位のナデで、表面は平滑だが押圧痕は完全に消えていない。下部はごく雑なナデ。砂粒が表面に目立つ。	1 AGr. II d層
17-4	土師器・高杯脚部 10-5	— 12.2	—	長石・石英・金雲母等の微砂～細砂をまばらに含む。焼成良好。	柱状部は完存。脚端部は8分の1残存。2片が接合。	1 BGr. II d層 II b層
17-5	土師器・甕	18.9	—	1~3mm大の粗砂を多く含む。焼成良好。	外表面は横位のハケ目。かすかな沈線。胴部の破片？がかなりあるが、接合しない。残存5分の1。	1 AGr. II d層
17-6	土師器・甕	16.4	—	1~4mm大の砂粒を多く含む。焼成やや不良。	外表面は一部にハケ目が残るが、ナデによって消される。	3 BGr. K-1
17-7	土師器・甕	8.8	—	1~2mm大の砂粒を多く含む。焼成やや不良。	器面は平滑でない。	1 AGr. II d層
17-8	土師器・壺 10-4	9.5 4.0	9.4 9.0	0.5~2mm大の砂粒を含む。焼成良好。	外表面はナデ、底部は特に圧痕は見られない。スレた圧痕。残存2分の1。	1 BGr. II b層
17-9	鉄製刀子	—	—		折り返している。全体にいくぶんソリをもつ様な印象を受けるが不明瞭。いくぶん厚みがある。芯は残存良好。	Bラインセクションベルト II d層
17-10	須恵器・杯	10.3	—	砂粒を含まない。緻密。焼成良好。	外表面は回転ナデ。	1 BGr. II 層
17-11	須恵器・杯 10-8右下	8.0 2.7	3.0	0.5mm以下の白色微粒子を少し含む。緻密でない。焼成やや不良。	頸部は回転ナデ。底部は回転ヘラ削り。	1 AGr. II d層
17-12	須恵器・盤	— 9.0	—	小砂礫は含まない。焼成良好。	底部はヘラ削り痕で雑。	1 AGr. K-1
17-13	須恵器・杯 10-6	15.4 9.1	5.6	小砂礫をやや多く含む。焼成良好。	内面は赤灰黄色を呈す。底部は回転ヘラ削りでロクロナデ。外表面は暗灰青褐色で、ロクロナデ丁寧。	1 AGr. II層上部
17-14	宝珠硯? 10-9	—	—	長石・石英等の細かい砂粒をまばらに含む。	背面は荒れているが、釉が剥落したものか？表面は器面状態が良好。色調は灰色。	表採

## F区（図版17）

図版 No.	器種 写真図版 No.	法量(cm)		胎土・焼成	形態・特徴	出土位置
		口径 底径	胴径 器高			
17-15	須恵器・甕口部	22.0 —	—	小砂礫をやや多く含む。焼成はやや不良。	外表面は灰白色を呈する。口縁部外面は突帯状に肥厚、櫛歯による波状文を描く。	6号集石
17-16	須恵器・甕口部	23.0 —	—	小砂礫をやや多く含む。焼成はやや不良。	内面は粗いナデで、ロクロナデ。口部9分の8欠。	2 BGr. I層下部

17-17	須恵器・甕口部	46.0	—	砂粒はごくまばらに含む。焼成良好。	外表面は繊維束状の痕跡が残る縦位のナデ整形。内面は回転ナデ。櫛状器具による波状文。右欄の3片が接合。	2 BGr. I層下部、1号・3号集石
17-18	灰釉碗(輪花) 10-10右上	—	—	小砂礫粒は含まない。やや緻密。焼成良好。	外表面は刷毛塗り。口部7分の6欠。東濃産。	3 AGr. I層下部
17-19	灰釉碗 10-10左下	15.0	—	小砂礫は含まない。焼成良好。	内外面共にロクロナデ。口部4分の3欠。東濃産。	1 BGr. K-1
17-20	灰釉皿片(輪花)	23.0	—	灰青白色の磁土に近い。焼成はやや不良。	内面は粗いヘラ削り、粗いナデ。東濃産。	2 BGr. I層下部
17-21	鉄釉・甕口部 10-12左上	13.7	—	小砂礫は含まない。焼成良好。	口頸部は茶褐色の鉄釉でボツボツ状になっている。	3 AGr. I層下部
17-22	近世常滑製品 10-13左	18.5	—	0.5~1mm大の砂粒を多く含む。焼成良好。	底部はザラザラし特に平滑にしていない。スス状の付着物がある。「赤物」?	1号集石
17-23	近世常滑・甕? 10-13右	— 21.5	—	1~3mm大の砂粒を少し含む。焼成良好。	外表面は回転ナデ。残存4分の1。「赤物」?	12号集石
17-24	灰釉香炉片 (古瀬戸)	— 8.6	—	焼成良好。	残存4分の1。	7号集石
17-25	陶器皿 10-12中央下	— 8.9	—	堅緻。0.5mm以下の気孔が見られる。焼成良好。	外表面は透明釉がかかる。色調は明灰色。右欄の3片が接合。	2 BGr. I層下部 3 AGr. I層下部 12号集石
17-26	瓦片	—	—	1~5mm大小の小石粒を含む。緻密。	表は繩叩き、裏は布目。焼成はやや不良。	2 AGr. K-1肩部

### 第3章 結びにかえて

天白・元屋敷遺跡に対して今回の調査は、初めて本格的な発掘調査であった。今回調査の目的は、既述したように遺跡範囲の確定と遺跡の性格を把握することであった。調査区を6箇所設定し、合計1,000m<sup>2</sup>程掘削した。当遺跡のように、範囲及び性格の確定を課題とする遺跡は、志段味地区内で2箇所ある。上志段味地区の海東遺跡、中志段味地区の当遺跡より南方約400m離れる湿ヶ遺跡である。従って3遺跡とも、今後も重要な課題をもつ遺跡である。

今回の調査からはたいへん多くの事が判明した。まず、B・E・F区は、遺跡推定の南東及び南端部に位置している。B・E区は包含層のⅡ層中から、古墳時代から中世にかけての土器・陶器など出土し、A区の包含層であるⅡ層と同様な出土のありかたがみられる。B区は、A・E区に比して多少包含層の残存状況が良く、中世期の遺物が混じないが、奈良時代から平安時代前期（8～9世紀）代の須恵器甕・瓶等の破片が集中している。このことはA・E区でも共通し、A区ではほぼ完形に近い須恵器杯蓋・身など十数点、E区ではほぼ完形である須恵器高台付杯身などが出土している。B・E区では、範囲を確認するのに若干苦慮したが、遺構を検出し得た。B区では1BGr.北壁際で焼土ブロックを周囲に混在する人頭大の礫群、E区では1AGr.のK-1であり、いずれも奈良～平安期の土師器・須恵器を出土している。このうち直立石を中心とした焼土ブロックが散在する遺構はA区にも見られる。上述の遺物群は保存状態が良く、割れ口を観察するとカドがスレていないことから、流水作用によって運ばれたものでなく、殆ど原位置を離れていないと思われる。また日常生活用の遺物が主体を占めることから、この時期に人々が居住していた面が地山のⅢ層上部及びⅡ層下部のレベルであったと考えられる。従って現今の畠・水田の掘削レベルよりも下位であることから、上述の様に良く残存していたと思われる。

このⅡ層の中・下部でも、古墳時代の土師器・須恵器が破片ではあるが、多く出土する。このことは、A・B・E区のⅡ層・D区のⅥ層でも見られ、A区では弥生時代後期頃とみられる甕形土器・壺形土器など僅かながら数片混在している。E区では保存状態が良い小型壺があり、古墳時代前半と考えられる。その他は破片だけで時期が判明しない。また須恵器でも、杯身・頸など若干出土し、6世紀から7世紀のもので

ある。Ⅱ層の下部にも、古墳時代の包含層が薄く残存しているのは既述したとおりである。Ⅱ層上・下部に中世陶器が小破片ながら多く出土している。A区での東半部に14世紀～15世紀にかけての古瀬戸灰釉製品等が集中していることが、特色であるが、A・D・E区と同様、猿投・美濃山茶碗片が多い。なかでもB区は表面採集では平安期の灰釉陶片をかなり多く採取したが、実際には上層中しか出土していない。本来は奈良～平安前期の包含層上に灰釉以降の包含層があり、後世の攪乱及び流失により消滅していると考えられる。D区で検出された15世紀を下限とするB溝の肩部が、現在の水田掘削で本来よりもかなり下部であったことを想い起こされる。なお、破片ではあるが、D区で灰釉火舍香炉と思われる獸足片・綠釉陶片、E区で宝珠硯片、F区以南で農水道工事の立会調査中に採取した古瀬戸鉄釉狛犬片など、宗教色の強い遺物も含まれているのが注目される。

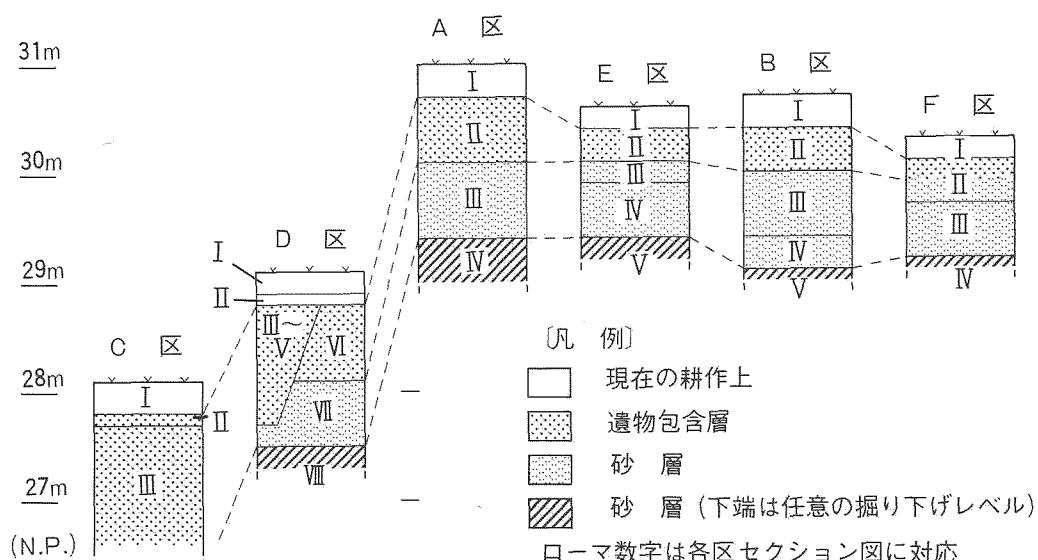
F区は、僅か約30cmの耕作土中に古墳時代から近代に至るまでの遺物を含み、B・E区のⅡ層のような包含層は見られなかった。これはF区が微高地南端上部で南の水田と約60cm程段差があることから、もともとⅡ層および上部の包含層が残存していたが、後世の洪水及び流水によって削られ、流失したものと考えられる。このことは農水道工事の立会調査で、表土から僅か30cm程でⅢ層となり、その間に須恵器から近世磁器が混在して出土するが、そのうち中世陶器を最も多く出土していることから傍証される。B・F区は近世の神社の跡地と伝えられ、江戸期の遺構を期待したが皆目無かった。F区で検出された集石状遺構は近代の陶磁器片を含んで、恰も石を集めて投棄したようであり、性格は不明である。石自体も配列・深さ・範囲も一定しておらず、割石は見られない。ほとんど河原石ばかりで加工された痕跡もなく、神社などで使用されるものとは考えられない。

C区は、遺跡の西側中央に位置するが包含層は残存していなかった。河原礫石を掘削した深掘り坑で、古墳から江戸期までの遺物が、かなり得られた。そのうち中世から江戸期にかけての遺物は、保存状態が良く洪水の氾濫によって近くの包含層からここへ流入したものと思われる。従ってこの遺物群の出自が課題となる。この地点は昭和前半頃まで庄内川の堤防の決壊により度々洪水に見舞われたという、地元古老のお話からも、相当複雑な流水路が予想される。

D区では、江戸時代中期（17・18世紀）の陶器を含む溝が2条検出され、中志段味村絵図（図版1・2）が示すように、江戸時代にもこの地区に入々が居住しているのが判明した。この溝中からは江戸期の遺物は少なく、数点の陶器と漆器椀片だけである。多いのは中世陶器（山茶碗片）である。江戸期の生活用具が少ないとことから、この溝は住居とは離れたものと思われる。どう使用されていたのかを判断するには、今回の掘削範囲内では資料不足である。両溝とも東西に走向し、守山高校構内に隠れ、西側については遺跡範囲を拡げる必要となる。

以上、各区ごとの相関及び若干のまとめを述べてきたが、全体的なことを記述したい。遺跡範囲はD区ではもっと西に拡がり、現状は校地内でこの西限位置は不明である。南のB・E区で包含層が残存し、遺構も検出されることから南限位置もやはり南に拡がる。F区は包含層が流失しているが、農水路立会調査で知られた二次的な堆積でもあるが、中世陶を大量に出土することから補足資料として抑えなければならない。その意味では現在の水田まで南限位置を拡大しなければならない。C区の出土遺物がどこから流入したのかは、現在判明しない。遺物のあり方からはD区に共通している。微高地縁辺部中位のものと想定すれば、遺跡の北西側は東の縁辺部まで縮小される。以上から、従来の遺跡範囲を西・南側については未だ拡がり、北西部では東へ縮まると考えられる。

（平出）



第5図 各発掘区の基本層序対比模式図

## 発掘調査日誌抄

- 珠のあ古今、たあ南讀がる。ま
- 昭和59年10月15日 現場事務所予定地に、発掘器材を搬入する。現地と地籍図の対比を行い、発掘予定地点を確認する。
- 10月16日 A区の樹木の伐採、雑草の刈り取りを行う。19日終了。
- 10月22日 A区の試掘を行い、層序を確認する。同区の発掘区を設定、掘削開始。B区の地点を決定、試掘を行う。
- 10月24日 現場仮設事務所（プレハブ2階建）完成。
- 10月25日 市水準点No.240より、事務所脇の杭へ水準値を引照する。以後、この杭より各区基準杭へ水準値を移す。
- 10月31日 A区のⅡ層掘削進行。須恵器の半完形品等が頻出し始める。
- 11月2日 A区Ⅱ層中の遺物集中部分を中心に遺構検出に努めるが、遺構は確認されず、以後も、土師器・須恵器の半完形品多数出土。
- 11月7日 A区1EGr.Ⅲ層上面にて、中世の掘り込みを検出、K-1とする。
- 11月8日 A区1AGr.で、西向きのⅡ層落ち込み検出。相変らず遺物が多い。
- 11月12日 A区西部を残し、Ⅱ層の掘削終了。Ⅲ層上面の遺構検出を続けつつ、セクション図作成を始める。
- 11月14日 A区3・4E、3・4FGr.にてピット、溝状遺構等検出。最終的に、遺構はごくわずか。
- 11月16日 C区の発掘区設定を行う。A区は、セクションベルトの取りはずし。
- 11月19日 C区で試掘を行う。水田下に砂礫層を確認する。
- 11月20日 A区Ⅲ層上面の平板測量を行う。A区の調査は、22日に終了。
- 11月22日 C区を10Gr.に区分、掘削を本格化する。
- 11月26日 C区のⅠ層掘削進む。D区の発掘区設定を行う。
- 11月29日 C区のⅠ・Ⅱ層掘削概ね終了。前日からのD区の試掘により、湿地状の落ち込み（のちC溝とする）を確認。
- 11月30日 C区1・4・6・aGr.でⅢ層の深掘りを始める。D区ではⅠ層の掘削を進める。ミニユンボによるA区の埋め戻し進行（12月3日に終了）。
- 12月4日 C区aGr.のⅢ層中位より、中～近世を主体とする陶片が集中的に出土。
- 12月5日 D区Ⅰ層掘削終了。Ⅱ層上面に遺構はなく、掘削を進める。
- 12月7日 D区では、北部でC溝の肩を確認、南部ではⅥ層上面より灰釉陶器の出土目立ち、ピット状・溝状の遺構らしきもの検出。
- 12月10日 C区のセクション図作成。
- 12月12日 C区埋め戻し開始。D区では、Ⅶ層上面の遺構を平板測量する。
- 12月13日 D区南東隅で、遺物の密な溝状遺構確認（のちA・B溝として確認）。
- 12月15日 C区の埋め戻し終了。
- 12月19日 D区のC溝及びA・B溝、またその間のⅦ層の掘削進行。Ⅶ層中の不明確な遺構らしきものについては、この頃平板測量を数回行う。
- 12月21日 A・B溝の遺物出土状態を平板測量する。

昭和59年12月25日 降雪のためD区は作業不能。E区を設定し、表土除去を開始。

12月27日 各発掘地点に安全対策を施し、年内の現場作業を終了する。

昭和60年1月7日 作業再開、D区のA溝・C溝・VI層の掘削を進める。

1月10日 D区ではVII層上面遺構を検出、掘削。B・E区でI層を掘削。

1月11日 D区の全体平板測量、写真撮影などを行う。B・E区はI～II層を掘削。

1月14日 B区II層中位より須恵器等がまとまって出土。E区でも土師器小壺等が出土するが、いずれも遺構は確認できず。D区はセクション図を作成。

1月16日 B区1BGr.で遺物がまとまって出土。一部出土状況を実測。

1月17日 B区K-1・K-2を実測。III層をトレンチ状に掘削。E区1AGr.にて焼土に伴う土師器甕片検出、実測。その他III層上面遺構を掘削。

1月18日 F区設定、掘削を開始。B・E区では実測・写真撮影を行う。

1月21日 24日まで作業員を休止、B・D・E区の実測等を行う。

1月25日 E・F区掘削。F区にて数ヶ所の集石を検出。

1月28日 文化庁技官による現場視察。

1月30日 F区集石の平板測量、写真撮影を行う。

2月1日 E区の全体測量等及びF区の遺構再検出を行う。B区では、一部の埋め戻しを人力により開始。

2月4日 E・F区の実測・写真撮影を行う。D区では、機械による埋め戻し開始。

2月6日 F区の実測を最後に、埋め戻しを除き現場作業終了。

2月8日 B・D区（機械）、E区（人力）の埋め戻しを終了。

2月13日 F区の埋め戻しを人力により終了。

2月15日 器材等を搬出し、発掘調査の現場作業を完了。以後現場事務所にて整理作業を続け、2月末にプレハブを撤去した。

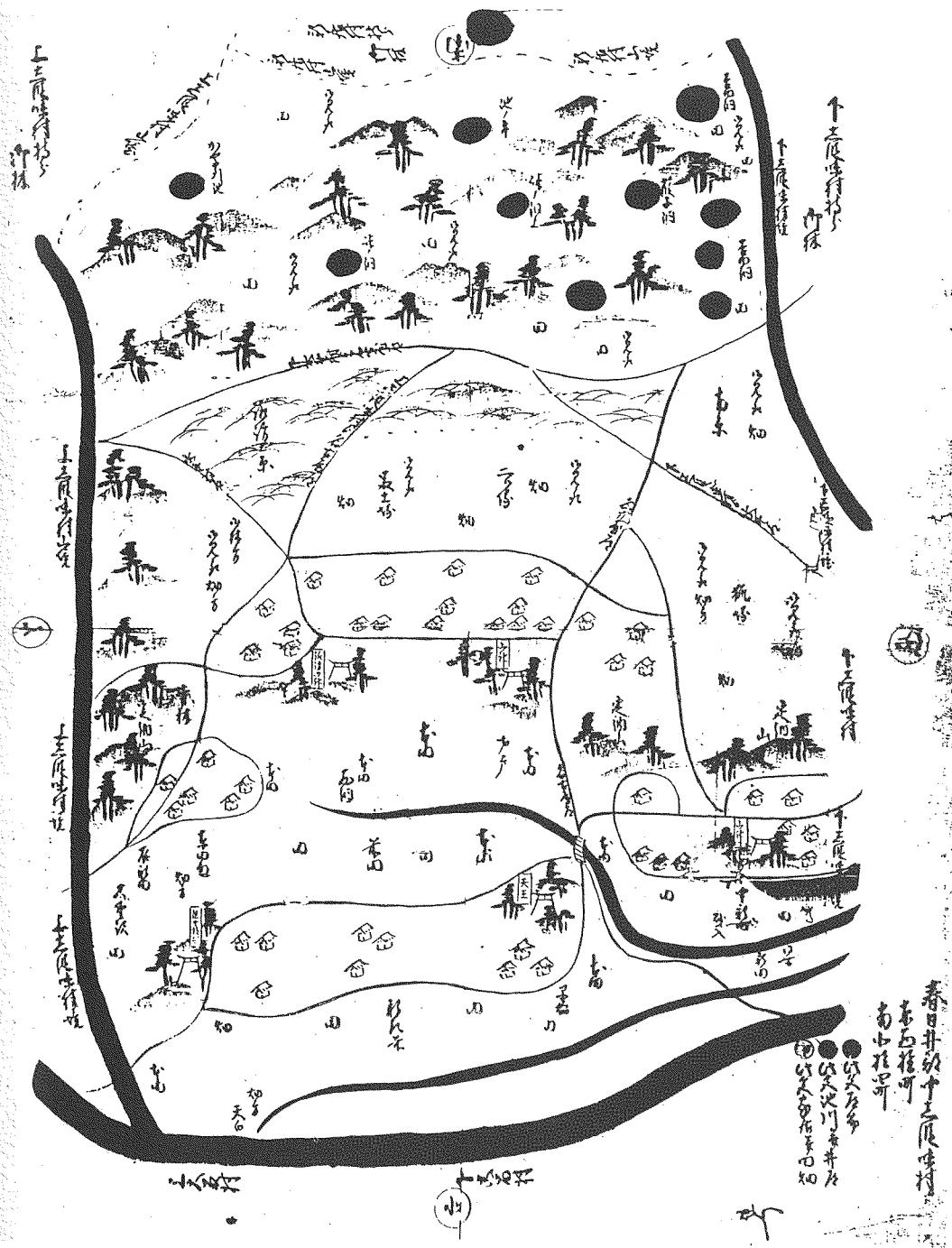
### 註

- 註1 守山市『守山市史』 1963  
川合剛・安達厚三「名古屋市守山区樹木遺跡の石器」『名古屋市博物館研究紀要第3号』 1980
- 註2 名古屋市博物館『守山の遺跡と遺物』展示図録 1984
- 註3 春日井市教育委員会『春日井市遺跡発掘調査報告第3～7集』 1970～81  
春日井市『春日井市史資料編3』 1973
- 註4 杉原莊介・大塚初重編『土師式土器集成本編1』 1971 東京堂出版  
玉口時雄・小金井靖『土師器・須恵器の知識』 1984 東京美術
- 註5 猿投遺跡調査会編『伊保遺跡』 1974

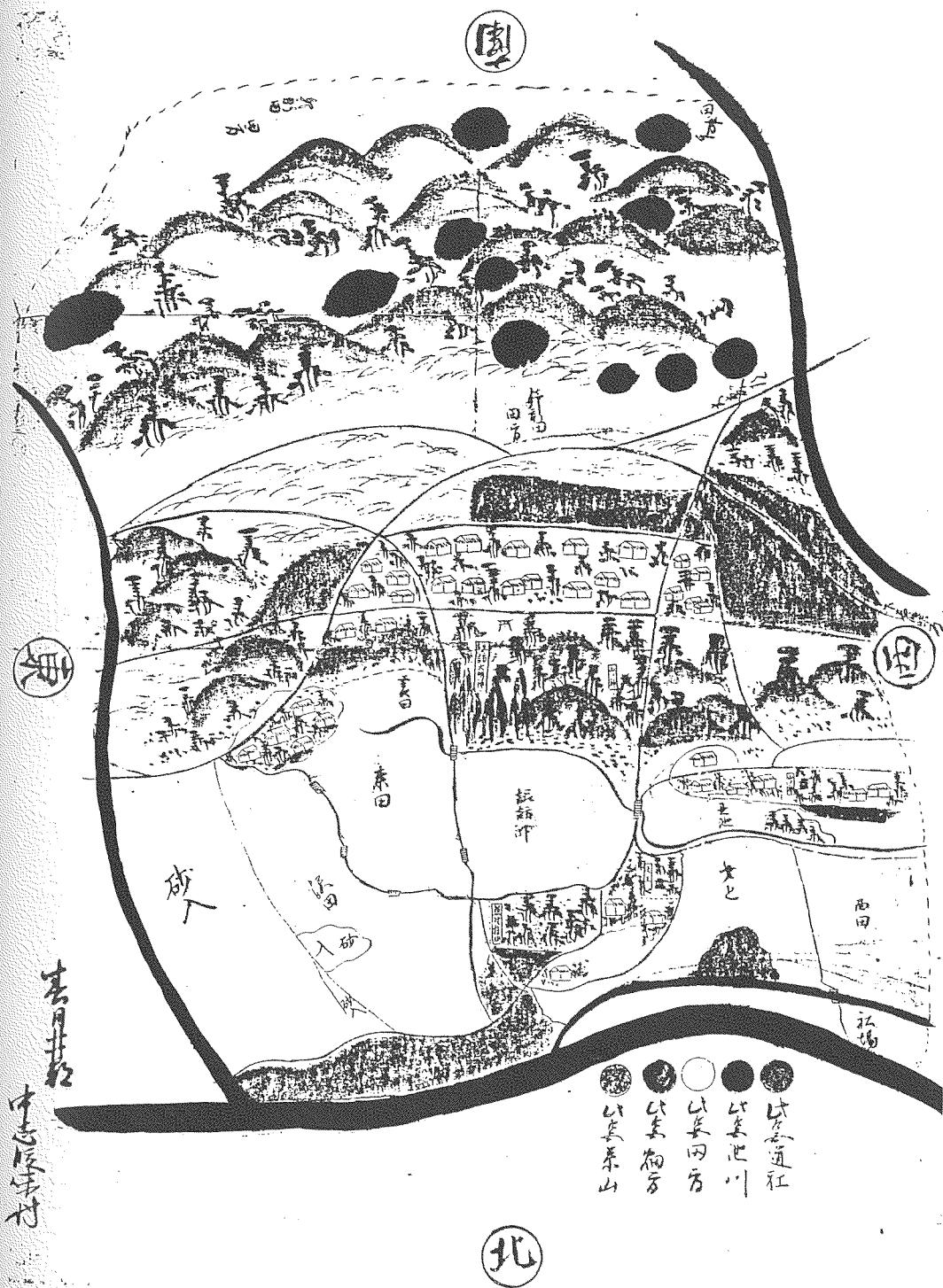
图 版



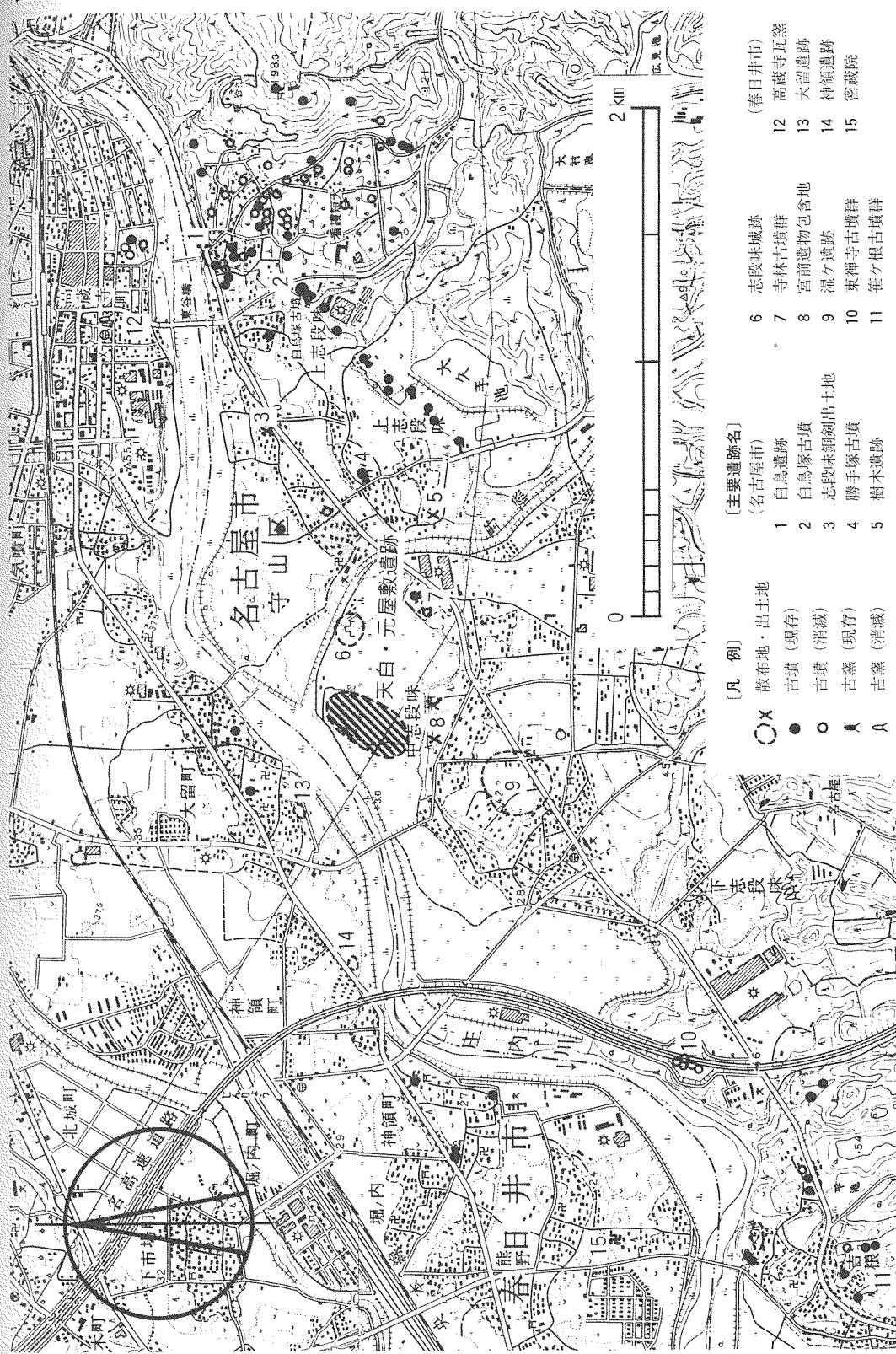
図版1 中志段味村絵図(寛政8年)



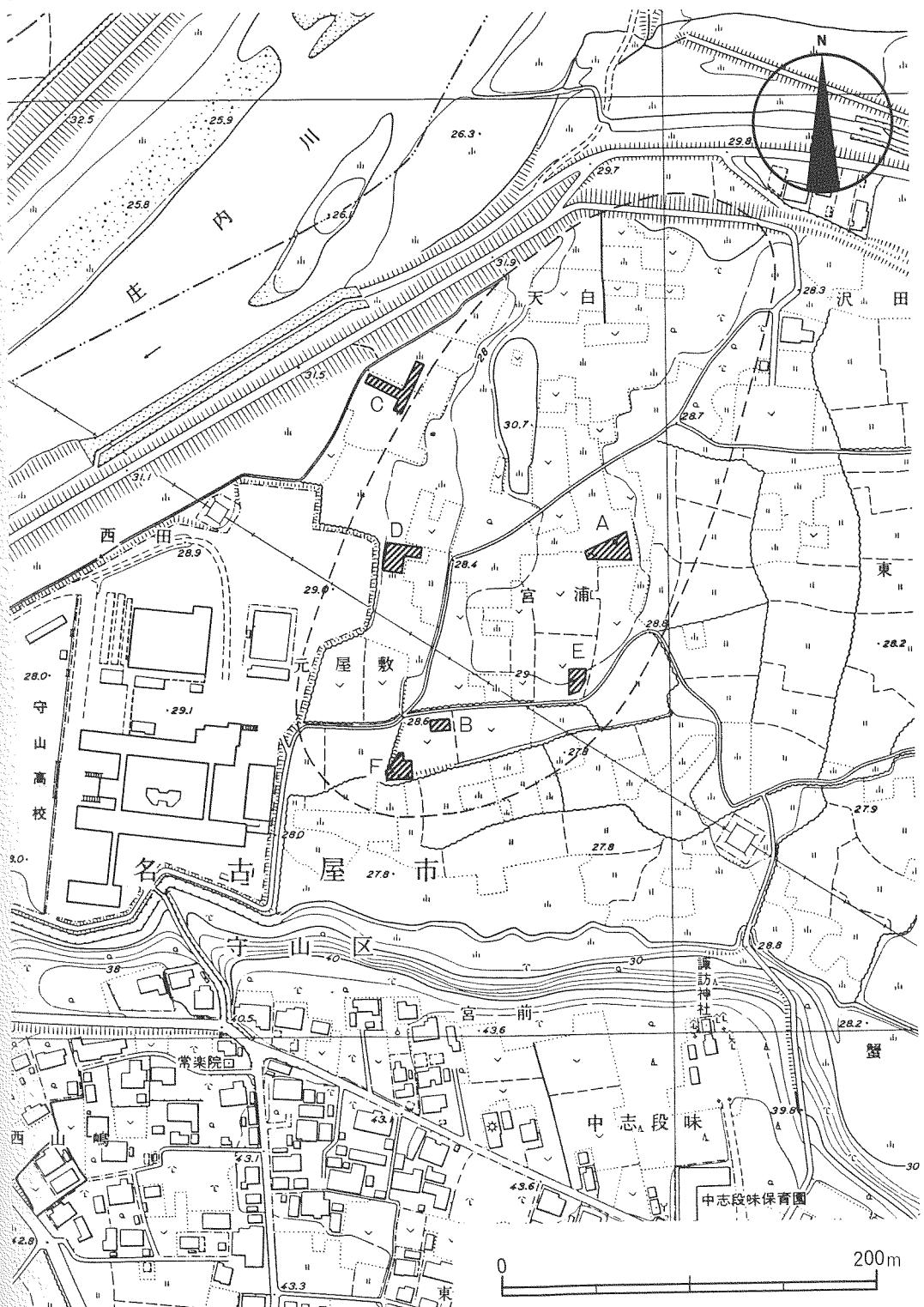
図版2 中志段味村絵図(幕末)



図版3 遺跡位置及び周辺遺跡分布図



図版4 遺跡周辺地形及び発掘区配置図



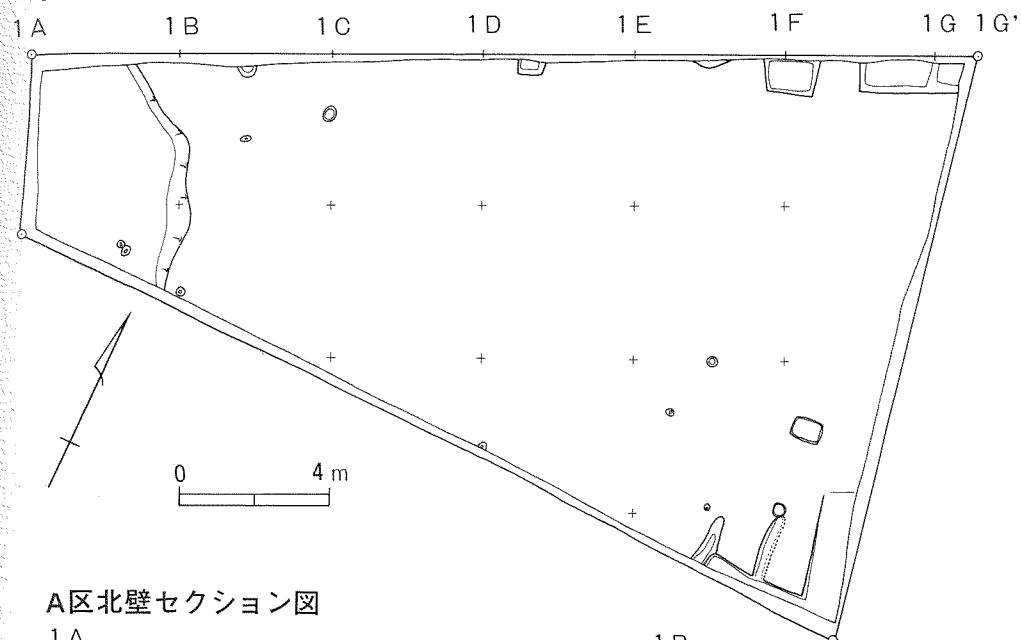
今年度発掘地点



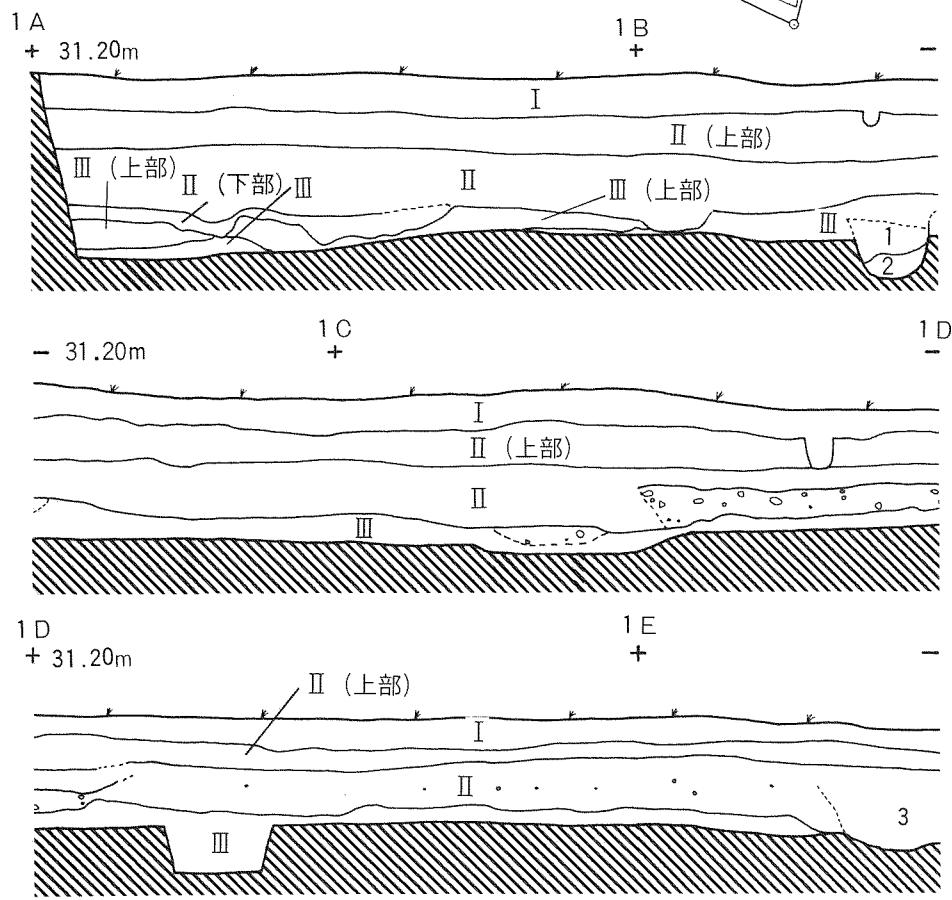
遺跡推定範囲

図版5 A区全体図・セクション図

A区全体図（Ⅲ層上面遺構図）

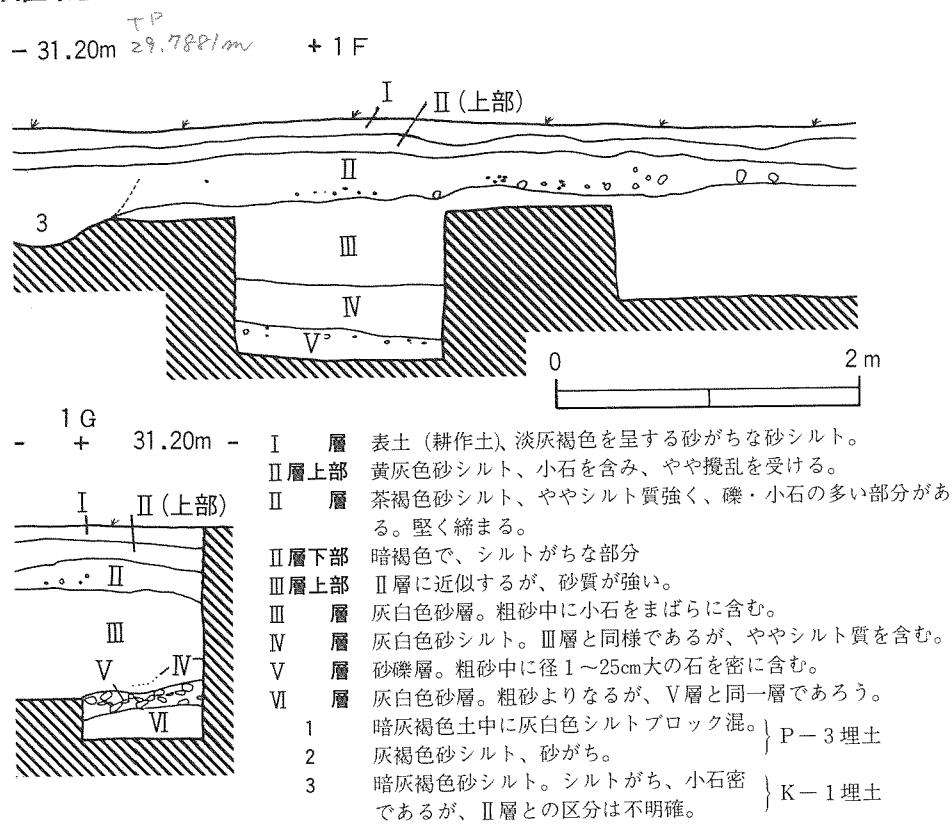


A区北壁セクション図

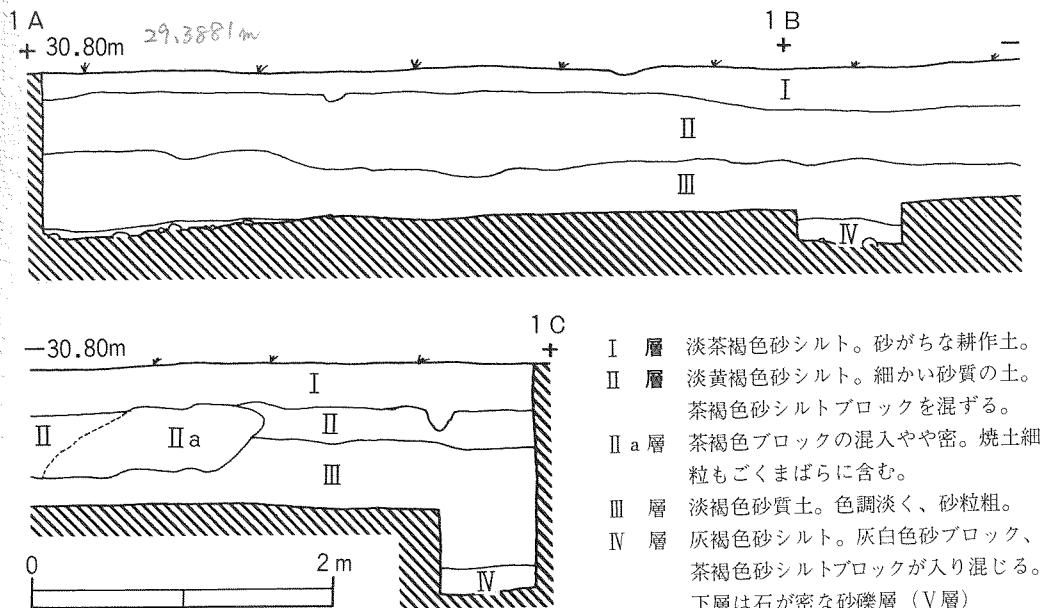


図版6 A・B区セクション図

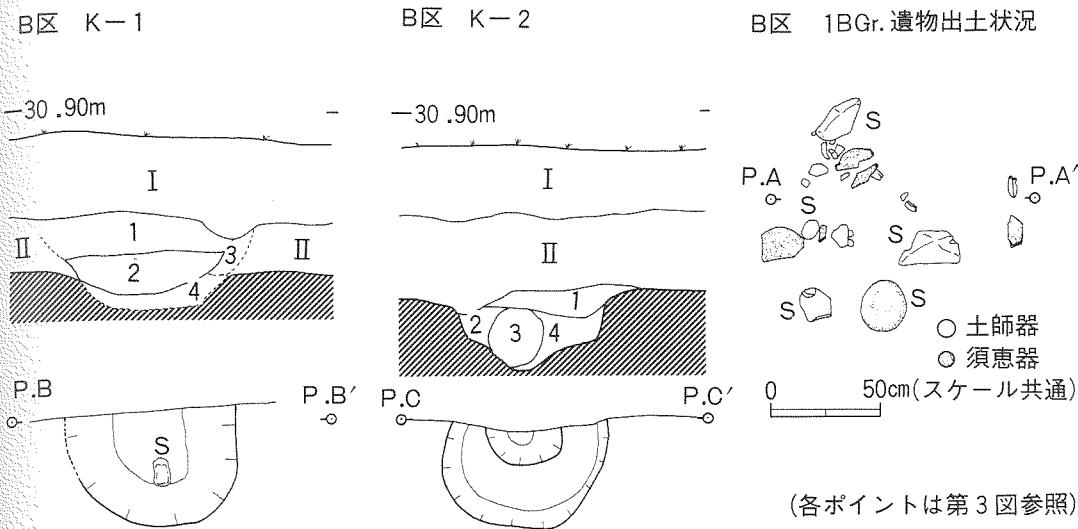
A区北壁セクション図



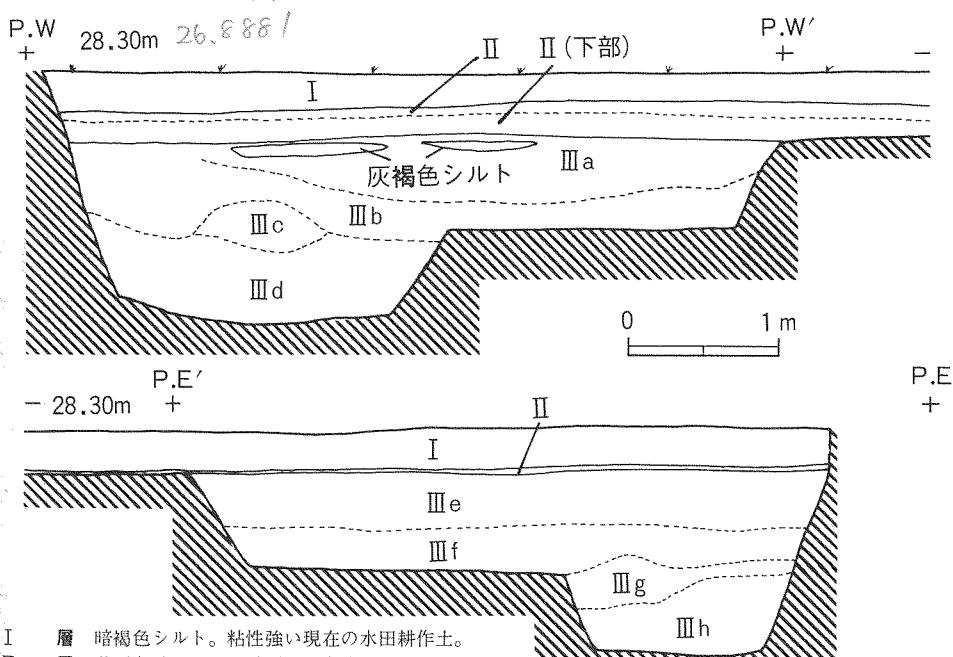
B区北壁セクション図



図版7 B区遺構平面図、C区セクション図



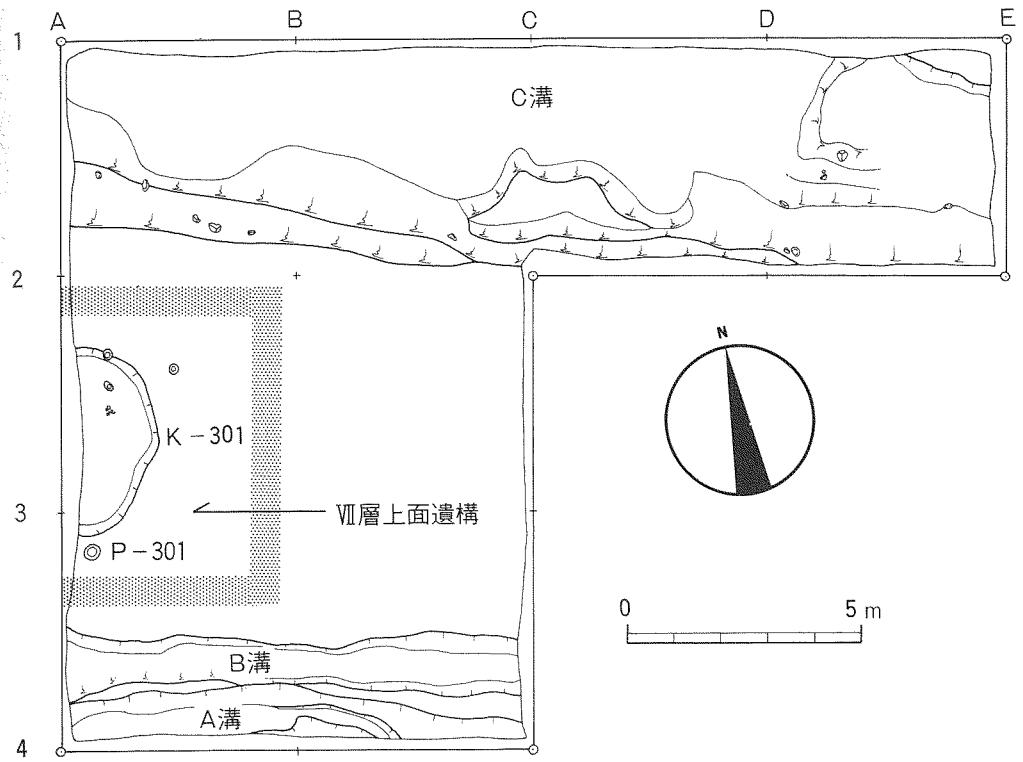
C区 セクション図



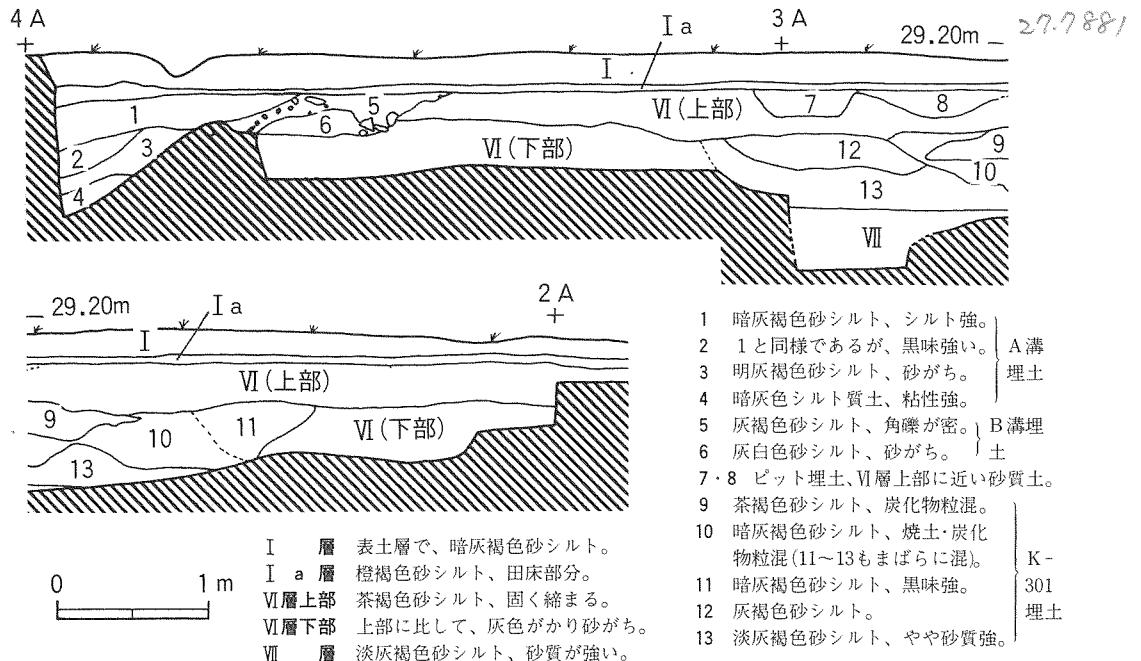
- I 層 暗褐色シルト。粘性強い現在の水田耕作土。
- II 層 黄灰色砂シルト。砂がちで堅く締まる。
- II層下部 淡灰褐色砂シルト。砂がちだが、やや粘性。
- III a 層 砂礫層。粗砂を主体に。石を密に含む。間層状に灰褐色砂シルトブロックを含む。
- III b 層 砂礫層。大型の石が密で、シルトは少ない。
- III c 層 シルトがちな灰褐色砂シルト。一部グライ状となる。部分的な大ブロックの堆積。
- III d 層 砂礫層。かなり大型の石を密に含む粗砂層。
- III e 層 砂礫層。粗砂と小石主体。
- III f 層 砂礫層。粗砂主体。小石・シルトブロックをまばらに含む。
- III g 層 淡茶褐色砂シルトの大型ブロックより成る。
- III h 層 かなり大型の石密。間に粗砂・小石詰まる。

図版8 D区遺構平面図・セクション図

D区主要遺構平面図

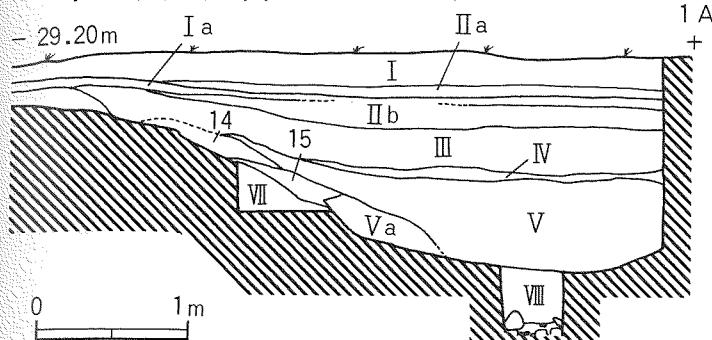


D区 西壁セクション図



図版9 D区セクション図、E区遺構・セクション図

D区セクション図



II 層 淡灰茶褐色砂シルト。

II a層 灰褐色砂シルト。

II b層 暗灰茶褐色砂シルト。

III 層 暗灰褐色砂シルト。

14 層に似る、砂がち。

15 層に似る、やや粘性。

IV 層 淡灰褐色砂シルト、粘性が強く均質。

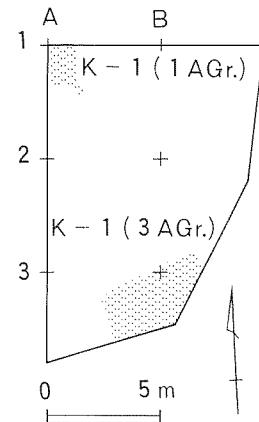
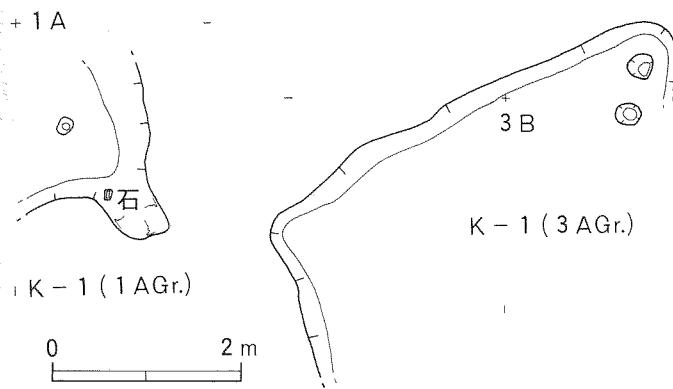
V 層 黒褐色砂シルト、粘土状で、植物遺体を多く含む。

V a層 V層より黒味強。

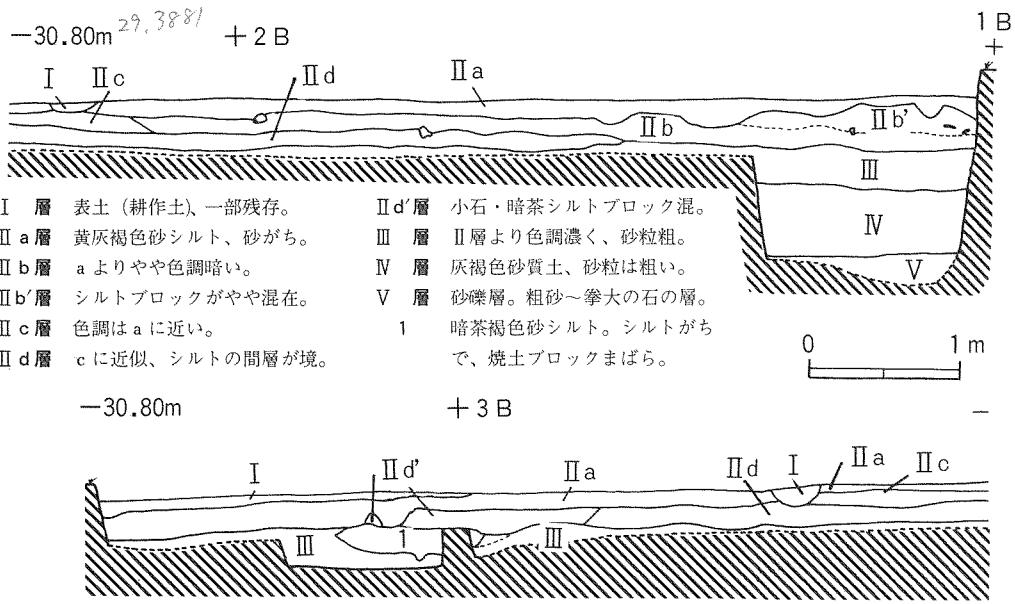
(III~V a層はC溝埋土)

VII 層 淡灰青色砂層、下部は礫層となる。

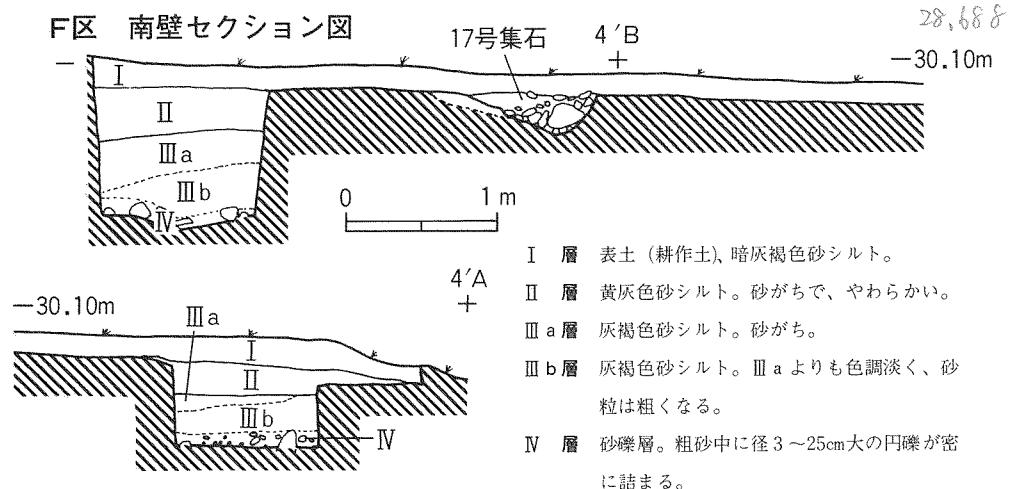
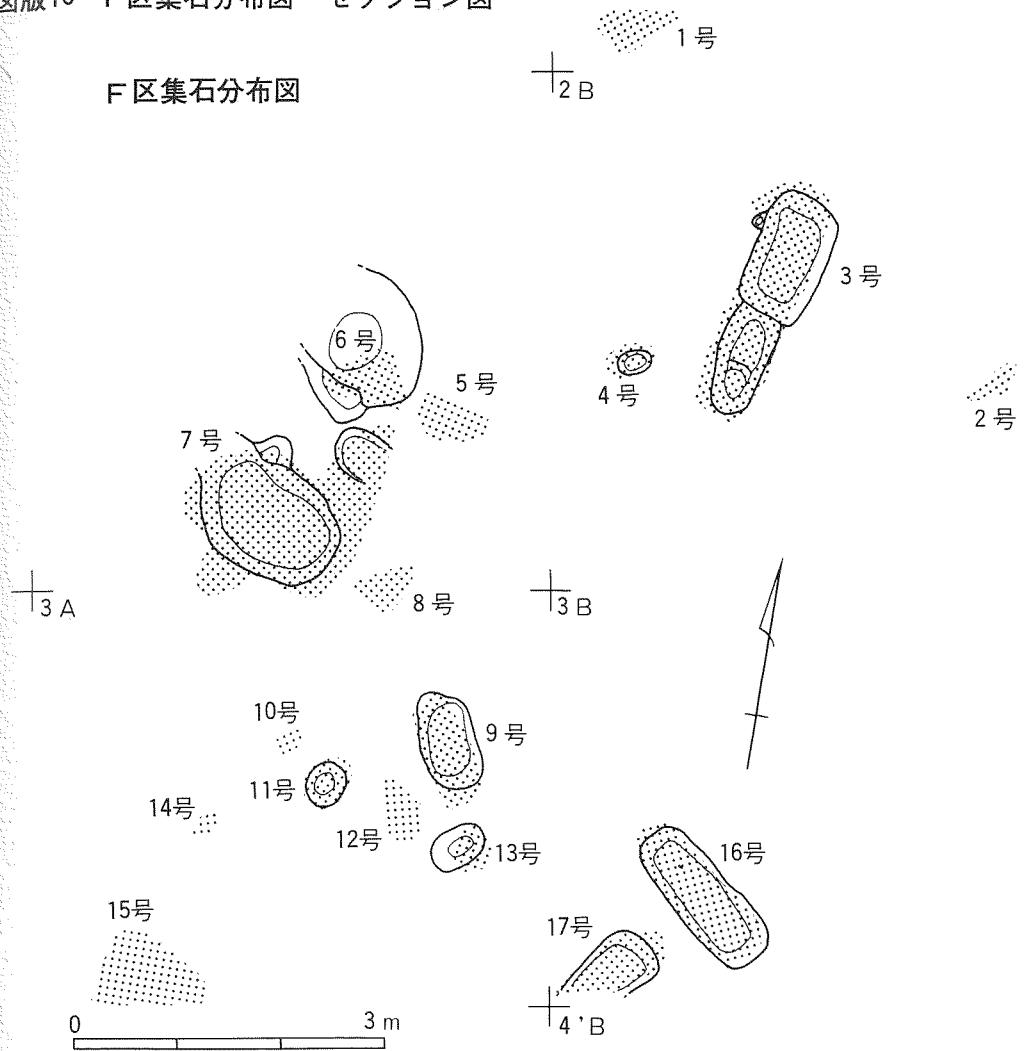
E区 III層上面遺構



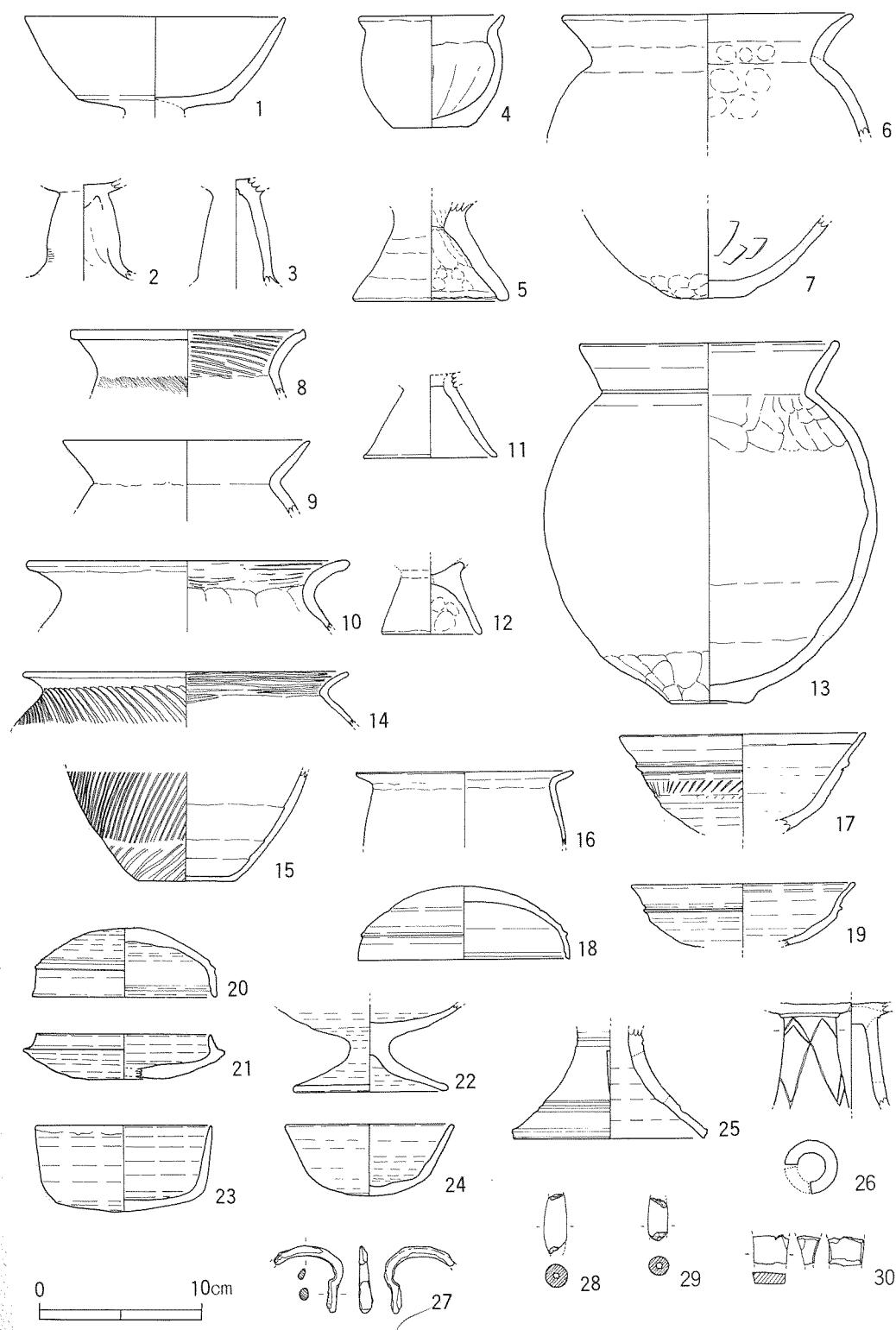
E区 Bラインセクション図



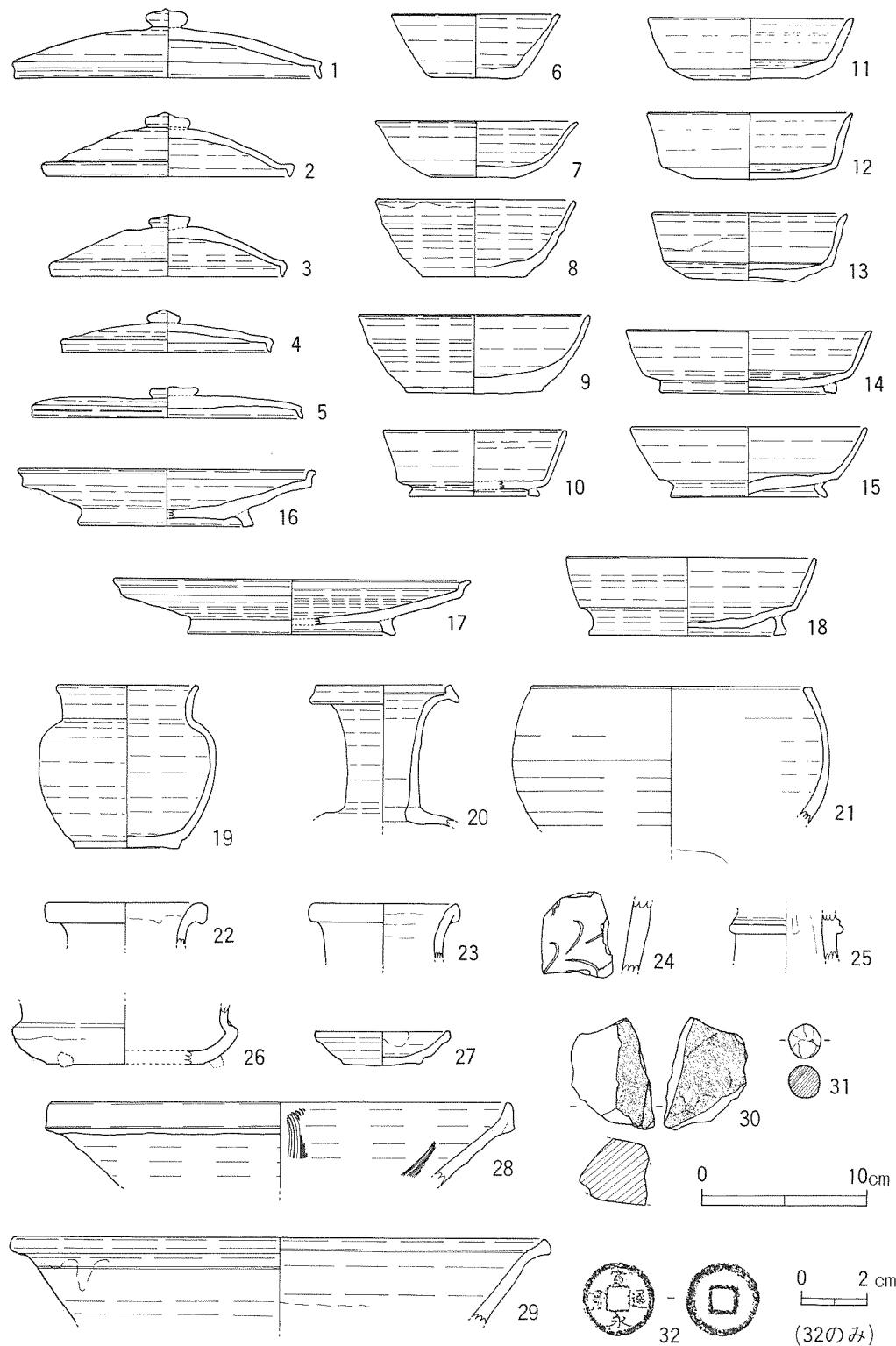
図版10 F区集石分布図・セクション図



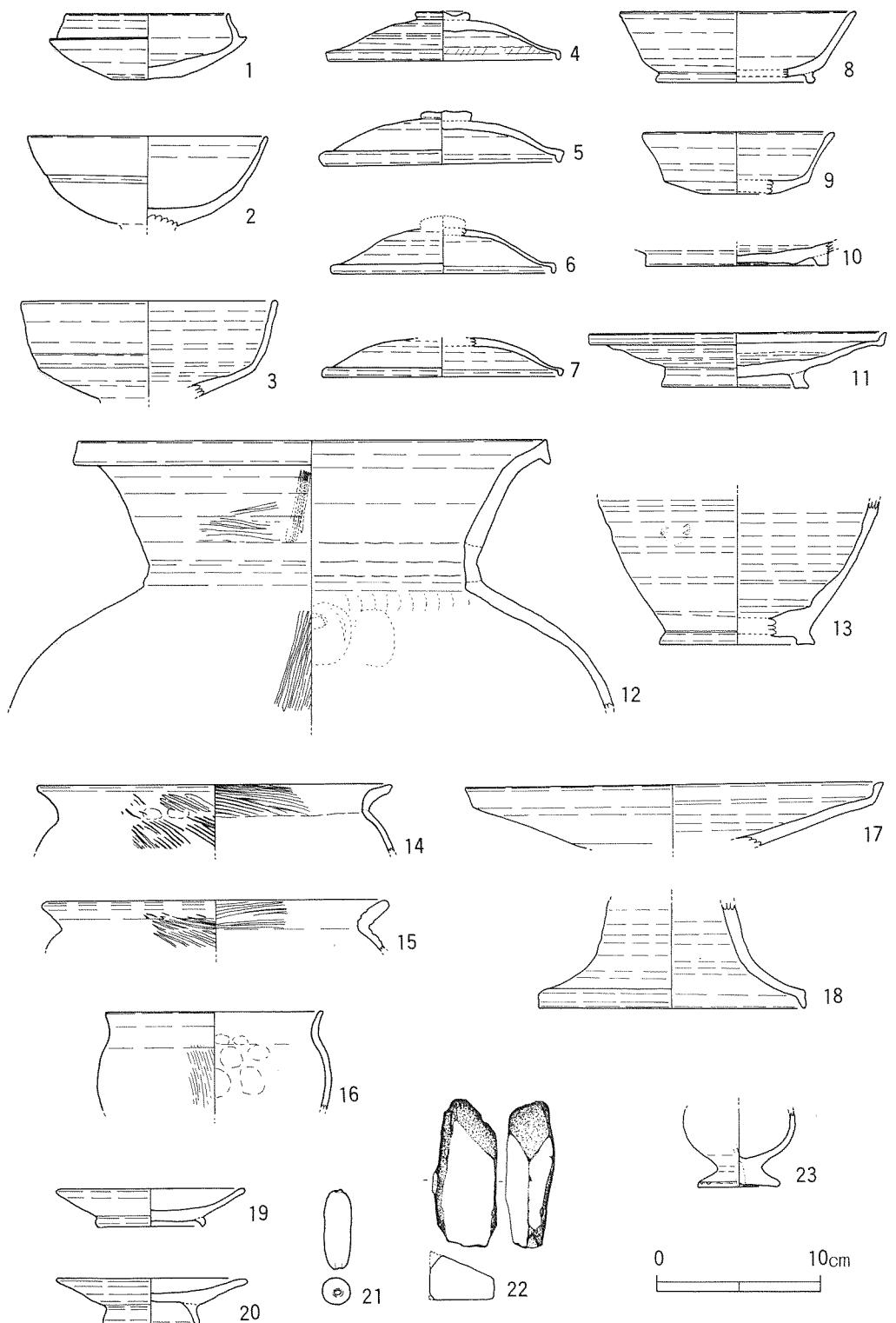
図版11 A区出土遺物



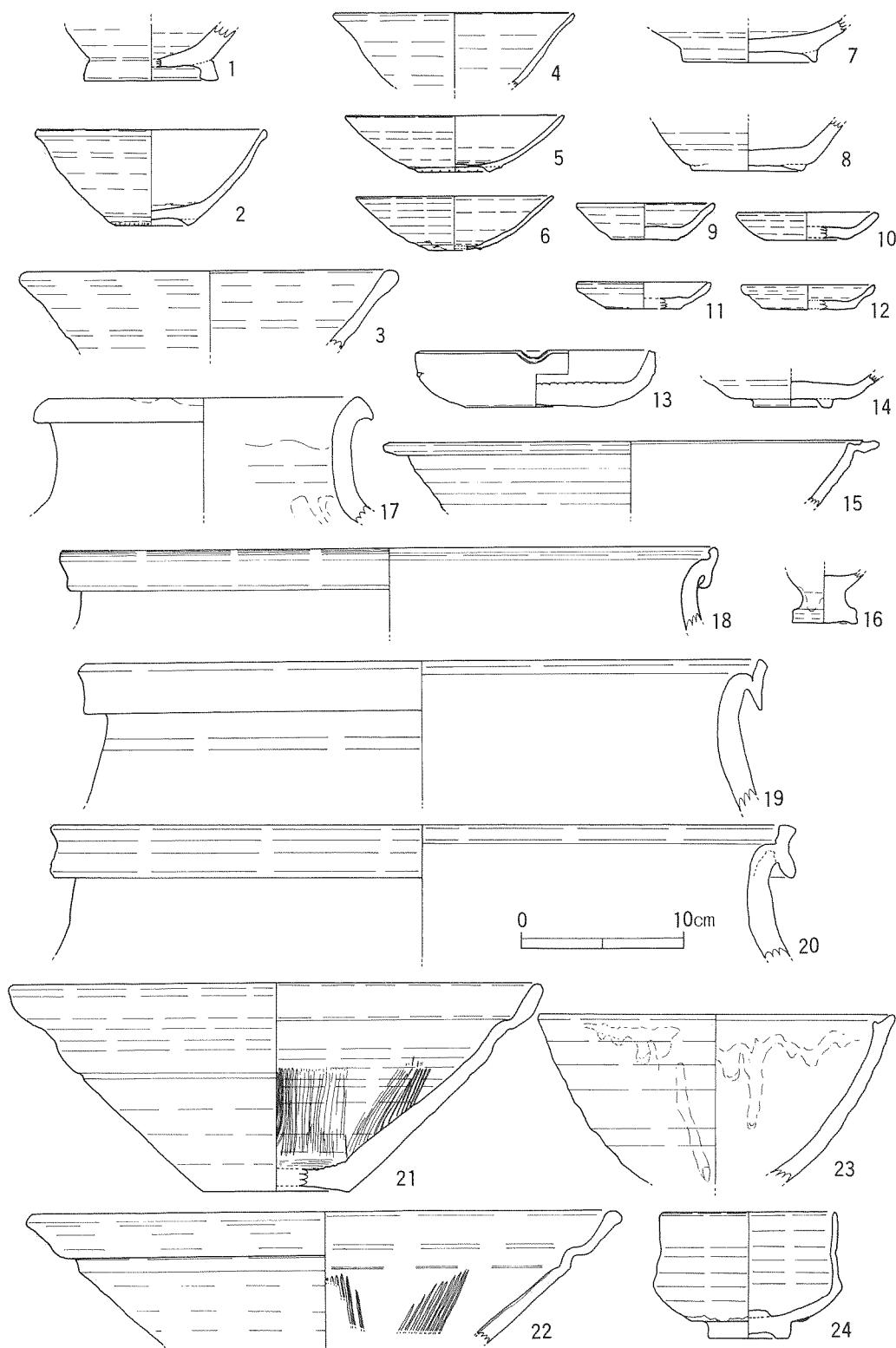
図版12 A区出土遺物



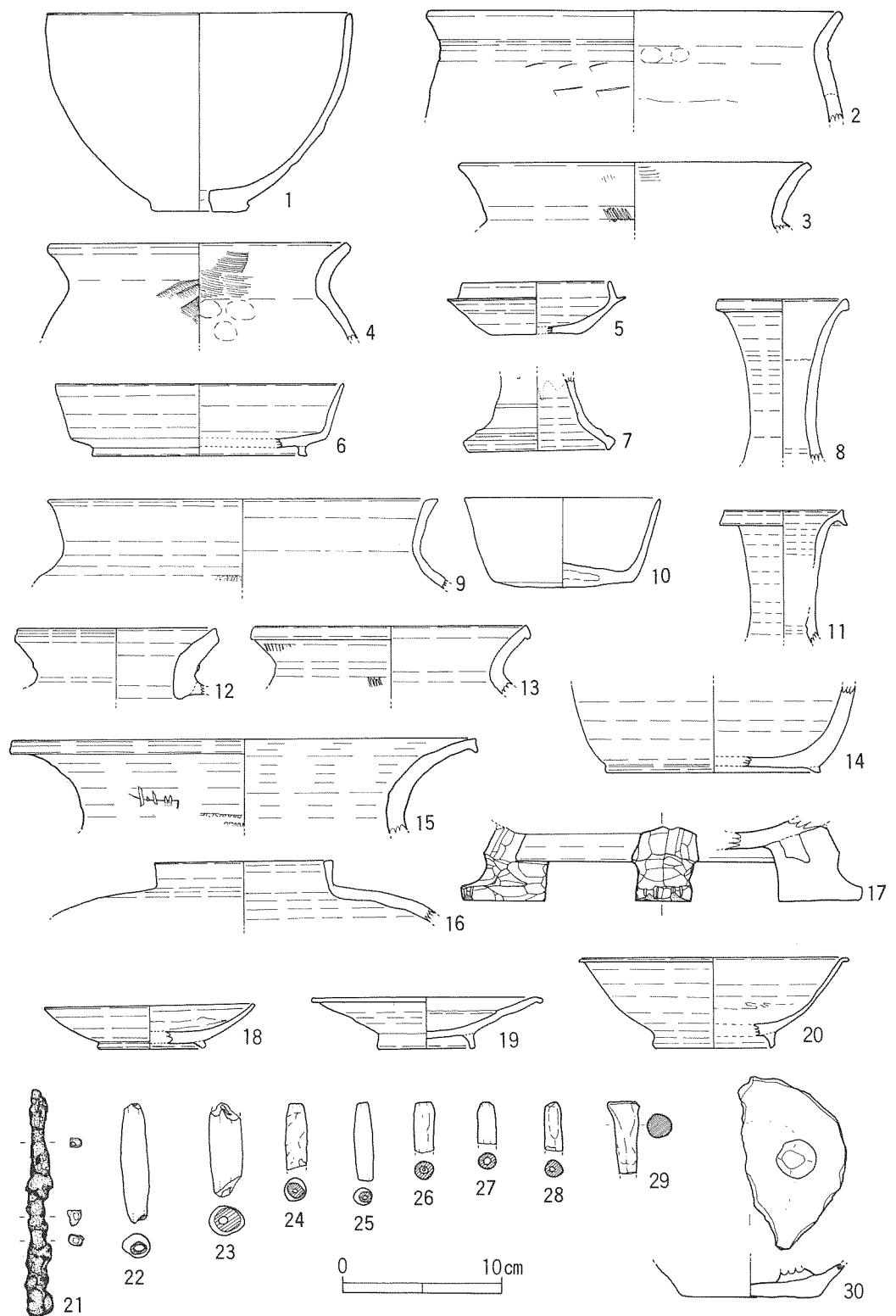
図版13 B区出土遺物



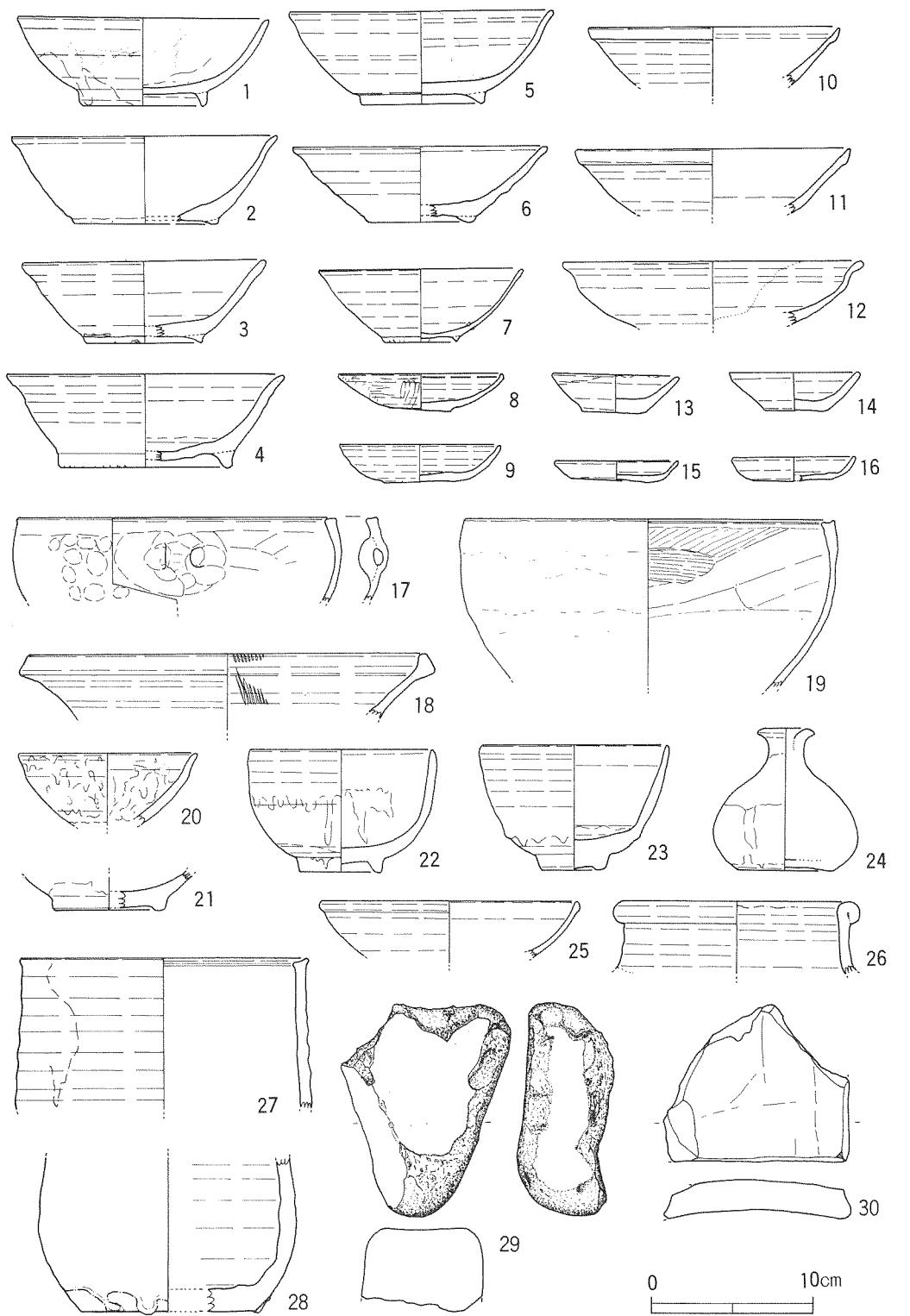
図版14 C区出土遺物



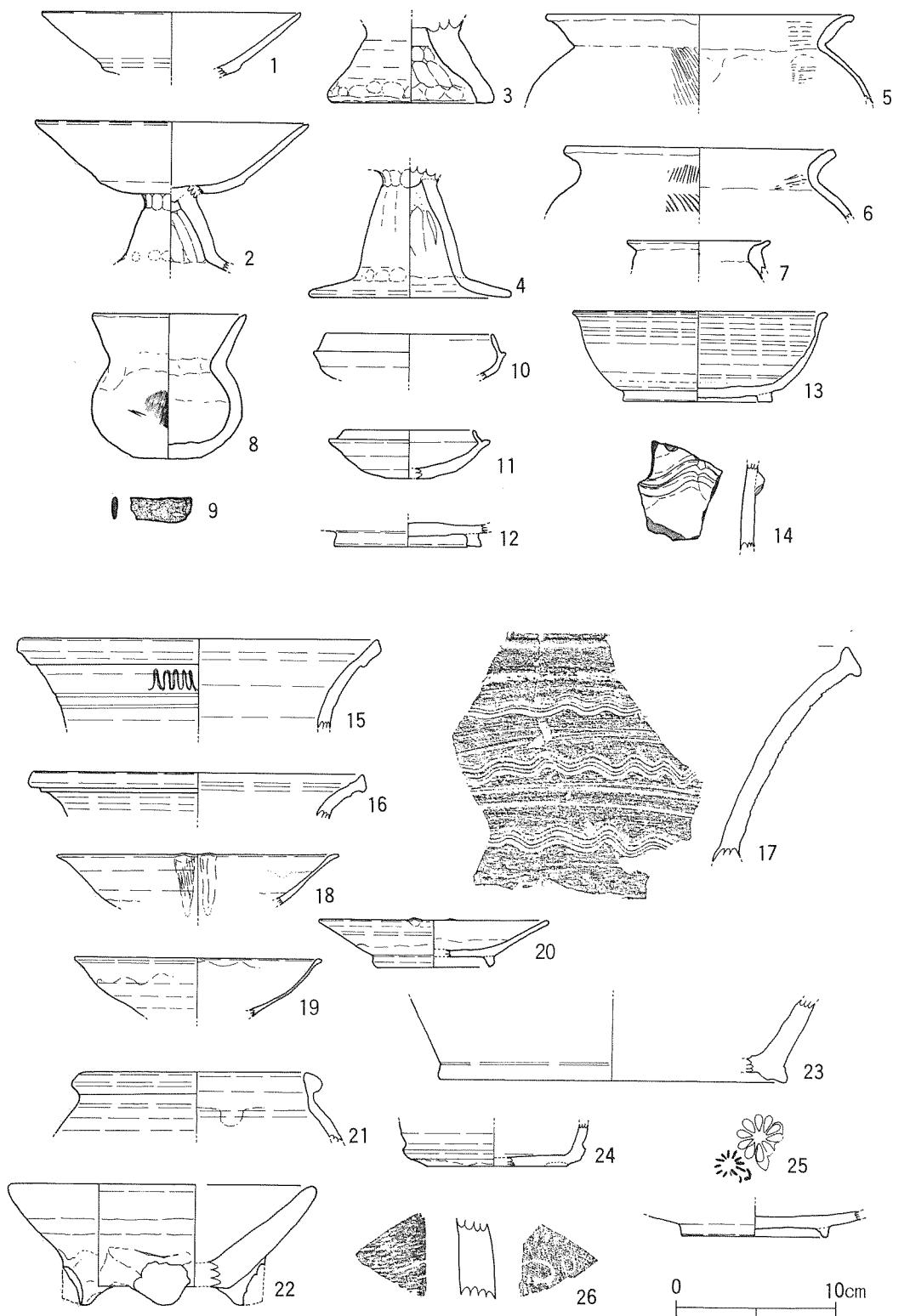
図版15 D区出土遺物



図版16 D区出土遺物



図版17 E・F区出土遺物



写真図版1 全景・A区

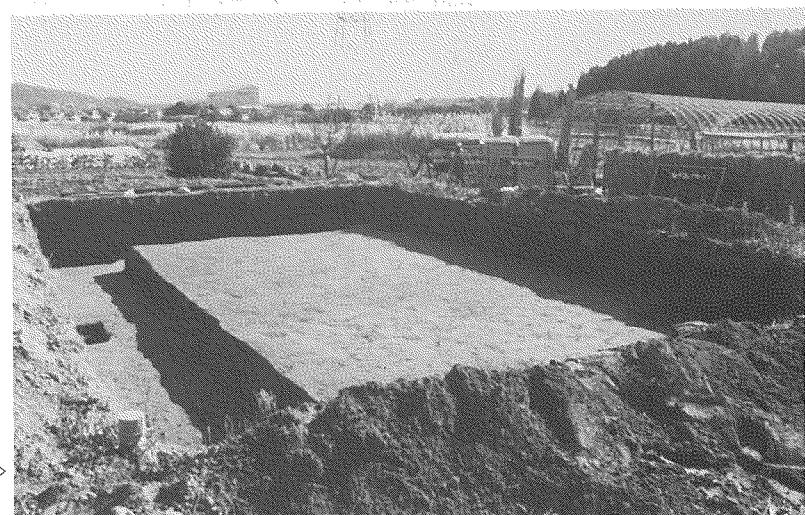
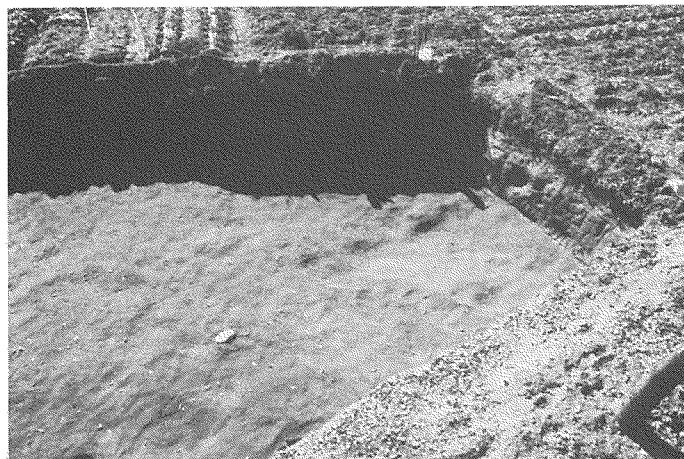


△遺跡全景(南西の守山高校屋上から)



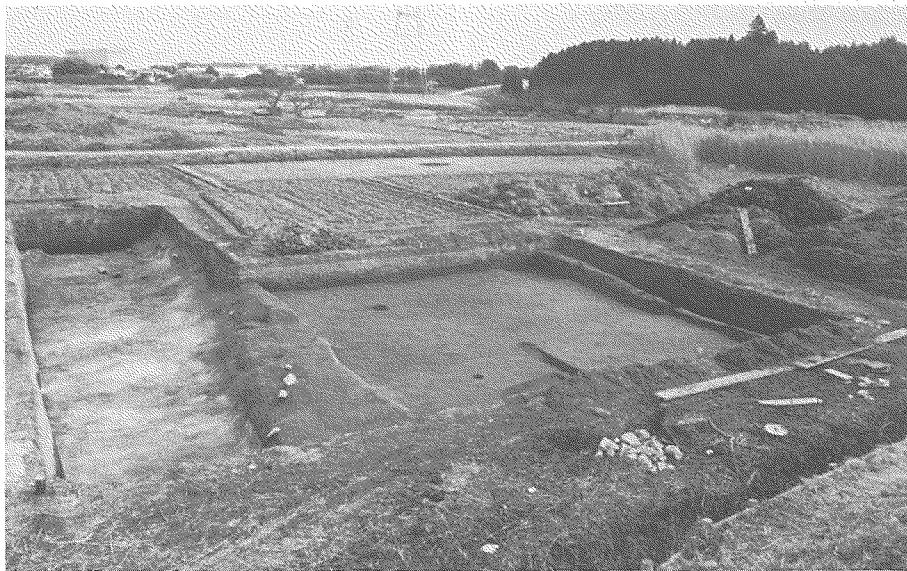
△A区東半部(西から)

写真図版2 A・B・C区



△C区(北西の庄内川堤防上から)

写真図版3 D・E・F区



△D区(西から)

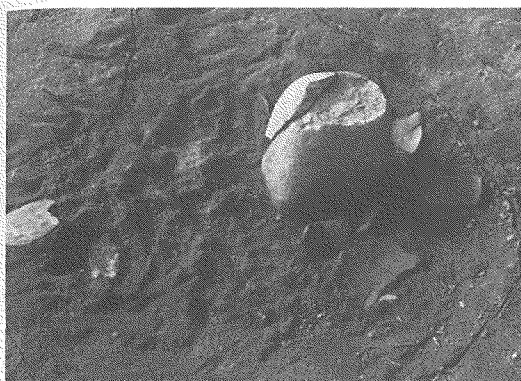


△E区(北から)



F区南西部△  
(北から)

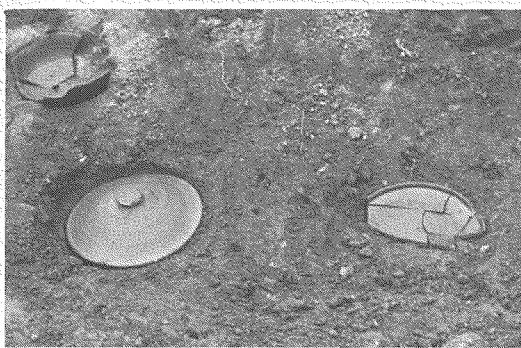
写真図版4 A・B区遺構等



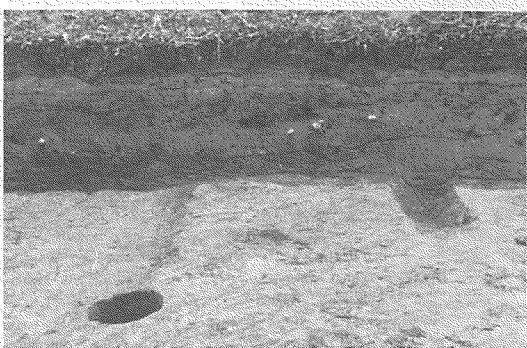
△A区 1BGr.焼土ブロック範囲



△A区 1AGr.遺物出土状況



△A区 4FGr.遺物出土状況



△A区 4EGr.P-1・2、D-1・2



△B区 1AGr.遺物出土状況



△B区 1BGr.遺物出土状況



△B区 K-1上部遺物出土状況

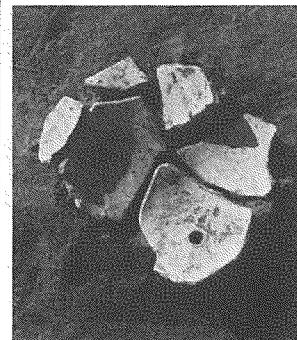


△B区 K-2

写真図版 5 D区遺構



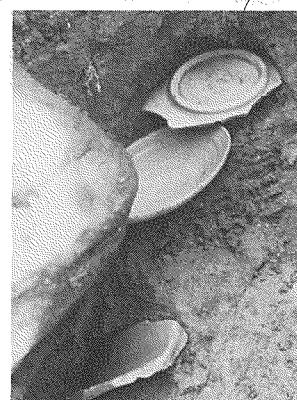
△D区 K-301  
(北から)



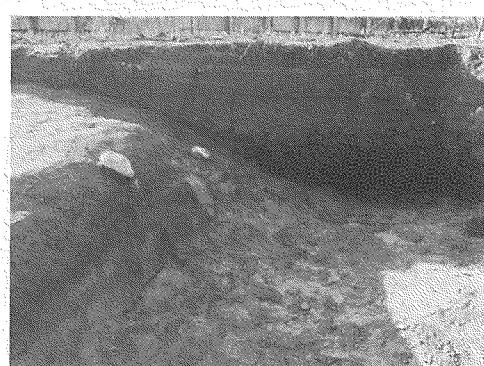
△同遺物出土状況



△D区 A・B溝セクション(西から)



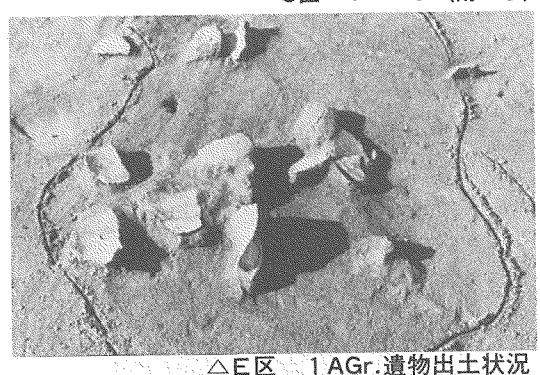
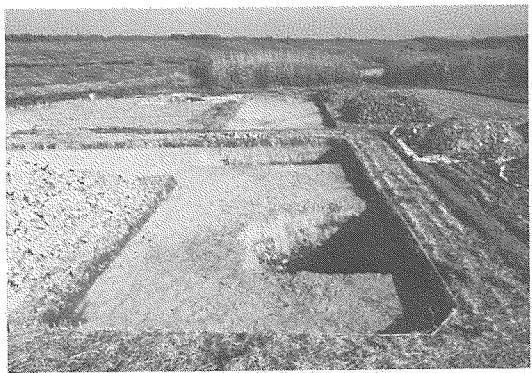
△A溝遺物出土状況



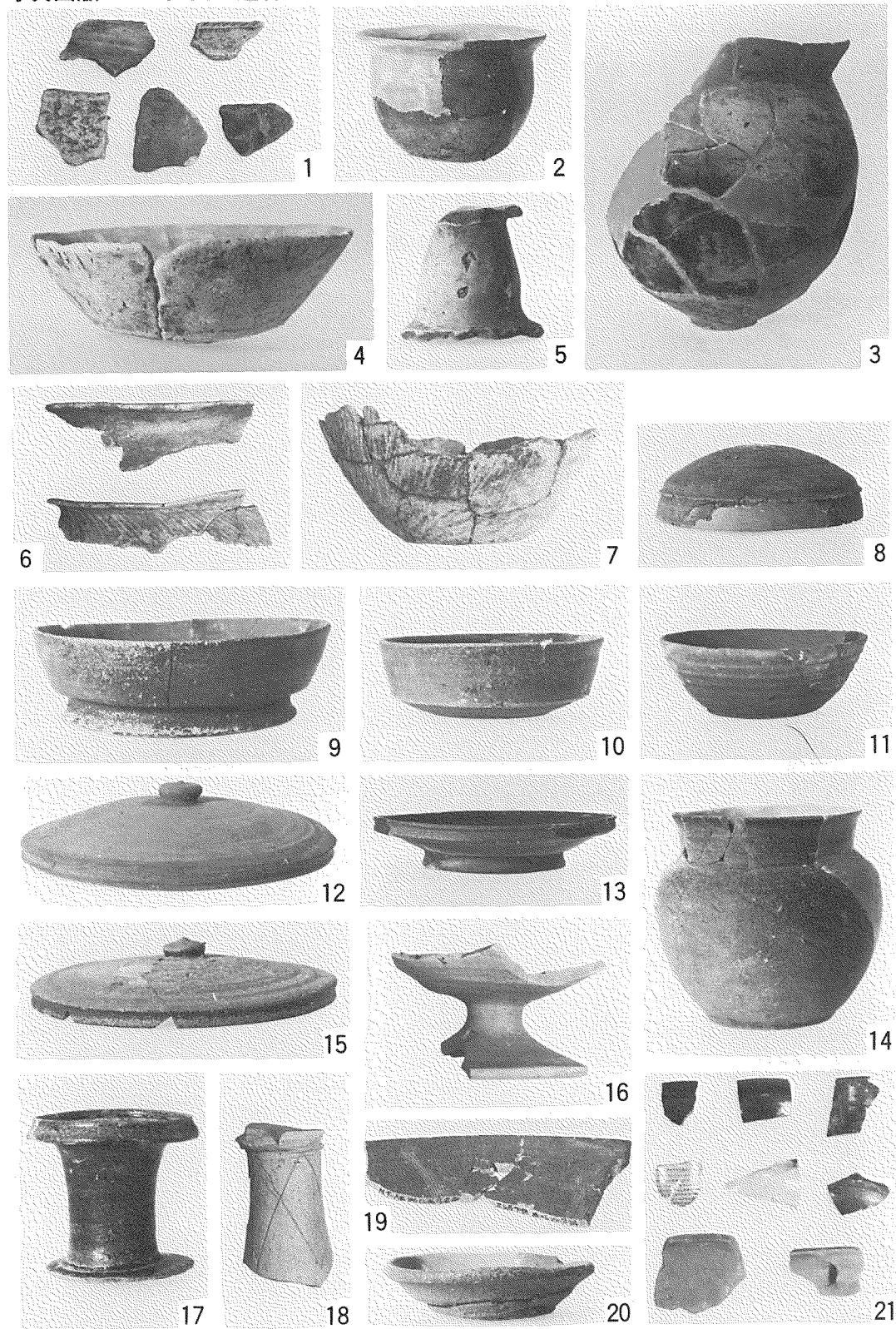
△C溝セクション(東から)

△D区 C溝(西から)

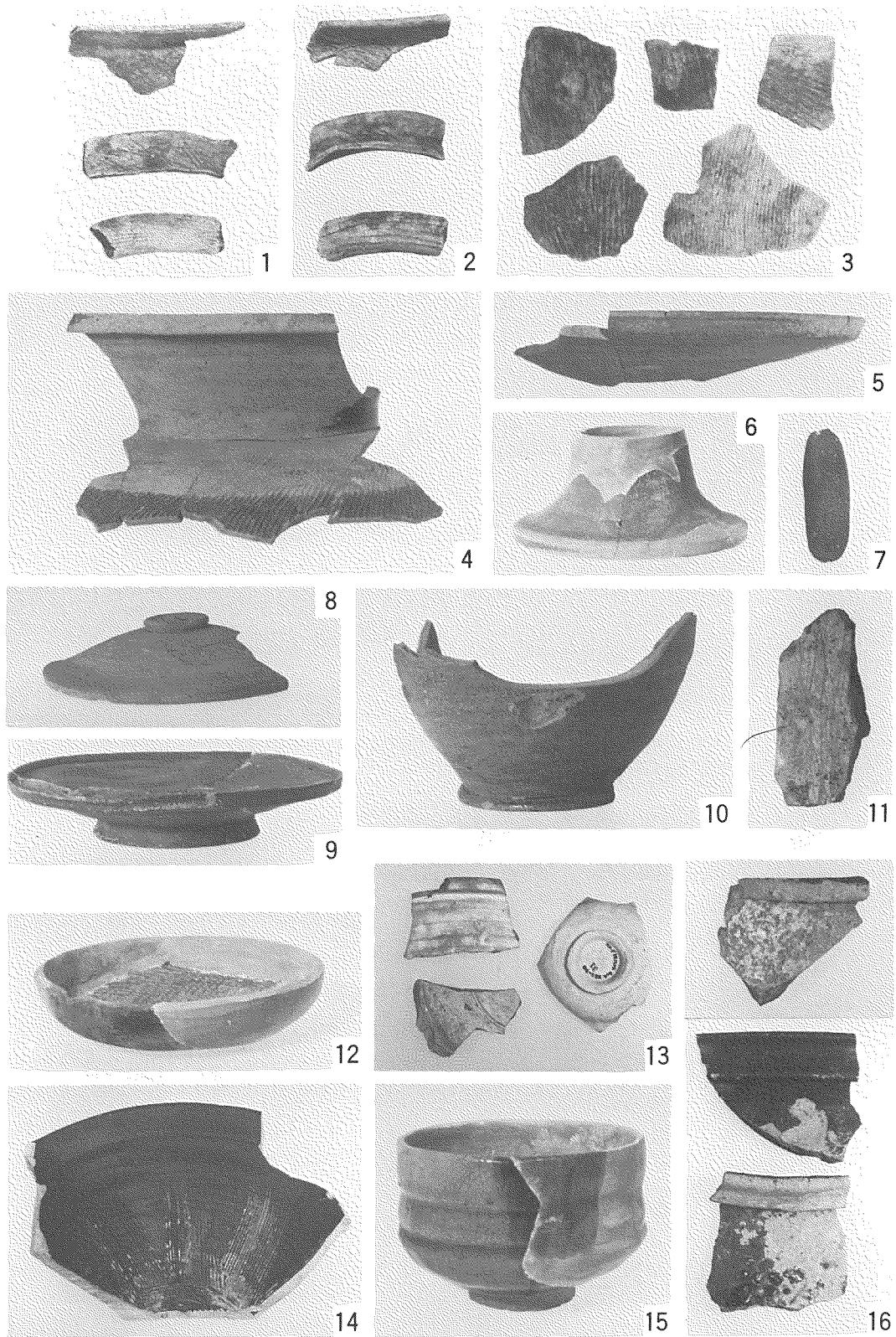
写真図版6 C・E・F区遺構等



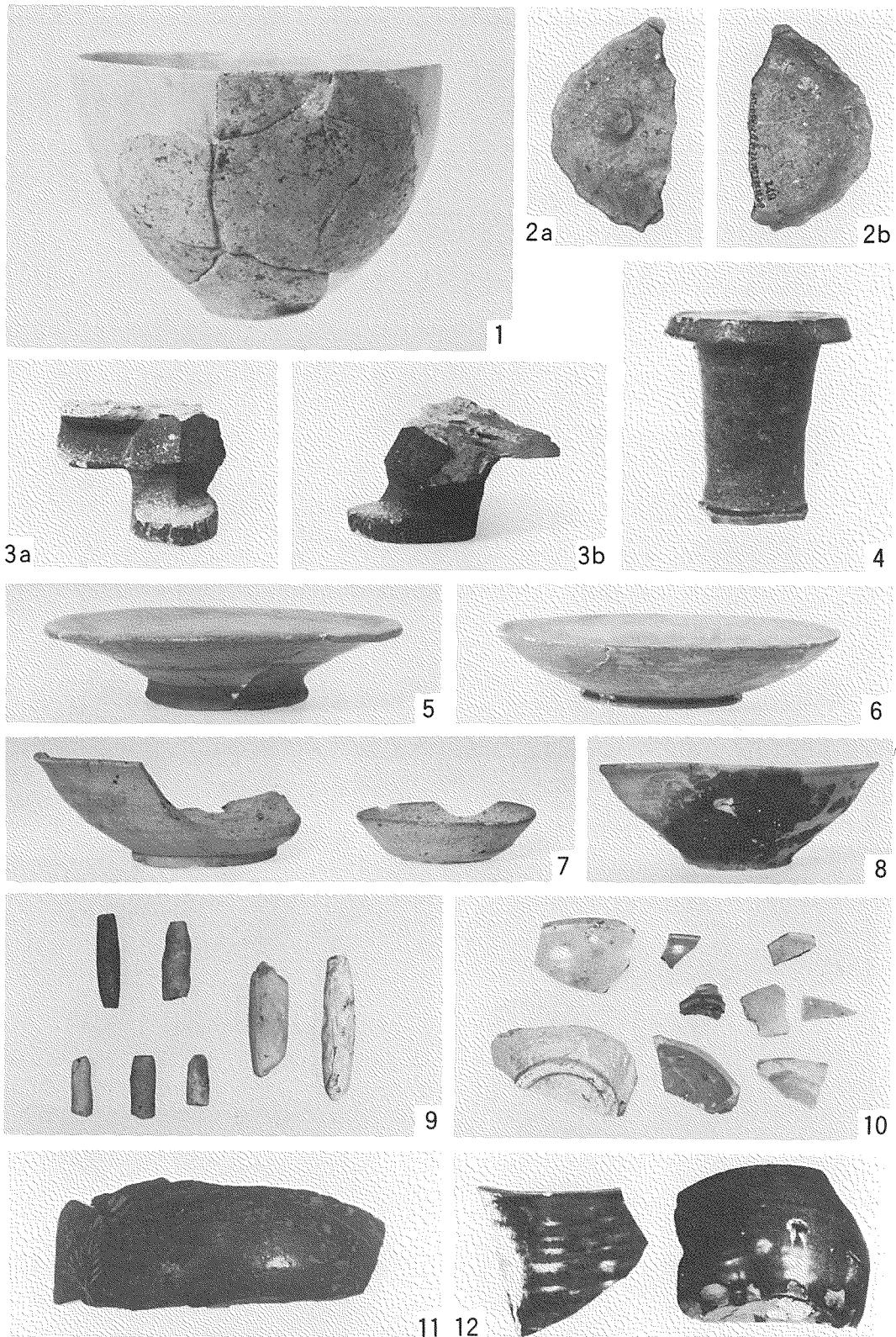
写真図版7 A区出土遺物



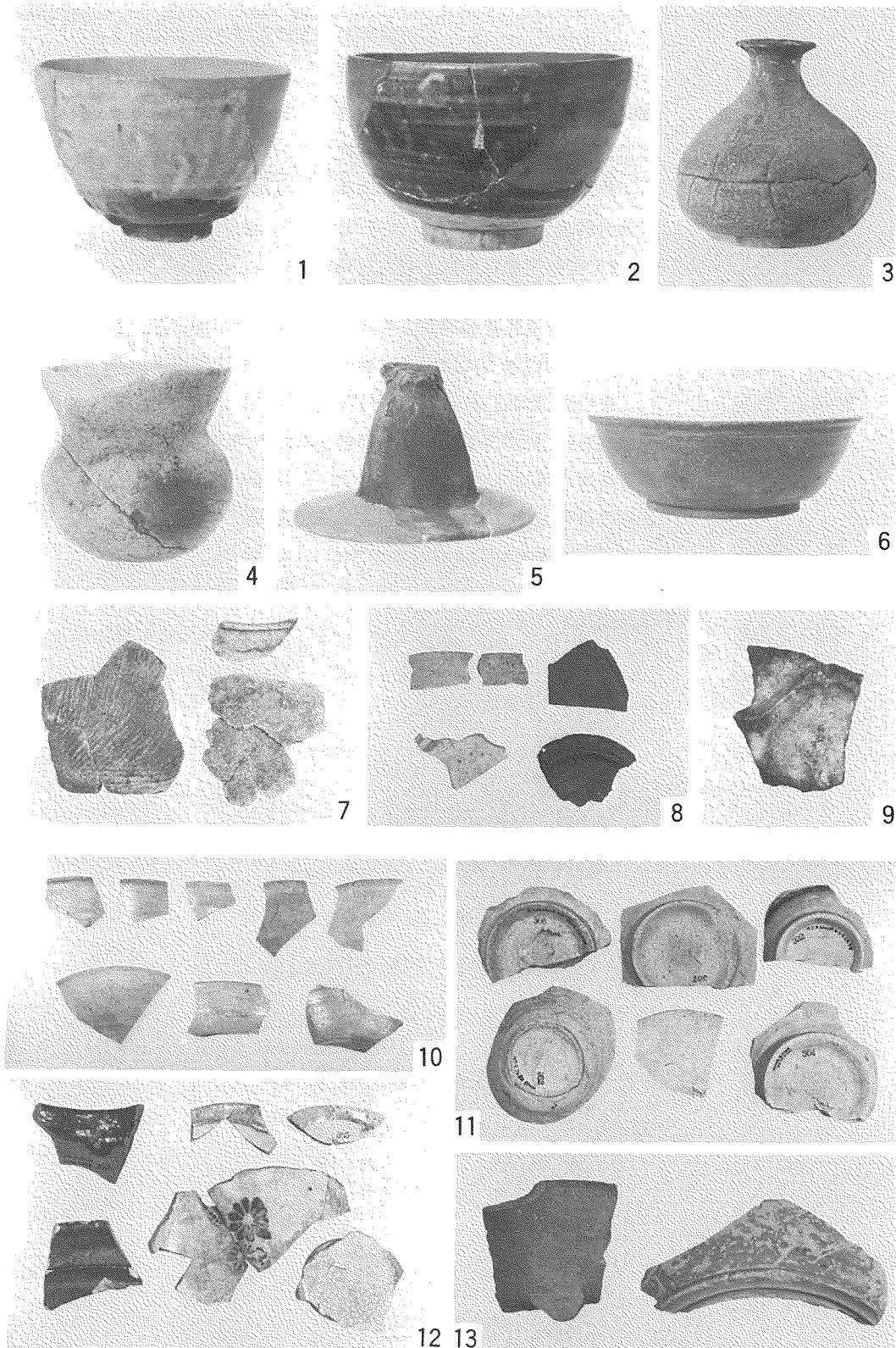
写真図版 8 B・C区出土遺物



写真図版9 D区出土遺物



写真図版10 D・E・F区出土遺物



## 名古屋市文化財調査報告 既刊目録

I	名古屋市千種区	東山H-101号古窯跡発掘調査報告	1973	品切
II	名古屋市 中 区	古沢町遺跡発掘調査報告—弥生編—	1974	〃
III	名古屋市千種区	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974	〃
IV	名古屋市 緑 区	有松町並み調査報告	1975	〃
V	名古屋市 緑 区	NKI-34号古窯跡発掘調査報告書	1975	〃
VI	名古屋市 緑 区	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告	1976	〃
VII	名古屋市昭和区	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1976	在庫
VIII	名古屋市守山区	小幡古墳発掘調査報告書	1980	〃
IX	名古屋市 緑 区	NN-278号古窯発掘調査報告書	1981	品切
X	名古屋市内の山車と神楽	民俗文化財調査報告書	1981	在庫
XI	名古屋市 緑 区	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981	〃
XII	名古屋市 緑 区	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982	〃
XIII	名古屋市 緑 区	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983	〃
XIV	名古屋市守山区	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984	〃
XV	名古屋の石造物		1985	新刊
XVI	名古屋市天白区	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985	〃

名古屋市文化財調査報告 XVI

### 天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書

1985年7月1日 印刷・発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館  
発行 名古屋市教育委員会  
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号  
印刷 株式会社刈谷高速印刷  
名古屋市西区名駅二丁目18-15